聖書の預言による

メシヤ

トニー・アラモ著

本書では、口語訳聖書、新改訳聖書、リビングバイブル、原文のアラム語、ヘブライ語、ギリシア語、及び欽定訳聖書英訳を参考資料として使用しています。

目次

はじめに 2

一. メシヤの信任状 18

二. メシヤの生涯と、その務めに
関する預言 35

三. メシヤの預言に見られる
預言的逆説 46

四. メシヤ(イエス)の苦難、死、復活に
関する預言
(1) 詩篇22章 62
(2) イザヤ書53章 68

五. メシヤの役割を記す預言 82

六. 旧約・新約聖書におけるメシヤ(イエス)
の神性 91

七. イエスにおいて成就した、旧約聖書の
象徴と間接的預言 100

文書に見られる最も偉大な奇跡

聖書の預言による
メシヤ

「預言者たちも皆、イエスについて証言しています」(使徒行伝10:43)。「私のことは書物〔聖書〕に記されています」(詩篇40:7、ヘブル人への手紙10:7)。

はじめに

人類史上例を見ない**最も驚くべき劇的な話とは**、旧約聖書に預言として、そして福音書（新約聖書のはじめの四つの書）に伝記として記されているメシヤ・イエスの話です。イエスを他のものから完全にかけ離れた存在にしているのは、イエスについてのさまざまな傑出した真実のひとつ、つまりイエスがこの世に生まれる前に、明瞭かつ詳細にその出生・生涯・死・そして復活を預言された世界歴史上唯一の人物であるという事実です。その詳細は、彼がこの世に生まれる何世紀も前から広く出回っていた文献に書かれていました。そしてこれらの文書が、彼の生まれるずっと前から幅広く流布していたという事実に抗議する者は一人として存在しません（というよりも、抗議できる者は一人もいないのです）。自分の目で、彼の生涯の記録をこれらの古代文書と比較すれば、その内容が完全に一致しているということに誰もが気付くはずです。反論する余地の無いこの奇跡における傑出した事実は、それらがすべて、世界史上における特定の一個人だけを対象に起ったということです[1]。

ここで、上記の文学的奇跡が持つ無比の驚異に注目してみましょう。よ

1. 多くの聖書研究家がこの驚くべき事実に注意を促しました。イエス誕生の数世紀も前に、彼の苦難と栄光、彼の出生、生涯の務めが、すべて詳細にわたって旧約聖書に記されていたのです。家系、出生時、先駆者、出生地、出生方法、幼時期、成人期、教え、人格、務め、伝道、承認されたこと、拒絶されたこと、死、埋葬、復活そして昇天が、最も驚くべき方法で、人間としてこの世に生まれる何世紀も前に書かれた人物は、イエスしかいないのです。

「まだ生まれない人の絵を描くことが、誰にできたろうか。これはまさに神、神のみわざに他ならない。シェークスピアが生まれることを、500年前に知る者はなかったし、ナポレオンが生まれることを、250年前に知っていた人間など一人もいなかった。にもかかわらず、聖書の中には、一人の人間の姿が鮮やかなに描かれている。それも一人によってではなく、20人あるいは25人の、この人物に一度も会ったことのない芸術家たちによって描かれたのである」。

く考えてみてください。ジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーン、あるいは他の人物の、出生何百年または何千年も前に、その一生涯を誰が記述し得たでしょう。メシヤ・イエスの生涯に関する事実が、彼の誕生前に書かれていたという驚異的奇跡に相当する文献など、非宗教的であろうが、宗教的であろうが、世界中のどこからも見つけ出すことはできないはずです。このような未来の肖像を描くための啓示は、この世の芸術家のアトリエからではなく、天のアトリエから受けたものとしか考えられません。メシヤの生涯が何世紀も前に書かれ、それがナザレのイエスにより完璧に実現されたというこの奇跡は、あまりにも驚くべきことであり、まさに、全知の神のみが予知でき、神の力のみが実現し得たものです。本書に示される証拠を考察する思慮深い読者には「預言は決して人意によるものではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からの言葉を語ったものである」（ペテロの第二の手紙1:21）ということに同意して頂けると信じています。

事実が証明する偉大な四つの真実

旧約聖書に記されている、来るべきメシヤに関する預言と、新約聖書のナザレのイエスにおいて実現した事柄との間に、矛盾や食い違いは全くありません。読者の方は、預言としてこの肖像を描いた手が、歴史においてもその人物を作り上げたという結論に直観的に達すると思います。この事実から生まれる必然的な結論は次の4つです。

(1)この事実は、聖書が霊感による神の御言葉であることを証明します。なぜなら、このような文学的驚異を人間の独力で書いたり実現したりすることは不可能であるからです。

(2)この事実は、最初から一部始終をご存知であり、ご自分の言葉すべてを成就する力を持たれる唯一の存在である聖書の神が、生きている真実の神であることを証明します。

(3)この事実は、聖書の神は人類が自由意思を持っているにもかかわらず将来を預言できる全知の神であり、人類に広まる不信仰、無知、反乱の最中（さなか）に自らの言葉を完璧に成就できる全能の神であることを実証します。

(4)この事実は、完璧かつ完全に旧約聖書の預言すべてを成就したナザレのイエスが、紛れもなくメシヤ、世界の救世主、生ける神の息子であることを実証します。

メシヤ・イエスは歴史の核心

メシヤ・イエスは、聖書の主要なテーマであると共に、全歴史の核心であるとされています。新約聖書のイエスは預言の結実です。そして真のキリスト教は、その計画が実現されたものであり、その最初の枠組は、イエス出生の1,500年以上前に描かれたのです。

成就された預言は、聖書独自のもの

成就された預言は、聖書以外に存在しません。これは、聖書が神の霊感によって書かれたものだという、肯定的、確定的かつ圧倒的な証拠です。この論拠の概要は次のとおりです。神の霊感の手助けなしに、将来を予知できる人間など存在しません。将来を予知することは人間には打ち破れない壁(「鉄のカーテン」)だからです。全知全能の神だけが確実に将来を預言することができます。このため、聖書に書かれているような真の預言と、その成就の正当性を証明するために、預言と成就の間にそれなりの時間が挟まれており、その預言に明瞭な詳細が含まれているのです。これらの点も、その預言が単に推測ではないことを証明しています。旧約聖書の最後の本でメシヤに関する預言がなされた時から、新約聖書のはじめの４つの書において、イエスがそれらを成就する時までに、400年という年月が挟まれていたことを心に留めておいてください[2]。もちろん、多くの預言は紀元前400年よりはるか前に書かれたものです。モーセの時代(紀元前1500年)からマラキの時代(紀元前400年)までの1,100年間に、一連の預言者が現れ、メシヤに関する預言が与えられたのです。その時代の預言者は皆、来るべきメシヤに関する証言をしました。さらに、エデンの園のアダムとイブへ、そしてその後モーセの時代まで、他の多くの者たちに伝えられたメシヤ・イエスの預言もあります。

これらの旧約聖書の預言はあまりにも数多く詳細であり、新約聖書における成就はあまりにも完全なため、メシヤに関する預言を皆がしっかりと学べば、不信心者などはこの世からいなくなるでしょう。同様に、もし預言・成就に関するこの事実が完全に理解されれば、疑惑を抱く弟子(信者)もいなくなるでしょう。メシヤ・イエスを取り巻く預言を実際に勉

2. 紀元前約200年の旧約聖書ギリシア語訳である「**セプトゥアギンタ**(七十人訳聖書)」は、旧約聖書の最終版と新約聖書の初版の間に長い年月が存在した証拠として残っています。このギリシャ語訳は紀元前280年頃に、プトレマイオス・フィラデルフォス統治下で翻訳が開始され、その後まもなく完成しました。全旧約聖書のギリシャ語訳が紀元前200年以上前に出版されたことから、原典である旧約聖書がさらに古いことは明白と言えます。

強したことのある懐疑論者や批評家にはまだ出会ったことがない、というのが事実です。真に、イエスは「神の永遠の岩であり、わが信仰の堅固なる礎」なのです。

「預言」とは、神が聖書に含まれるご自身の言葉の真実性を証明なさる独自の方法

聖書の教えによると、天国にしろ、地獄にしろ、人の永遠の運命はイエスを救い主として受け入れ、聖書に書かれた彼の戒律を守るか否かにかかっています。この教えは、他のいかなる宗教の教えとも大きくかけ離れており、きわめて重要なものです。ですから、その聖書が、本当に天の法令なのか、絶対的・決定的な神の御言葉なのか、その聖書のメッセージがすべて神の啓示によって書かれたものなのか**知る**権利が私たちにはあります。聖書の中で自らの意志を示しておられる神は、聖書が実際に神の意志の啓示であるということも、疑う余地のない方法で、人類に示してくださっています。神は、平均的な知能を持つ人たちなら誰でも理解できる方法を選んで、聖書がご自身の御言葉であることを人類に示されました。その方法とは、特定かつ詳細な預言を与え、成就させることです。それは神がお話しになったということを、全人類に知らせるための証〔つまり、証印のようなもの〕なのです。この証印は絶対に偽造することができず、神からのものであることを証明するために真実に添えられています。自由意志を持ち知能を持った人類の行動に関する神の予知能力は、人間の理解を超える神の特長のひとつであるばかりか、神の身にそなわった属性でもあるのです。

真の神は、イザヤの時代に知られていた偽の神たちに挑み、真の神は「あなたたちの訴えを出しなさい…。あなたたちの説得力のある論拠を持って来なさい…。これから起こる事を告げなさい。…来たるべき事を私たちに聞かせなさい。これから起こる事を告げなさい。そうすれば、われわれは、あなたたちが神であることを知るでしょう」(イザヤ書41:21-23)と言われました。

イスラム教や仏教のように、見せかけの奇跡によって主張する偽の信仰もあります。しかし、聖書以外は、これまで世界史上に存在してきたいかなる宗教も、預言をするという思い切った試みを行ったことは一度もありません。

「新しい事を、…それが起こる前に」(イザヤ書42:9)断固として宣言で

きるのは、「主であり、創造主」(イザヤ書40:28)である全知の神、全能者であられる神の特別な栄光です。神は「私は**主**、これが私の名。私の栄光を他の者に与えはしない」(イザヤ書42:8)と仰せになります。真の神だけが将来を予知し、預言を行うことができるのです。そして、その神が、聖書を通じてのみ預言を人類に与えるとお決めになったのです[3]。ユダヤ人、イスラエルを囲む非ユダヤ国家、古代都市、教会そして終わりの時など、聖書には神が預言なさる題目が数多くありますが、神の預言とその成就の完璧さは、メシヤ・イエスに関する預言に最もよく表れています。

神だけが唯一(聖書のみを通じて)、真の預言を与えられたことを示す明らかな御言葉が、ここにあります。「私が神である。他には神はいない。私のような神はいない。私は、**初めから終末を告げ**、まだ成されていない事を昔から告げ、『**私のはかりごとは成就し、私の望む事はすべて成し遂げられる**。』と語る」(イザヤ書46:9-10)。神だけが唯一、預言を与え、成就することができるという神ご自身によるこの御言葉は、聖書の中にしか見られませんが、聖書全体を通じて何度も繰り返されています(イザヤ書45:1-7、テモテ第二3:16、ペテロ第二1:19-21、申命記18:21-22、イザヤ書41:21-23、エレミア書28:9、そしてヨハネ13:19参照)。

「ある事象が存在するはるか前にその到来を宣言し、それを実現させるということ自体、神のみわざ以外の何ものでもない」という真実の大いなる力を、心の中に書き留めてください。

預言が「偶然に実現すること」などありえない

預言が成就されたという事実と、その含意を避けようと必死になっている無神論者や他の不信者は、新約聖書で成就した旧約聖書の預言が「偶然だった」、「運が良かった」、「たまたま符合した」と主張してきました。しかし、細部に渡る預言が実現したことは「偶然」でなどではありえな

3. 多くの者が将来を預言しようと努力してきましたが、成功した者は一人も存在しません。聖書のみが将来を預言することに成功したのです。「正当性の証明が可能な預言が究極的に困難なことは、『マザー・シプトンの預言』として知られる未推敲の韻文を参考にすると分かるかもしれない。数年前に『マザー・シプトンの預言』が太古の名残として現われ、蒸気機関車の発明や、英国政治で〔英国の首相となる〕ベンジャミン・ディズレーリが頭角を現すことなどを預言したと主張した。私には以前から、これが大胆なまやかしのように思え、それを証明し、暴露しようと試みてきた。そして成功したのである。…私は、自らをこのいたずら預言の著者であると認めたチャールズ・ヒンドリー(英国)という人物を発見するまで、あらゆる面から詳細に調査した。(この韻文が書かれたのは1448年ではなく1862年となっていた)。2,000年来の預言に疑いを持つ人々が、何の抵抗もなく、予言された出来事が起こった**後**で出版された偽物をうのみにして、著作年月日を確めもしなかったのだ。この事実は、人間のひねくれた特性を暴く、驚くべき証拠のひとつである」(A・T・ピールソン博士)。

いのです。「大まかなものなら、でまかせによる預言が偶然にあたり、その結果、本物の預言と見なされることもあるだろう。しかし、具体的な時間・場所・それに伴う出来事の**細目**のいくつかでも指定しようとすると分かるとおり、偶然が幸運によって成就する可能性がほとんどないことは明白である。実際、全く不可能である」とある作家は言います。古代の異教徒の偽の預言には、常に、詳細な項目を一、二件に限定し、最も概略的で曖昧な言葉を並べる工夫がなされています。**明白な言語で詳細が述べられ、それが一部でも成就した預言の実例など**、聖書を除いては、歴史を通して**ひとつもありません**。メシヤ到来の詳細を説明しているメシヤ・イエスの第一の到来に関する預言の数が、旧約聖書に(数百件でなく)50件しかないと仮定してみてください。確率論に基づいた数学者の計算によると、偶然成就の可能性は、1,125兆分の1未満なのです。さらに、これら50の預言に成就すべき**時**と**場所**のわずか2要素を追加すると、**それらが偶然によって実現する確率は、数字ではとても表しきれません**(または、人間の頭では考えられません)。そして、メシヤに関する預言はすべて、イエスによって満たさているのです。読者の方々も、不信者たちが預言を否定する機会を失い、「**偶然**」という口実をあきらめざるをえないだろうと思われるはずです。

イエスの処女降誕・罪なき聖なる生涯・復活と昇天など、メシヤに関する預言の多くは、本質的に**神のみ**が成就**できる**ということを、もう一度深く考えてみましょう。**神の力によってのみ**、イエスは処女から誕生し、死からよみがえることができたのです。

来るべきメシヤ

旧約聖書中には「メシヤは必ず来る」という明瞭な教えが、何度も登場します。次に挙げる神の約束も、何十回も登場します。「見よ。**あなたの王が来られる**」(ゼカリヤ書9:9)。「神である主は来られる」(イザヤ書40:10)。「あなたたちが尋ね求めている主が、突然、彼の神殿に来る」(マラキ書3:1)、そして「あなたの神、主は、あなたのうちから…ひとりの預言者をあなたのために起こされる」(申命記18:15)。イザヤ書では、私たちすべての罪を負われる方について、主が「エッサイの根株から新芽が生え」る(イザヤ書11:1)と記しています(イザヤ書53:6を参照)。古代の預言者たちは「すべての国々の願い〔メシヤの到来〕」が現実のものとなる時のこ

とを頻繁に話しています(ハガイ書2:7、および創世記3:15、49:10、民数記24:17、詩篇2:6、118:26、イザヤ書35:4、62:11、エレミア書23:5-6)。

メシヤ・イエスの到来は聖書の主題

旧約聖書で約束され、新約聖書で実現した、メシヤ・イエスの誕生・罪のない生涯・活動・教え・苦難・死・そして復活を含む到来が、聖書の中核を成しています。イエスは旧約・新約聖書を結ぶ絆です。旧約聖書は新約聖書の中で明らかにされ、新約聖書は旧約聖書の中に秘められているのです。

聖書の読者は誰もが、以下の内容を深く理解するだろう

最も一般的な読者でも、全旧約聖書、創世記からマラキ書まで読めば、啓示が緩やかな進展をたどって細部まで明らかにされ、ついには、来るべき方の姿が完全に浮き彫りになるまで、メシヤの人格と活動に関する古代からの独特な預言を検討することができます。そして次に、心に焼き付いているその方のイメージを持って、マタイ書をはじめとする新約聖書に移り、その中の**歴史的**人物、すなわちナザレのイエスと、旧約聖書で**預言されている**メシヤに関する内容のすべてと比べ、それらがどのように一致しているか見ることができるのです。旧約聖書の預言者たちと新約聖書の書き手たちがお互いに連絡を取れたはずがなかったにもかかわらず、二者の間には全く誤差がないのです。ここで考えていただきたいのは、私が、聖書以外のどの参考文献にも言及していないということです。私は、旧約聖書で神秘的な来るべきメシヤといわれる人格と、旧約聖書の預言を実現し、その神秘性を取り払ったイエスといわれる人物の二方(ふたかた)を比較しただけです。イエスはこの地に人間として存在し、内におられる神の命の聖霊によって、モーセと預言者が、メシヤについて書いたことを実現したのです。読者の方々がたどり着く、否定しようのない必然的結論は、この二者が絶対的に同一であるということです。

預言の概要

旧約聖書の預言と新約聖書における成就の間で一致する事柄から、特に際立った類似点のいくつかを簡単にたどってみましょう。救いは、旧約・新約聖書の中心人物である一個人、すなわち約束されたメシヤに

よって実現されることになっていました。メシヤは「女の子孫」であり〔メシヤは処女から生まれ〕、サタンの頭を踏み砕くことになっていました(創世記3:15をガラテヤ人への手紙4:4と比較参照)。彼は、アブラハムの子孫(創世記22:18をガラテヤ人への手紙3:16と比較参照)、ダビデ王の子孫(詩篇132:11、エレミア書23:５を使徒行伝13:23と比較参照)として、ユダの部族から誕生することになっていました(創世記49:10をヘブライ人への手紙7:14と比較参照)。

メシヤは、ある特定の時期に来られ(創世記49:10、ダニエル書9:24-25をガラテヤ人への手紙4:4と比較参照)、ユダヤのベツレヘムで(ミカ5:2をマタイによる福音書2:1、ルカによる福音書2:4-6と比較参照)処女から生まれることになっていました(イザヤ書7:14をマタイによる福音書1:18-23、ルカによる福音書1:27、35と比較参照)。偉大な人物が、メシヤを訪れ崇拝することになっていました(詩篇72:10をマタイによる福音書2:1、11と比較参照)。そして、嫉妬に燃える王の怒りによって、罪のない子供たちが虐殺されることになっていました(エレミア書31:15をマタイによる福音書2:16-18と比較参照)。

洗礼者ヨハネは、メシヤの先駆者となるよう定められていました(イザヤ書40:3、マラキ書3:1をマタイによる福音書3:1-3、ルカによる福音書1:17と比較参照)。

メシヤはモーセのような預言者で(申命記18:18を使徒行伝3:20-22と比較参照)、特別な方法で聖霊が注がれている方と定められていました(詩篇45:7、イザヤ書11:2-4、61:1-3をヨハネによる福音書3:34-36、マタイによる福音書3:16-17、ルカによる福音書4:15-19、43と比較参照)。メシヤは、祭司メルキゼデクのような祭司になると定められていました(詩篇110:4をヘブライ人への手紙5:5-10と比較参照)。メシヤは「主のしもべ」として、ユダヤ人のためにも非ユダヤ人のためにも、忠実で耐え忍ぶ救い主になると定められていました(創世記17:5、イザヤ書42:1、6をマタイによる福音書12:18、21と比較参照)。

メシヤの務めはガリラヤにはじまり(イザヤ書9:1-2をマタイによる福音書4:12-17、23と比較参照)、その後、救いをもたらすためにエルサレムに行き(ゼカリヤ書9:9をマタイによる福音書21:1-10と比較参照)、神の神殿に足を踏み入れることになっていました(ハガイ書2:7、9、マラキ書3:1-2をマタイによる福音書21:12、コリント人への第一の手紙

3:16-17、6:19、コリント人への第二の手紙6:16-18、エペソ人への手紙2:18-22、黙示録3:20と比較参照)。

主に対するメシヤの熱意は、旧約・新約聖書に記されています(詩篇69:9をヨハネによる福音書2:15-17と比較参照)。メシヤはたとえ話で物事を教え(詩篇78:2をマタイによる福音書13:34-35と比較参照)、その務めは奇跡により他と区別されることになっていました(イザヤ書35:5-6をマタイによる福音書11:4-5、ヨハネによる福音書11:47と比較参照)。彼は同胞(ユダヤ人)に拒絶され(詩篇69:8、イザヤ書53:3をヨハネによる福音書1:11、7:5と比較参照)、ユダヤ人にとって「妨げの岩」「つまずきの石」になると定められていました(イザヤ書8:14をロ―マ人への手紙9:32-33、ペテロの第一の手紙2:7-8と比較参照)。

彼は、何の理由も無く嫌われ(詩篇22:6-20、イザヤ書53章、ゼカリヤ書12:10、詩篇69:4、イザヤ書49:7をヨハネによる福音書15:18-25、マタイによる福音書2:13、26:67-68、27:28-44、マルコによる福音書8:31、ルカによる福音書4:28-29、23:5、10-11、ヨハネによる福音書8:37、19章と比較参照)、支配者たちによって拒まれ(詩篇118:22をマタイによる福音書21:42-46、ヨハネによる福音書7:48-53と比較参照)、一人の友に裏切られ(詩篇41:9をヨハネによる福音書13:18、21と比較参照)、弟子たちに見捨てられ(ゼカリヤ書13:7をマタイによる福音書26:31-56と比較参照)、そして、銀貨30枚で売り渡されることになっていました(ゼカリヤ書11:12をマタイによる福音書26:15と比較参照)。彼を売り渡すために支払われた金は、陶器師から土地を買うために使われることになっていました(ゼカリヤ書11:13をマタイによる福音書27:7と比較参照)。メシヤは、頬を打たれ(ミカ書5:1をマタイによる福音書27:30と比較参照)、唾を吐かれ(イザヤ書50:6をマタイによる福音書27:30と比較参照)、嘲笑され(詩篇22:7-8をマタイによる福音書27:28-31、39-44と比較参照)、そして殴打されることになっていました(イザヤ書50:6をマタイによる福音書26:67、27:26、30と比較参照)[4]。

はりつけによるメシヤの死は詩篇22章に詳細に描かれており、私た

4. 預言と成就を比較した時、二者間があまりに一致しているため、私たち読者は強い感銘を受けます。たとえば、イザヤ書50:6を新約聖書の成就内容と比較してください。
預言:「打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、唾をかけられても、私は顔を隠さなかった」。
成就:「そうして、彼らはイエスの顔に唾をかけ、こぶしでなぐりつけ、他の者たちは、イエスを平手で打っ〔た〕」(マタイによる福音書26:67)。

ちの罪を償うために犠牲になってくださるという彼の死の**意味**は、イザヤ書53章に書かれています。彼の手と足は突き通されることになっていました(詩篇22:16、ゼカリヤ書12:10をヨハネによる福音書19:18、37、20:25と比較参照)が、彼の骨は一本も折られないことになっていました(出エジプト記12:46、詩篇34:20をヨハネによる福音書19:33-36と比較参照)。彼は喉の渇きに苦しみ(詩篇22:15をヨハネによる福音書19:28と比較参照)、酢を飲むよう薦められ(詩篇69:21をマタイによる福音書27:34と比較参照)、犯罪人として数えられることになっていました(イザヤ書53:12をマタイによる福音書27:38と比較参照)。

死後、彼の身体は富む者のように葬られ(イザヤ書53:9をマタイによる福音書27:57-60と比較参照)、その肉体は朽ちることが無く(詩篇16:10を使徒行伝2:31と比較参照)、死からよみがえり(詩篇16:10をマタイによる福音書28章、マルコによる福音書16章、ルカによる福音書24章、ヨハネによる福音書20章、使徒行伝13:33と比較参照)、神の栄光を受け、高い地位に昇られることになっていました(詩篇68:18をルカによる福音書24:51、使徒行伝1:9と比較参照。さらに詩篇110:1をヘブライ人への手紙1:3と比較参照)。

ここで述べていることは、旧約聖書のメシヤに関する預言と、新約聖書におけるその成就の簡単な要約であり、まったく完全なものではありません。多くの要点を検討しましたが、これらはほんの数例に過ぎません。旧約聖書には、来るべきメシヤに関する預言が何百もあることを覚えておいてください。

到来したメシヤ

旧約聖書の預言を成就したという事実についてのイエスご自身による証言

イエスの生涯が、その生前に先立ち、旧約聖書に書かれていただけでなく、新約聖書のイエスは、ご自分が旧約聖書の預言によるメシヤであることをご存知で、新約聖書においても、そのように証言されました。これ自体が、この世の他の文献にはない奇跡です。イエスは「あなたたちは…聖書を調べています。なぜなら、**その聖書が、私について証言しているからです**」(ヨハネによる福音書5:39)と言われました。シーザー、グラッドストン、シェークスピアをはじめとすると歴史上の人物について考えてみましょう。聖書はもとより他の本においても、このような発言をしよ

うと考えた者は、われわれの主イエス以外に存在しませんでした。偽のメシヤが自分の正当性を立証するために、こうして預言を成就したのだと主張した例もありません[5]。

従って、私たちは次の豊かで奥深い真実に直面します。真のキリスト教は、旧約聖書とは別の新宗教**ではなく**、旧約聖書にある神の約束を完全に**成就したこと**に基づいているのです。

イエスは「アブラハムは、私の日が来るのを知って、喜んだのです」(ヨハネによる福音書8:56)、「モーセが書いたのは私のことだからです」(ヨハネによる福音書5:46)と平然として言われました。その次に、旧約聖書の預言と新約聖書の成就の関係を示す目的で、丘の上で行われた有名な説教の中で、イエスは「私が来たのは律法や預言を破棄するためだと思ってはなりません。破棄するためではなく、**成就する**ために来たのです」(マタイによる福音書5:17)と述べられました。

イエスの一生は独特なものでした。あらゆる面で、旧約聖書の中で与えられた神の計画を担っていたのです。イエスは、神の意志をすべて満たし、救いの御業を成就し、イエスに関する預言をすべて**満たす**ために父なる神によって遣わされた方でした(ヨハネによる福音書3:16-17、ヨハネの第一の手紙4:14、ヘブライ人への手紙10:9)。

イエスが務めを始めた当初、メシヤの預言であるイザヤ書61:1-2を、ナザレにあるユダヤ教会堂の人々に読んで聞かせた後、周目の中で、「**きょう、この聖書の御言葉が、あなたたちが聞いたとおり実現しました**」(ルカによる福音書4:16-21)と言われたのです。

「ですから、キリスト[メシヤ]は、この世界に来て、こう言われるのです。『あなたは、いけにえや捧げ物を望まず、私のために、身体を造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと、罪のためのいけにえでは満足されませんでした』そこで私は言いました。『さあ〔だから〕、私は来ました。(聖書のある巻に、私について記されているとおり)神よ、あなたのみこころを行なうために』」(ヘブライ人への手紙10:5-7)。

サマリアの女性は、井戸でイエスに話しかけてこう言いました。「私は、メシヤが来られることを知っています」(これは旧約聖書の敬虔な読者

5. ユダヤ人の歴史の中で、40人を越える偽のメシヤが現れましたが、預言をひとつでも成就して正当性を証明した者は一**人も存在しません**。彼らは預言を成就する代わりに、敵に対する報復を約束したり、ユダヤ人の自尊心をくすぐる甘い言葉を使ったりして、自らがメシヤだと信じさせようとしたのです。しかし現在、少数の歴史学者を除いて彼らのことを知る者はおらず、彼らの名前は地球から消滅しました。その一方、**すべて**の預言を成就した真のメシヤであるナザレのイエスは、今でも何億という人たちによって崇拝されています。

が皆知っていたことです)。彼女はさらに「その方が来られる時には、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう」と付け加えました。それに対して、主イエスは「**それは、あなたと話している、この私です**」とお答えになられたのです(ヨハネによる福音書4:25-26)。

ペテロが、メシヤとしてイエスに対する信仰を告白した時、「あなたは、生ける神の息子キリスト〔メシヤ〕です」(マタイによる福音書16:16)と語りました。主イエスは「バルヨナ・シモン〔ペテロの別名〕、あなたは祝福されています。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にまします私の父〔があなたに明らかに示したの〕です」(マタイによる福音書16:17)、と答え、ペテロの言葉を真実と認められたのです。

イエスは、ご自分が「ダビデ王の子孫」(メシヤの肩書きのひとつ)であると示すため、またダビデ王が彼を主と呼んだことを証明するために、詩篇110を引用しました(マタイによる福音書22:41-46)。「人の子」という肩書きを自分に添えることにより、ダニエル書で使われているメシヤの肩書きはイエスに属するものだと示されたのです(ダニエル書7:13をマルコによる福音書14:62と比較参照。また詩篇8参照)。そして「神の息子」という肩書きを自分に添えることにより、詩篇2の中で使われているメシヤの肩書きも彼に属することが示されたのです。

イエスが言ったこと、行ったことのほとんどすべてが、旧約聖書の預言と何らかのつながりを持っています。彼の行った奇跡は旧約聖書の預言の実現であり(イザヤ書35:5-6)、そして、彼の務めはイザヤが彼に関して預言したことと一致しています(イザヤ書42:1-4、61:1-3、マタイによる福音書12:17-21)。エルサレムでのイエスの苦難と死も、預言にすべて一致しています(詩篇22、イザヤ書53章)。洗礼者ヨハネについてイエスが話した時、ヨハネがイザヤ書40:3とマラキ書3:1の中で預言されている先駆者だったという事実を浮き彫りにしました。「この人〔洗礼者ヨハネ〕こそ、『見よ、私は使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう』と書かれているその人です」(マタイによる福音書11:10)。これにより、私たちの主イエスは、**ヨハネ**は預言の成就としてだけでなく、イエスの先駆者として遣わされたのだと言われたのです!

十字架にかかる時が近づいてきた時、イエスは弟子たちに、「さあ、これから、私たちはエルサレムに向かって行きます。『**人の子〔イエス〕』について預言者たちが書いている、すべてのことが実現されるのです**」(ルカによる福音書18:31)と話されました。はりつけにされる前夜に「『彼は犯

罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのことが、私に必ず実現するのです。**私にかかわることは必ず実現します**」(ルカによる福音書22:37)と言われました。「**必ず実現する**」という言葉に注目してください。

重大な試練の時に、自分の主を勇敢に剣で守ろうとしたペテロに対し、イエスは「私が父にお願いして、十二軍団よりも多くの〔何万もの〕天使を、今すぐ置いていただくことができないとでも思うのですか。**でも、そのようなことをすれば、こうなることが必然であると書いてある聖書が、実現されません**」(マタイによる福音書26:53-54)と告げられたのです。次に群集を叱責し、「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って私を捕まえに来たのですか。…しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書が実現するためです」と言われました(マタイによる福音書26:55-56)。裁判中、司祭長がイエスに宣誓させて「あなたは、誉むべき方の息子、メシヤですか」と尋ねた時、イエスは「**私がその人物です**」と答えたのです(マルコによる福音書14:61-62)。

復活後、イエスはエメイウスへの道中で、二人の弟子に話されました。「モーセおよびすべての預言者から始めて、**聖書全体の中で、ご自分について書いてある事柄を彼らに説き明かされた**」(ルカによる福音書24:27)のです。後で、集まっていた弟子たちに会ったイエスは「私がまだあなたたちと一緒にいたころ、あなたたちに話した言葉は、『私についてモーセの律法と預言者と詩篇に書いてあることは、**必ずすべて成就する**』**ということ**でした」(ルカによる福音書24:44)とお告げになりました。旧約聖書の預言がイエスにより**必ず成就されなければならない**ことを、さまざまな機会においてどのように話されているかに、注目してください。神の御言葉が達成しないことはありえず、聖書の中の神が嘘をつくことはありえず、そして、聖書の預言を成就する神の息子イエスが失敗するということもありえないので、すべてが成就されることは必然なのです。聖書における神の約束は破られる**ものではない**からです(ヨハネによる福音書10:35)。

復活した主はまた、旧約聖書のメシヤにまつわる預言に関する真実を解く**鍵**を、弟子たちに与えました。イエスはこう言われました。「次のように書いてあります。『メシヤは**苦しみを受け**、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しと悔い改めが、あらゆる国の人々に述べ伝えられる』」(ルカによる福音書24:46-47)。この偉大な聖書の一節は恐らく、復活から昇天までの40日間に、イエスが弟子たちに教えられたことのまとめと言えるのではないでしょうか。

イエスの時代のユダヤ人たちは、敵に勝利し王として君臨するメシヤを探していたのです。現在でもそれは変わっていません。栄光を手にする前、メシヤは人々の罪のため**苦難を受け**なければならないと聖書に記されているにもかかわらず、彼らはそれを理解できないのです。旧約聖書の預言者たちを通じ、「キリスト〔メシヤ〕の苦難とそれに続く栄光を聖霊が事前に証かした〔証言した〕」(ペテロの第一の手紙1:11)と、ペテロも同じように証言しています。

使徒と新約聖書の著者たちもまた、メシヤ・イエスが旧約聖書の預言を成就したことを証言している

近代の多くのキリスト教徒たちは、次のようなキリスト教の本質について、はっきりとした理解を失ってしまったか、初めから理解していなかったかのどちらかです。その本質とは、新約聖書は旧約聖書の預言と約束が成就したものであるということ、そしてメシヤ・イエスがこの二つを結ぶ絆であるということです。初期新約聖書時代の教会の作家及び説教者たちは、このことをはっきりと理解し、旧約聖書の預言が新約聖書で成就したことを常に指摘していました。

マタイ書1:18-25で、マタイがイエスの処女降誕を述べた時、それは旧約聖書におけるメシヤの処女降誕預言の成就であると言いました。「これらのすべての出来事は、主が預言者を通して言われたことが成就するためのものだった。『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』(訳すと、神は私たちと共におられる、という意味である)」(マタイによる福音書1:22-23、イザヤ書7:14)。

嫉妬の怒りに燃えたヘロデ王が、幼児であったイエスを殺害しようという無駄な試みのもと、罪なき子供たちを虐殺した時のことを話したマタイは、この陰惨な殺人さえも神は予知され、その時に成就された預言を聖書に書き留めさせた方も神なのだ、という事実に注意を促しました(マタイによる福音書2:16-18をエレミア書31:15と比較参照)。

イエスが旧約聖書の預言を成就されたことは、福音書の数十箇所に暗示または明示されています。「あなたはメシヤ、生ける神の息子です」(マタイによる福音書16:16)という、自身の偉大なる信仰の告白を通して、ペテロは他の使徒たちの信念をも表していたのです。

旧約聖書に記された預言の成就について新約聖書の著者たちが言及しているすべての事例をこの短い小冊子で示すことは不可能であ

り、そうする必要もないと思います。しかし、私は、ヨハネによる福音書20:31に書かれているように、ナザレのイエスは預言されたメシヤ、すなわち神の息子であり、神が到来を約束したまさにその方であったと証明することが、ヨハネだけでなく**四つの福音書すべて**における**主題**である、という事実に注意を促すことを望んでいます。

「しかし、これらが書かれたのは、イエスがメシヤ、神の息子であることを、あなたたちが信じるため、また、あなたたちが信じて、イエスの御名によって命を得るためである」(ヨハネによる福音書20:31)。

『ヨハネによる福音書』における証明の要点は、イエスが、メシヤとして完璧であり、あらゆる資質と行いを満たしており(メシヤについて書かれたものすべてを成就している)、それゆえに間違いなくメシヤであるということです[6]。

聖霊降臨の当日に行われた使徒ペテロによるユダヤ人への説教は、彼らの邪悪な手で十字架に打ち付けられ、神により生き返ったナザレのイエスは**ダビデ王が書いたメシヤである**こと、そして「神がナザレのイエスを…よみがえらせ…〔そして彼を〕主およびキリストと定められた」ということを、旧約聖書を引用した議論でユダヤ人たちに証明することが主な目的でした(使徒行伝2:22-36)。

使徒行伝に書かれている神殿の門で説かれたペテロの**第二の**説教(使徒行伝３：12-26)で、「ですから、兄弟たち。私は知っています。あなたたちは、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行ない〔メシヤ・イエスを拒絶し殺した行い〕をしたのです。しかし**神は、すべての預言者たちの口を通して、あらかじめ語っておられたキリストの受難を、このように実現されました**。ですから、あなたたちの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい」(使徒行伝3:17-19)という言葉で締めくくり、彼の議論と訴えを強調しました。

コーネリアス家に集まった非ユダヤ人たちへの説教でさえ、ペテロは言いました。「預言者たちも皆、イエスを信じる者は誰でも、その名によって罪〔かつての罪〕の赦しが受けられる、と証言しています」(使徒行伝10:43)。

---

6. すべての使徒たちは新約聖書で、旧約聖書の預言がイエスによって成就されたことを強調しました。これは、イエスがメシヤであることをユダヤ人に説得する、重要かつ唯一の方法だったのです。使徒たちは、公平な考えを持つすべての人たちを説得するため、イエスの生死、復活という周知の事実と、旧約聖書の預言との驚くべき相関性を示すことが必要だと感じたのです。反論できない強力なこの議論が、福音を伝道する一般的な方法となったのはこのためです。

使徒パウロはアンティオクにあるユダヤ教会堂での説教で、次のように言いました。「こうして、イエスについて書いてあることを**全部**成し終えた後、〔彼らは〕イエスを十字架から降ろして墓の中に納めました。しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせたのです」(使徒行伝13:29-30)。

ユダヤ人に対するパウロの福音伝道について、使徒行伝17:2-3に書かれています。「パウロはいつもしているように、…聖書〔旧約聖書〕に基づいて彼らと議論した。そして、メシヤが苦しみを受け、死者の中からよみがえるのが必然であることを説明し、また論証して、『私があなたたちに伝えている**このイエス**こそ、**メシヤなのです**』と言った」。

パウロは、イエスの死、そして復活という新約聖書での事実を、旧約聖書の預言と教えに結び付けて説明しています。「兄弟たち。私は今、あなたたちに福音を知らせましょう。…この福音によって救われるのです。…メシヤ・イエスは**聖書〔旧約聖書〕に従って**、私たちの罪のために死なれ、葬られました。また**聖書〔旧約聖書〕に従って**、三日目によみがえらました」(コリント人への第一の手紙15:1-4)。

新約聖書の使徒、著者そして説教者たちが、メシヤ・イエスが旧約聖書の預言を成就し、生き、苦しみ、死に、そしてよみがえられたのだということを、絶えず指摘していたことを明らかにしている、さらに多くの引用文があります。

「旧約聖書のメシヤに関する預言すべてが、ナザレのイエスにおいて集約され、まばゆい栄光に満ちた焦点に向かって進んでいるのだ」ということをさらに深く実証するために、別の所からも、さらに多くの例を詳細に検討することが必要でしょう。今から、下記に示されている7件の表題に沿って、膨大な資料から要約のみを述べていきたいと思います。

一．　メシヤの信任状

二．　メシヤの生涯と、その務めに関する預言

三．　メシヤの預言に見られる預言的逆説

四．　メシヤ(イエス)の苦難、死、復活に関する預言

五．　メシヤの役割を記す預言

六．　旧約・新約聖書におけるメシヤ(イエス)の神性

七．　イエスにおいて成就した、旧約聖書の象徴と間接的預言

一. メシヤの信任状

信任状は、大使が母国の政権から外国の政権に提出する時に使う証明書のように、その保持者の職務・地位を証明するための推薦状や法律書類のような証明書、すなわち書面による証明を意味しています。私たちの慈悲深い救い主、イエスは、この地に降りてきた時、天の王国から出された「信任状」を見せてくださったのです。次の事実はイエスがメシヤであるという証明です。マタイは、彼の福音書第一章で、イエスがメシヤであることを証明するために、イエス・キリストの系図を、簡潔にまとめています。マタイの福音書は次のように始まります。「アブラハムの子孫、ダビデ王の子孫であるイエス・キリストの系図」(マタイによる福音書1:1)。

世界中、ただ一人にたどり着く手紙

世界中どこにでも郵便が届く所に住んでいれば、6～7項目の指定事項を書いて手紙を出すだけで、世界人口の中から特定の人物を選んで連絡をとることができます。これは、皆さんがご存知のありふれた事実です。たとえば、下記の宛先に手紙を送るとしましょう。

レスター・B・スミス様
マディソン街 4143番地
シカゴ州、イリノイ
アメリカ

あなたはすでに**1人**の人間を全世界人口の中から選び出しているのです。確実に特定された人物と連絡を取るために、はじめに、世界全国家の中から「アメリカ合衆国」という**一カ**国を選びます。それと同時に、その他すべての国々を選択肢から取り除いているわけです。そして、特定の国から、その人の住んでいる「イリノイ州」という**一つの州**を選択することによって、あなたは世界の他州すべてを取り除きます。また「シカゴ」という**一都市**を指定することによって、世界中のあらゆる他の都市が選択肢から除外されます。「マディソン街 4143番地」という正確な番地(その人が住んでいるシカゴ市内の**一軒**の家)を指定することにより、世界中の他のすべての家屋が自動的に除外されます。「レスター・B・スミス」という名を的確に示すことにより、その家に住んでいる他の人たちと特定の人物を区別するだけではなく、実に、世界中の他の人物をすべて除外しているのです!

神はこれと同様に、旧約聖書で来るべきメシヤについての「詳細」を十分かつ明確にこの人物に与え、私たちが、古今を通じた全国家、全民族からただ1人だけを見分け、かつその1人がメシヤであると絶対的に確信できるようにしてくださったのです。神の「信任状」つまり、「住所」に該当する情報を念入りに検討してみましょう。誰が真のメシヤであったか誰でも見極められるよう、詳細な情報、すなわちメシヤの『住所』に相当する情報が、十分に与えられているのです。預言の一覧と釈明を学ぶにつれ(預言の積み重なる効果は圧倒的なものです)、世界史上、**ナザレのイエス**以外に誰一人として、メシヤに関する預言のすべてを(というよりも、ほんの数パーセントでさえ)満たすことができなかったということが、すぐにわかるでしょう。

(1)第1に、来るべき救い主は**女の子孫**であると断言することにより、神は、メシヤが〔神が父親であるから〕人間の父親を持たないことを示したのです。同時に、メシヤは天使ではなくひとりの男性として現れることも、神は明らかにされました〔メシヤは人間の母親を持つからです〕。

「私は、おまえ〔蛇の姿をしたサタン〕と女の間に、また、おまえの子孫と女の子孫〔神は、神の息子メシヤを身ごもるためにマリアに種を与えた〕との間に、敵意を与える。彼〔メシヤ〕は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく〔十字架のはりつけ〕」(創世記3:15)。

こうしたメシヤに関する聖書初の明白な約束は「全聖書の、そして、全歴史・全預言の根本」です。神の預言者は、創世記3:15において、メシヤが処女降誕されただけでなく、人間の身代わりとなって苦難を受けるであろうことも預言しているからです。「おまえは、彼のかかとにかみつく」と神は言われました。また、サタンとその行いに対して、メシヤの完全かつ最終的な勝利を預言し「彼〔メシヤ〕は、おまえの頭を踏み砕く」とも言われました。

創世記4:1を読むと、アダムとエバがこの創世記3:15に書かれている約束を理解していたことがよく分かります。その注目すべき証拠として、エバに初めての男の子が生まれた時、「私は、主によってひとりの男の子を得た!」(創世記4:1)と喜びに満ちて叫んだことがあげられます。彼女に初めての男の子が誕生した時、エバは約束された救世主が来たと思ったのです。しかし、メシヤ誕生の時、場所、そしてその他多くの詳細は、まだ預言として明かされてあらず、彼女も知りませんでした。メシヤが来るのは、その時から何世紀も経ってからだったのです。「しかし定めの時が

来たので〔…救いのために…（5節）〕、神は女から生まれたご自分の息子を遣わされたのです」(ガラテヤ人への手紙4:4-5)。

(2)神は次に、ノアの息子の中でも、ハムやヤペテではなく**セム**の家系からメシヤが出なければならないと定め、全国家の3分の2を選択肢から省かれたのです。国家創立の歴史が始まった当初、神は、ご自分の預言者ノアを通して、セムに特別な好意を示されました。「褒め称えよ。セムの神、主を。…神はヤペテを〔繁栄させるが、しかしそれ以上に〕、セムの天幕に住まわれる」(創世記9:26-27)。

創世記9:27の預言は、神と共にあり、そして自身も永遠なる神である方〔イエス〕の御言葉(ヨハネによる福音書1:1)が「人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た」(ヨハネによる福音書1:14)時に完全に実現したのです。「父のみもとから来られたひとり息子としての栄光である。この方は恵みと誠に満ちておられた」(ヨハネによる福音書1:14)。この方は、**アブラハムを通したセム**の子孫であり、また彼の民であるヘブライ人のもとへとやって来ました(創世記11:10-27)。

(3)その後、再び別の選抜が行われました。ある一国家を除き、世界の何百という国家がすべて省かれたのです。その一国家とは、神がアブラハムをお選びになった時、ご自身によって創立された新国家です。従って、歴史における神は、国家をユダヤ人と非ユダヤ人(神を信じる者たちと神を信じない者たち)というふたつのグループに分けられたのです。そして、その一国家、すなわち小国家であるユダヤの民を他から隔離されます。ユダヤ人の子孫の中から、メシヤが現れることになっていたからです。

「その後、主はアブラム〔アブラハム〕に仰せられた。『あなたは生まれ故郷を…出て、私が示す地へ行きなさい。そうすれば、私はあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、…あなたの名は祝福となる。…地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。…あなたの子孫に、私はこの地を与える』」(創世記12:1-3、7、17:1-8、15-19)。

「これは主のお告げである。『私は自分にかけて誓う…私は確かにあなたを大いに祝福し…あなたの子孫によって、地のすべての国々が祝福を受けるようになる』」(神の息子であるメシヤ・イエスを信じ、彼の戒律を守るユダヤ人と非ユダヤ人の両者)(創世記22:16-18)。

1,500年前に遡って書き残されたこの預言は傑出したものです。なぜ

なら、**この預言者は大胆にも**「神はアブラハムを祝福し、彼により祝福をもたらし、彼にカナンの地を与え、**彼とその子孫によって世界を祝福される」という複数の預言を**一文にして書き綴ったからです。メシヤがユダヤ人の子孫として、その国家に現れ、彼によってメシヤを信じる全世界の人々が祝福を受けるというただひとつの目的のために、この偉大なるユダヤの国家が創立され、独自の領土が与えられたのです。この預言は、何千年も変わることなく、創世記で語られてきた文学的事実です。また、その預言の実現は長年を要する奇跡であり、元の預言と同等に決定的かつ完全なものです。神は実際に、ヨシュアの指揮下で征服したカナンをユダヤ人たちに与え、アブラハムを偉大な国家としただけではなく、定められた時が来た時にメシヤを彼らに遣わし、アブラハムの子孫すなわちイエスにより、計りしれない祝福を世界にもたらしてきました(ガラテヤ人への手紙3:8、16)。聖書は「すべての国家の人々は、イエスを信じることにより救われる」と預言しました。神は「アブラハムに対し『あなたによってすべての国民が祝福される』と前もって福音を告げたのです」(ガラテヤ人への手紙3:8)。

「ところで、約束は、アブラハムと一人の子孫に告げられました。神は『子孫たちに』と言って多数を選ぶことはせず、一人を指して、『あなたの子孫に』と言っておられます。**その方はメシヤ・イエスです**」(ガラテヤ人への手紙3:16)。

「**アブラハムの子孫**、ダビデ王の子孫である、イエス・キリストの系図」(マタイによる福音書1:1)と書かれているとおり、メシヤの物語は徐々に旧約聖書の中で展開していきます。メシヤは「女の子孫」で、セムの家系から出た者であり、「アブラハムの子孫」でなければならないのです。これで、**アブラハムの子孫**であるユダヤ人種のみからメシヤを探せばよいのだとわかり、メシヤの検索範囲が狭くなりました。

(4)アブラハムには、長子のイシマエルとイサクを含む数人の息子がいました。従って、別の選択が必要でした。現代のアラビア人の先祖であるイシマエルからではなく、(ユダヤ人の先祖である)**イサク**の子孫からメシヤが現れなければならない(創世記17:19、21:12、ロ―マ人への手紙9:7、ヘブライ人への手紙11:18)、ということになっています。これにより、メシヤの家系が定められ、更に検索範囲が狭まります。

「主はイサクに現われて仰せられた。『…これらの国々〔約束の地〕をす

べて、あなたとあなたの子孫に与える。こうして私は、あなたの父アブラハムへの誓いを果たすのだ。そして、あなたの子孫は空の星のように増え、…地上におけるすべての国々は、あなたの子孫〔メシヤ〕によって祝福される』」(創世記26:2-4)。

メシヤと約束された祝福が、アラビア人ではなく、イサクとその子孫であるユダヤ人から出なければならないことは、申命記18:18でさらに強調されています。申命記18:18は、来るべき偉大な預言者であるメシヤが「彼ら〔ユダヤ人〕の同胞のうちから、彼らのために、あなたのように一人〔モーセ〕」で現れるであろうと明確に述べています。

この事実は、新約聖書で述べられていることからも明らかです。使徒ポールは、ユダヤ人同胞についてこう言いました。「彼らはイスラエル人〔ヘブライ人〕です。〔彼らは、はじめに約束が与えられた先祖たちの子孫です。〕またメシヤ**、イエスも、人としては彼らから出られたのです**。このイエスは万物の上にあり〔ます〕、神をとこしえに褒め称えましょう」(ロ―マ人への手紙9:4-5)。

(5)イサクには2人の息子がいたので、メシヤの家系をここで更にしぼらなければなりません。メシヤはエサウではなく**ヤコブ**の子孫でなければならないと、預言に明示されています。すなわち、メシヤはエドム人(エサウの子孫)ではないと言っているのです。

「そして、見よ。主が…仰せられた。『私はあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。私はあなたが横たわるこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。…地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される』」(創世記28:13-14)。

「私は〔主を〕見る。しかし今ではない。私は〔主を〕見つめる。しかし間近ではない。ヤコブからひとつの星が上り、イスラエルから一本の〔王の〕杖が起こり、…ヤコブから出る者が治め〔る〕」(民数記24:17、19)。

(6)しかし、ヤコブには12人の息子がいたため、全能なる神は、また別の選択を行う必要がありました。そして、12兄弟の一人、**ユダ**が選ばれました。従って、メシヤは、イスラエルの12部族のうち残りの11部族ではなく、ユダ族の出身ということになります(創世記49:8-10)。

「そこで、〔神は〕ヨセフの天幕を捨て、エフライム族をお選びにならず、**ユダ族を…選ばれた**」(詩篇78:67-68)。

「兄弟の中で最も勢力があったのはユダで、指導者もその子孫から出た」(歴代志上5:2)。

「シロが来るまで、主権は**ユダ**を離れず、また、その統治権もユダを離れない。国々の民は彼〔シロ〕に従う」(創世記49:10)。

新約聖書を読むと、私たちの主イエスは「**ユダ族から出た**」と書かれています(ヘブライ人への手紙7:14、黙示録5:5)。

(7)次に、ユダ族に属する何千という分家の中から、改に選択を行う必要がありました。メシヤはダビデ王の父である**エッサイ**の家から、その**たった**一家族**のみ**から、現れなければなりませんでした。「エッサイの根株から新芽が生え、その根〔根株〕から若枝〔メシヤ〕が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる」(イザヤ書11:1-2)。

この「若枝」という言葉は、旧約聖書のイザヤ書11:1-2と箴言14:3の二箇所のみに登場し、「切り取られた木の根株から出る、小枝または若枝」という意味を持っています。イザヤ書11章の1-2節には、神が何の身分も地位も無い人間〔エッサイ〕(単なる切り取られた木の根株)に新しい命を接ぎ木される、と明白に書かれています。神がエッサイを国王(ダビデ王)の父にし、メシヤの家系に彼を加えるまで、エッサイは王家の長でもないありふれた人物だったのです!

(8)エッサイに8人の息子がいたので、神はさらに別の選択を行う必要がありました。メシヤは、エッサイの末息子である**ダビデ王**の子孫であるとされていました。

「私は、あなたの身から出る世継ぎの子孫を、あなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼は私の名のためにひとつの家を建て、私はその王座をとこしえまで堅く立てる」(サムエル記下7:12-13、歴代志上17:11-14、詩篇89:35-37、エレミア書23:5-6)。

「主はダビデ王に誓われた。それは、主が取り消すことのない真理である。『あなたの身から出る子孫をあなたの〔王〕位に着かせよう』」(詩篇132:11)。この引用文(詩篇132:11)から、次のことが分かります。主は単にダビデ王に約束されただけではなく、彼が宣誓した約束を確固たるものとされたのです。アブラハムに対しても同様でした(ヘブライ人への手紙6:13-18)。新約聖書を読むと、次のように書かれています。

「**ダビデ王の子孫**、イエス・キリストの系図」(マタイによる福音書1:1)。

「〔神の〕息子である私たちの主、イエス・キリストに関することです。イエスは、〔人としては〕ダビデ王の子孫として生まれ〔ました〕」(ロ―マ人への手紙1:3、及びルカによる福音書1:30-33、使徒行伝2:30-32、テモテへの第二の手紙2:7-8、黙示録5:5、22:16)。

「イエスがそこを出て、道を通って行かれると、ふたりの盲人が大声で『ダビデ王の子孫よ。私たちをあわれんでください』と叫びながらついて来た」(マタイによる福音書9:27)。

「すると、その地方のカナン人の女が…叫んだ。『主よ。ダビデ王の子孫よ。私をあわれんでください』」(マタイによる福音書15:22)。

人々は、イエスを「ダビデ王の子孫」として認識していたがゆえに、そう呼んだのです(マタイによる福音書9:27、12:22-23、15:22、20:30-31、21:9、15、マルコによる福音書10:47-48、ルカによる福音書18:38-39)。

パリサイ人たちもまた、メシヤはダビデ王の子孫でなければならないと十分に知りつくしていました。「イエスは彼らに尋ねてこう言われた。『あなたたちは、メシヤについて、どう思いますか。彼は誰の子孫ですか』彼らはイエスに言った。『ダビデ王の子孫です』」(マタイによる福音書22:41-46)。

人としてのメシヤがダビデ王の子孫でなければならなかったことは明白であり、イエスは実にダビデ王の子孫だったのです。

家系図の記録

聖書の時代、全ユダヤ人は自分の家系図をさかのぼることができました。従って、イスラエルの全国民が系図に登録され(歴代志上9:1)、これらの記録は中心都市に公共財産として保管されていました(ネヘミヤ記7:5-6、エズラ記2:1)。イスラエル人系図は、各人の農地や家の所有権を証明する役割を果たしていたため、皆、自分たちの家系図の正確な記録に対して強い関心があったのです。これらの系図の記録は、西暦70年に**エルサレムとその神殿、そしてユダヤ国家が破壊されるまで**、念入りに保管されていました。イエスの生存中は、イエスがダビデ王の家系・血筋に属していたという周知の事実に対して議論する者は一人もいませんでした。誰もが入手できる公共書類に記されていたからです。

西暦70年以降、聖書に残されているイスラエル国民系図以外はすべて破壊または散乱してしまったため、その後に**偽りのメシヤが出てきて、預言に示されるように自分がダビデ王の子孫であることを、系図に基づいて証明することは不可能となりました**。言いかえれば、メシヤは西暦70年以前に来なければ**ならなかった**ことになります。

(9)さらに、ダビデ王の「多くの息子」のうち、ソロモンと彼の子孫が王

座の跡取りであったため、メシヤが預言のとおりダビデ王の王座を継ぐためには、ソロモンの子孫であることが必要でした。

「**主は**私に多くの子供〔息子〕たちを授けてくださり、すべての子供たちの中から**ソロモンを選び**、イスラエルを治める主の王座に着けてくださった」(歴代志上28:5、29:24)。

新約聖書を読むと、イエスの家系にダビデ、ソロモン、ヨセフがいると書いてあります。ソロモンの子孫であるヨセフは、ダビデ王の継承者なのです(マタイによる福音書1:6)。

(10)さらに、メシヤの血統に関する非常に重要な「詳細」が加えられています。**メシヤは処女から生まれ**、かつ、ダビデ王と血のつながった子孫であることが必要だったため(詩篇132:11)、当然**この処女もダビデ王と血のつながった子孫であったことになります**。

「さあ、聞け。ダビデの家よ。…主みずから、あなたたちにひとつの印〔ヘブライ語原文では、「印」とは、「奇跡」の意〕を与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』〔神は私たちと共におられるの意〕と名づける」(イザヤ書7:13-14)[7]。

メシヤの誕生が旧約聖書の中で語られる場合、人間の父親に一度も触れることなく、常に彼の母親(または母胎)に関連して述べられている点は注目すべきです。下記を参照してください。

イザヤ書49:1—「主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた」。

イザヤ書49:5—「今、主は仰せられる。主は…私が母の胎内にいる時、私をご自分のしもべとして造られた」。

エレミヤ書31:22—「主はこの地に、ひとつの新しい事を創造される。ひとりの女が男を必要としなかった〔メシヤ・イエスの処女降誕は人間の父親なしに起こったのです〕」。

詩篇22:9—「あなたは私を母の胎から取り出した方」。

ミカ書5:3—「産婦が子を産む時まで、…」。

新約聖書を読むと、イエスが実際に処女(ダビデ王の直結の子孫で

7. 英語の新改訂標準訳聖書は、とんでもない誤訳によって、イザヤ書7:14の「almah」というヘブライ語を「若い女性」と訳しています。旧約聖書において「almah」が使用される場合は、「処女」の意味で使われています(一例として、出エジプト記2:8では、新生児モーセの姉をさして「幼い処女」として使われている事例があります)。セプトゥアギンタでは、「almah」はギリシア語で「処女」という意味の「parthenos」と訳されています。

あった処女)から生まれたことがわかります。「アブラハム**に**イサク**が生まれ**、イサク**に**ヤコブ**が生まれ**…」といった言葉を繰り返し使い、アブラハムからキリストまでの系図を説明しているのを読むと、すべての子供は自然に生まれているのがわかりますが、イエスの誕生に行き着いた時、その誕生が超自然であることに気づくのです。

「イエス・キリストの誕生は次のようであった。**母マリアは**ヨセフの妻と決まっていたが、二人がまだ一緒にならないうちに、**聖霊によって身重になったことがわかった**…。『…その胎に宿っているのは、聖霊による子です。マリアは男の子を産みます。その名を**イエス**とつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です』。これらすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためのものであった。『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』(訳すと、神は私たちと共におられる、という意味である)」(マタイによる福音書1:18、20-23)。

この善良な女性マリア、善良な男性ヨセフ、善良な医者ルカ、忠実な記録者マタイ、天使の言葉、そして(預言を与え、文字どおりに成就させた)神とその御言葉によって、イエスの誕生が真に、正確に起こり、そして記述されたのです(マタイによる福音書1:16-23、ルカによる福音書1:26-38、2:1-20)。

ここに、神のみが満たすことができる印**(奇跡)**が見られます。メシヤを偽る人は明らかに、処女から自分を生まれさせることができません。そして「天地万有の真理はお互いに調和している」ため、偽りのメシヤが、マリア、ヨセフ、ルカ、マタイ、そして主の天使といった5人の善良な証人全員に、彼のために嘘をつかせ、隠し通すなどということは、困難どころか**不可能**と言えます。これらの5人の証人たちの証は、信頼できるものと言えるでしょう[8]。

全能の神が処女降誕によって地球へ送られた方が、疑いなくメシヤであることだけは確かです。なぜなら、ここに真の「印」、すなわち偽造することができない天からの奇跡が存在するからです。神はイザヤ書7:14でメシヤの処女降誕の詳細を与え、イエスが誕生した時、それを実現させ

---

8. 文献による詐欺行為はほとんど不可能といってよいでしょう。「天地万有の真理はお互いに調和している」が、嘘というものは調和して**いない**ため、その実体が遅かれ早かれ暴露されることは明らかです。歴史、地理学、言語学、そして時代の風習や習慣を熟知する学者たちは、簡単に詐欺行為を発見することができます。そのような嘘は、各分野における既知の事実と一致しないからです。

たのです。「すると主は私に仰せられた。『私の言葉を実現しようと、私は見張っているからだ』」(エレミア書1:12)。

メシヤの血筋を証明する預言は、エバからダビデ、イザヤ、そして預言者ミカの時代へと、何世紀もの時を経て与えられたということを覚えておいてください。それは、異なった方法で、異なった時に異なった場所で、多くの人間によって与えられたのです。神ではなく、単なる人間がメシヤの系図に関する預言を与えたなら、常に間違いの可能性があります。しかし、神が与えた預言はすべて**絶対的に正確**だったのです。

イエスは、メシヤの血統として要求される**全**詳細を満たし、預言通りに「女の子孫」「アブラハムの子孫」「ダビデ王の子孫」(マタイによる福音書1:1)であり、まさに「絶対的に正確」だったのです。ナザレのイエスを除いては、世界中の誰一人として、これらの詳細をほんの一部分でも満たすことができません。

例を挙げましょう。この世に二人の同一人物など(たとえ一卵性双生児でも)いないということを覚えておいてください。あなたが、ミシガン州デトロイトのスミス通り113番に住んでいる「ジョージ・バードン」だとします。あなたの身長は178センチ、体重は75キロです。妻と、三人の息子と二人の娘がいて、生命保険のセールスマンをしています。銀行に5,124ドル76セントの貯金があります。**世界中を探しても、あなと同じ「情報」がすべてあてはまる者などいない**ということは、一目瞭然でしょう。あなたの特長を示す十分な情報が与えられた場合、あなたを確実に識別するのが可能なことは、簡単に理解できます。同じことが預言にも言えるので、十分な情報が与えられた場合、識別は確実なものとなります。メシヤに関しては非常に多くの情報が与えられており、そのすべてが、ナザレのイエスにおいて正確に満たされているのです。ですから、この識別は確実なものです。

(11)さらに、誰もがメシヤを認識できるよう、**彼の出生地が指定されています**。生まれる町が示されているという点で、預言に「住所」が示されているのです。

「**ベツレヘム**・エフラテよ。あなたの氏族はユダの中で最も小さいが、あなたのうちから、私のために、イスラエルの支配者となる者が出る。これは、昔から、永遠の昔からの定めである」(ミカ書5:2)。

全大陸のうちから、一大陸のみが選ばれます。それがアジア大陸で

す。全国家のうちから、一国家のみが選ばれます。それがイスラエルです。イスラエル全領土から、ある地方のみが選ばれます。それがユダヤです。ユダヤの全域から、ある区域のみが選ばれます。それがベツレヘム・エフラテです。当時のベツレヘム・エフラテは人口1,000人以下の小さな村でした。預言者ミカは、世界の中から、ある無名の村を指定します。ミカは神の御言葉を語っていたので、その預言が間違っているはずはなかったのです。ミカはまた、ゆるぎない確信を持って**はっきり**と語りました。メシヤが生まれる場所を、ヘロデ王がユダヤの祭司長や聖書学者に問いただした時、彼らはヘロデ王に「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってそう書かれているからです」と答えたことからも明らかです(マタイによる福音書2:4-6、ヨハネによる福音書7:42)。

成就されてゆく預言の偉大さ

ユダヤのベツレヘムでイエスが生まれた(マタイによる福音書2:1)経緯は、実に驚くべきものです。イエス誕生の直前まで、マリアは間違った所に住んでいました…ただしこれは、彼女が身ごもった赤ん坊がメシヤだった場合に限ります。ここで、神がどのように御言葉を実現させたか、その複雑さに注目してください。ローマの神殿銘文がアンカラ(トルコ)で1923年に発掘されました(この発掘は、英国の名高い化学者・考古学者であるサー・ウイリアム・ラムゼイによって発表されました)。判読後、この銘文に「シーザー・オーガスタスの統治下において大規模な徴税が3回あった」と書かれていることが明らかになりました。第二の徴税は**イエス誕生の4年前**に命じられ、第三の徴税は、イエス誕生の数年後に命じられたと書かれています。私たちが注目したいのは、ここでいう第二の徴税です。

誇り高いユダヤ人は、特別税案に憤慨し、抗議のためローマへ交渉代理人を送りました。クイリニウス(シリアの地方知事)には、その問題を解決する力がなかったのです。代理人は最終的に特別税を阻止できず、ユダヤ人は登録・課税法に従わざるをえないことになりました。しかし、連絡を取るにも、旅をするにも時間のかかった時代のことです。ローマ政府の収税官たちが各地方の町をすべて訪れ、東方に向けて旅を続けるには相当の期間が必要でした。それに加え、ユダヤ人の反抗でさらに時間を取られました。この二つによって、まさにちょうど良い遅れが生じ、結果として、登録制度がユダヤで執行された時と**マリアが新生児イエスを産む時が正確に重なったのです**！すべて事の自然の成り行きだったのです。

マリアもシーザーもローマの収税官たちも、タイミングを計ったりはせず、この出来事を操っていたわけでもありません。ただ、舞台裏から世界を統治する神が、すべてを支配していたのです。マリアとヨセフが**ちょうど良い時に**ベツレヘムにたどり着くように、そして、メシヤとして選ばれたイエスが、ミカの預言によって、間違いなく指定された場所で生まれるように、その当日にすべてが起こるように、神は文字通り「世界の人々を動かし」、あらゆる物事の時期を配慮されたのです！

全能なる神が、これらを細部にわたって計画し、ご自分の手で実行されているということが見えない、または見ようとしない人間は、まさに盲目であるとしか思えません！

(12)最後に、皆がメシヤを正確に見極められるよう、到来の場所のみならず、その**時**も指定されています。イエスが生まれたその時こそ、メシヤが来る時として、地球の歴史上、全世代から神がお選びになった時だったのです。イエスの前後の時代はすべて省かれました。そしてナザレのイエスの世代に「別の候補者」が存在しなかったことを考えると、預言は間違いなく**イエス**のことを指していると言えるでしょう。

メシヤ到来の時代に関して、一般的な預言が三件と具体的な預言が一件あります。

(A)メシヤは、**ユダの部族が統治権を完全に失う前に**来なければなりませんでした。

「シロが来るまで、主権は**ユダ**を離れず、また、その統治権もユダを離れない。国々の民は彼〔シロ〕に従う」(創世記49:10)[9]。

この預言によると、(他のイスラエル10部族の二の舞を演じて)**ユダの部族**が統治権を完全に失うようなことは、シロが来るまで起こらないとされていました。

昔から、ユダヤ人の聖書学者やキリスト教の聖書学者たちは「シロ」をメシヤの名称であると解釈してきました。「シロ」はヘブライ語で「平和」もしくは「遣わされる方」を意味します。

70年間に及ぶバビロン捕虜となったユダ部族は、国家主権を奪われていましたが、それでも彼らの**内政に関しては常に自治権があり、それを完全に失うことはありませんでした**(エズラ記1:5、8)。

9. 日本語でさまざまな言葉(「主権」「王位」「杖」)に訳されているヘブライ語の「shevet」は、「棒」あるいは「杖」を意味し、特に、それぞれの部族が権威の象徴・記章として所有していた棒または杖を指しています。それぞれの部族は、部族名が刷り込まれた特有の「棒」または「杖」を持っていたのです。従って、これはそれぞれの部族に特有な象徴だったのです。

イエスの時代にも、ローマの支配下においても、ユダヤ人の領土内には自分たちの王がいたのです。その上、大半は自分たちの法律によって自治を行い、国家のサンヒドリン（最高法院）も権力を行使していました。しかし、数年にわたってユダヤの王位にあった**アーケレーアスは、王位から退けられ追放されました**。これは、イエスが12歳で神殿を訪れ、公の場に登場した年の(ルカによる福音書2:41-52)出来事です。そして、ローマ皇帝が、コポニウスをユダヤの統治者して任命した時、偉大なる古代イスラエル国家の最後の名残りであったユダ王国は、正式にシリア領土の一部となってしまったのです。その後約半世紀の間、ユダヤは形式上、地方政府としての構造を保ちましたが、西暦70年には、エルサレムと神殿の両方がローマ総監テトスの軍隊によって破壊され、形だけのユダヤ人国家主権もすべて崩壊したのです。ここで注目すべきは、創世記49:10で明示されたとおり、ユダがその統治権を完全に失う**前に**、メシヤ(シロ)が来たということです！

(B)メシヤは、**エルサレムの第2神殿がまだ存在するうちに**、到来せねばなりませんでした。「私は、すべての国々を揺り動かす。すべての国々が望んでいたものがもたらされ、私はこの神殿を栄光で満たす。…この神殿の栄光は、今後より優れたものとなるであろう。万軍の主は仰せられる。私はまた、この地に平和を与える」(ハガイ書2:7、9)。

マラキはハガイ書2:7、9に書かれているこの預言に加えて言います。「あなたたちが尋ね求めている主が、突然、**その神殿に来る**」(マラキ書3:1)。この預言もハガイ書の節同様に、西暦70年に起こった神殿の破壊までに実現されねばならなかったのです。メシヤが本当に来るなら、神殿が破壊される前に来なければならなかったのです。また、ゼカリヤ11:13でも、メシヤはユダヤ人の神殿が破壊される前に来なければならないと書かれています。その預言で、銀貨30枚が**主の神殿に**放り投げられ、陶器師に与えられる、と言っているからです。詩篇118:26中の預言文は、人々がメシヤを歓迎して「主の御名によって来る人に、祝福があるように」と言うだけではなく、「私たちは**主の神殿から**、あなたたちを祝福した」とも言うと書かれています。すなわち、彼が来る時、人々は主の神殿から祝福するであろう、と言っているのです。

これらの預言は、イエスの人生において見事に実現されました。イエスが入城のためエルサレムに近付いた時、そこにいた群衆は「主の御名

によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に〔天にいます神を褒め称えよ〕」(マタイによる福音書21:9)と叫びました。イエスが**神殿において**多くの盲人や足の不自由な人たちを癒されたことも書かれています(マタイによる福音書21:14)。マタイ21:15には、子供たちが**神殿で**「ダビデ王の子孫にホサナ」と叫んだと書かれています。まさしく「あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された」(詩篇8:2、マタイによる福音書21:16)のです。神は、メシヤが主の神殿で祝福されるはずであると述べる詩篇118:26の中で、与えられた彼の預言を満たすために**子供たち**の言葉を使われたのです!

エルサレムの神殿が存在するうちにメシヤが来なければならない、という預言が、少なくとも聖書の5箇所に記されています。神殿が西暦70年に崩壊して以来、再建されていないことを考慮すると、これは大いなる重要性を秘めた事実です。その5節とは、ハガイ書2:7-9、マラキ書3:1、ゼカリヤ書11:13、ダニエル書9:26、そして詩篇118:26です。

従って、聖書に記されているとおり、イエスが**エルサレムの町と神殿に**公衆の面前で入城したのは、事前に手配され預言されていたことだったのです。これは、到来の時期を含め、メシヤとその行いについて予告された神の、完璧な計画の一環だったのです。これらの預言は、ナザレのイエスが来た時に、この地での彼の行いを通して完璧に実現されました(マタイによる福音書21:1-16、マルコによる福音書11:1-10、ルカによる福音書19:29-40)。

「それから、イエスは**神殿に**入り…**神殿の中で**、盲人や足の不自由な人が来たので、自ら癒された。…また**神殿の中で**子供たちが『ダビデ王の子孫にホサナ』と叫ん〔だ〕…」(マタイによる福音書21:12-15)。

その他2箇所の驚くべき聖書文もまた、このことを述べています。そのひとつは、ルカによる福音書2:25-32に含まれ、イエスがまだ赤ん坊の時、両親が彼を**神殿へ**連れて行ったことが書かれています。別の箇所は、イエスが12歳の時、「神殿で〔聖書〕学者たちの真中に座って…聞いていた人々は皆、イエスの知恵と答えに驚いていた」(ルカによる福音書2:46-47)と述べています。

待つこと数世紀後、メシヤが突然、彼の神殿を訪れたのです!(マラキ書3:1)数年後、神は驚くべきことをなさいました。神が成しつつあることをイエスが人々に教えたとおり、神は、**神殿**とエルサレムの町を**破壊さ**

れたのです。この古代神殿の跡地には、現在、異教徒の聖堂(岩のドーム)が立っています[10]。神の摂理は、これらの顕著な事実によって、ユダヤ人をはじめとするあらゆる国民にあらゆる箇所で「メシヤは既に来たのだ!」と語りかけています。**2,000年前、すなわち、神がローマの総監テトスを通じて西暦70年に神殿を破壊される前に、メシヤは来なければならなかったのです**。

ナザレのイエスが真のメシヤでないとすると、メシヤ、預言、神の御言葉、神に加えて、客観的な真理というものも全く存在しないことになります。そうであれば、将来起こるすべてのことだけではなく、過去のあらゆる歴史もすべて、よだれをたらしながら話すおろか者の饒舌(じょうぜつ)のように無意味であり、猛烈な渦の中をただ回る流木のように目的のないものになるのです。

(C)ダニエルは、聖霊によってメシヤが生まれる時と死ぬ時の正確な時期を預言しました。ですから、自らをメシヤであると自称し、預言の前後に生まれた者、または死んだ者は、すべて偽者ということになります。ダニエルの時代からメシヤ到来までに起こる特定の出来事の予定表を書いた時、ダニエルは「やがて来たるべき君主の民〔ローマの兵士たち〕が町〔エルサレム〕と聖所〔神殿〕を破壊する」**前に**、メシヤが来て、そして「断たれる〔私たちの過去の罪の赦しのために、私たちの代わりとなって殺される〕」ことを、非常に明確に語っています(ダニエル書9:26)。これは、聖霊にて一人の人間(男性)の内に住むために、神ご自身がこの地に来られる時を告げる、先に述べた預言に加え、さらなる証拠となるものです。次の事実も、メシヤ到来の時期に関連しています。

(D)メシヤは、**ダニエルの時代の特定された時から483年後に**来なければなりませんでした。メシヤ到来の正確な**時**を明らかに述べるこの預言は、聖書の中で最も驚くべき預言のひとつです。イエス(メシヤ)誕生の約500年前に、メシヤ、イエスの到来の日付が設定されています。その預言は以下のとおりです。

「それゆえ、知れ。悟れ。エルサレムへ戻り、町を再建せよ、との命令が出てから、**君主**メシヤの来るまでが7週。また62週の間、その苦しみの時代に再び〔エルサレムの〕壁と街路〔町全体〕が建て直される。その62週

10. イエスは弟子たちに、神殿は「ひとつの石も他の石の上に残らないほど、あとかたもなく壊されてしまいます」(マタイによる福音書24:2)と言いました。この神殿はユダヤ人にとって宗教の中心で、国体としての心と魂でした。真の預言者、イエスが言ったとおり、神殿は破壊されました。それは疑いなく、弟子たちが思っていたよりも早く実現したのです。

の後、メシヤは断たれる。しかし、自分のためにではない。やがて来たるべき君主の民〔ローマの兵士たち〕が町〔エルサレム〕と聖所〔神殿〕を破壊する」(ダニエル書9:25-26)。

イスラエルへ帰り、エルサレムの町を再建する許可をユダヤ人に与えた命令「エルサレムを修復して再建せよ」は紀元前444年、アルタクセルクセスによって出されたものでした(ネヘミヤ記2:1-8)。

上に引用された聖書の節(ダニエル書9:25-26)で「～週（英文ではweeks）」と訳されている、ヘブライ語は「7」の複数形あるいは「七価元素」「七個群」を意味する言葉で、聖書では、「**7年」という意味で使われていました**(創世記29:27-28、レビ記25:8)。たとえば、ヤコブが二人の妻を得るために、レイバンのために「2週（weeks)」、つまりレアのために1「週」（7年）、ラケルのために1「週」（7年）働いたのです[11]。ダニエル書9:24で、イスラエルとエルサレムに関する出来事を含め、イスラエルと聖都、エルサレムに預言として定められていた「70週」（つまり、70×7年）は、**490年間のことなのです**。

この期間は三つの部分に分割されます。第一は7「週」または「7×7」年です。つまり、ネヘミヤとエズラ、そして彼らの同胞の指揮下における、エルサレム再建に割り当てられた49年間のことです(ネヘミヤ記、エズラ記参照)。歴史上の事実としても、その再建に49年かかったと記されています。

第二は、**メシヤ**が来るまでの期間を示す62「週(7)」年間、あるいは434年です。第70「週」である第三の部分は、メシヤがこの地に存在した後、ある期間が経過した後の7年間を示しているのです。

私たちは特に、「エルサレムへ帰り、再建せよ、との命令が出てから」「メシヤ、君主」に至る計483年に注目すべきです。ロバート・アンダーソン氏は、自著『The Coming Prince（来るべき君主）』でこの謎を解き、自論を発表しました。

アンダーソン氏は、エルサレムを再建する命令が出された紀元前444年3月14日を起点として、イエスのエルサレム入城の時までを辿りました(イエスのエルサレム入城は、イエスがメシヤだということをイスラエル全体が正式に認めた時だと信じ、この機に、メシヤがイスラエルの「君主」として正式に紹介されたのだとアンダーソン氏は考えています〔マタイによる福音書21:1-9、ゼカリヤ書9:9〕)。入念な調査に加え、名高い天

11. 創世記29:20-28

文学者たちと協議を重ねた後に、彼は驚くべき見解を公表しました。「紀元前444年から西暦32年までは、476年の期間があります。476×365は173,740日です。3月14日から4月6日(イエスの入城日)までは24日間です。173,740日に24日を足し、それに閏年(閏年は、4の倍数でなければなりません。ゼロ二桁で終わる年は別ですが、その場合も400の倍数です)の116日を足すと、合計173,880日となります。聖書の預言書における一年は常に360日であるため、ダニエルの預言にある69の「週」(7年)(69×7×360)は、173,880日となるのです!ということで、『エルサレムへ帰り、再建する命令』の日から「メシヤ、君主」まで、ダニエルによって述べられた期間は、その日数までぴったり合っていたことになります!」(同著)

これは、道路地図のようにはっきりと精密に築き上げられた、本物の預言であり、真実であることが証明される予告なのです。そして、**ナザレのイエス**、すなわち、他人のために「断たれる」「メシヤ、君主」を的確に指す標です。イエスが公の務めを始めた時、「**時**が満ち、〔天の王国〕は近くなった」(マルコによる福音書1:15)と語り、その「時」の深い意味について言及なさいました。メシヤはいつか生まれなければなりませんでした。他のどんな時代でも良かったのです。しかし、彼の生涯における主な出来事(エルサレム入城など)が起こる正確な年月まで、絶対的に確実な預言で定められていたのです。

この驚くべき預言が、皆がメシヤの到来を認識できるよう、聖書に書かれていたのです。非常に精密で、すべて正確に実現します。ひとつでも間違いがあれば致命的ですが、すべてが完璧に合意しているのです。**ナザレのイエスは**、血統、出生地そして誕生の時期まで、その詳細を**すべて**満たしています。かつ、キリストが十字架の上で苦難を受けられた後の世代において、神殿が破壊され、ユダヤ教司祭職が存在しなくなり、いけにえによる奉納をする者もいなくなり、ユダヤ人系図の記録も滅ぼされ、ユダヤ人の町(エルサレム)は崩壊しました。イスラエルの民が自分たちの土地から追い出され、奴隷として売り払われ、地球の果てまで追いやられたことは、もっとも注目すべき事実ではないでしょうか。このような厳罰がイスラエル国家全体に降りかかった後では、誰か別の者が「メシヤ」としてやって来る事が全く不可能になってしまったのです。旧約聖書で要求され、ナザレのイエスが示した、メシヤに適した「信任状」は、エルサレムと神殿が破壊されないうちにメシヤが到来することを要求していたからです。

二. メシヤの生涯と、その務めに関する預言

(1)数百という預言の中で、メシヤの神性と完璧さが浮き彫りにされています。メシヤは罪無き方であり、神のように聖なる方なのです[12]。彼は現に、人の体に宿った神なのです。

メシヤは（神であられるが故に）、天の父なる神ご自身と同じく高潔でなければなりません。というのも、彼について「正義の若枝…。『**主は私たちの正義**』と呼ばれるだろう」(エレミア書23:5-6)と書かれているからです。メシヤは、神が喜び、神が選ばれた方でなければなりません(イザヤ書42:1)。マタイによる福音書3:17には、イエスについて父なる神が「これは私の愛する息子、私はこれを喜ぶ」と仰せになったと記されています。メシヤとしての彼は、「喜んで」絶えず神の意志を行う、従順なしもべとされています(詩篇40:8)。主イエスは「私を遣わした方のみこころ〔意志〕を行ない、そのみわざを成し遂げることが、私の肉となります」と証しています(ヨハネによる福音書4:34、6:38)。

聖霊はメシヤの中に絶えず生きていました。そして、その聖霊がイエスの中に宿ったように、他の信者たちの中にも宿るようになった「聖霊降臨前」の日まで、他にそのような方は存在しませんでした（詩篇45:7、ヘブライ人への手紙1:9)。以下に挙げるイザヤ書11:2-5を読み、その素晴らしさを確かめてください。

「その上に〔ヘブライ語原文では「彼のうちに」〕、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによって裁かず、その耳の聞くところによって判決を下さず、正義を持って寄るべのない者を裁く。正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる」。

新約聖書でも、イエスが洗礼を受けた時に、聖霊が彼の上に（初代原文では「イエスのうちに」）鳩のように下りてきて止まりました(マタイによる福音書3:16)。イエスは「主の聖霊」がイエスの上に（初代原文では「イエスのうちに」）あられたと言う事実を確証されました(ルカによる福音書4:18)。イエスの証言は、イザヤ書61:1-3にあるメシヤの真正と務めに関する預言が、彼において実現したことを意味しているのです。人々はイエ

12. メシヤについて学びたい方には、詩篇40:6-10、45:1-8、イザヤ書11:2-5、42:1-7、53:7-9、63:1-3をお勧めします。

スに関するこれらの真実を聞き、目の当たりにし、その口から出て来る神の力強い言葉に驚いた(ルカによる福音書4:22)と書かれています。

メシヤは、父なる神の聖霊によって完全に制御されている者でなければなりませんでした。「ちまたにその声を聞かせない」(イザヤ書42:2)。メシヤ、イエスが話す時、周りの人々が彼の口から聞いたのは、彼の内から話される天の父の声であり、彼の人間性から発する言葉ではなかったのです。故に、彼の声はちまたで聞かれなかったのです。私たちも彼のようでなければなりません。「私があなたたちに言う言葉は、私が自分から話しているのではありません。私の内におられる父が、みわざをなさっておられるのです」(ヨハネによる福音書14:10)。「父よ。みこころ〔意志〕ならば、この杯〔十字架にかけられること〕を私から取りのけてください。しかし、私の願いではなく、みこころのとおりにしてください」(ルカによる福音書22:42)。「そのころ、弟子たちはイエスに『先生。召し上がってください』とお願いした。しかし、イエスは彼らに言われた。『私には、あなたたちの知らない食物があります』…イエスは彼らに言われた。『私を遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、私の食物です』」(ヨハネによる福音書4:31-32、34)。ここで繰り返しますが、ちまたで聞かれたのは、彼の声ではなく、イエスが聖霊の導きによって発した、父なる神の声なのです。それは、どんな声であれ、(怒りの声でも)常に父ご自身のものだったのです。父なる神、その息子イエス、および御霊は、常にひとつです。イエス自身と同じ力、すなわち、一度も罪を犯さずに、神の戒律をすべて守ることができるほど強い力を、弱いものである人間にも授けられると約束して下さったのです(そして今、父なる神と共におられるイエスによって、私たちの内に住まわれる御霊を通して、私たちにも同じ力が与えられているのです)[13]。

昨日も今日も、永久に同じである主の言葉は厳格かつ不動にもかかわらず、イエスはあえて、人が御言葉に従うかどうか選ばせてくださったのです。イエスはあえて、人間が善と悪を選び、その結果おのれの人生と運命を選ぶことをお許しになったのです。イエスは傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともないのです(イザヤ書42:3)。イエスは、人々が真実の言葉を受け入れることを願い、彼らの魂が永遠に地獄で過ごさないことを願って、御言葉を伝え続けるのです。しかし、人が真理の言葉

13. ルカによる福音書24:49、使徒行伝1:8、ローマ人への手紙8:1-10、37、ガラテヤ人への手紙5:16、ピリピ人への手紙4:13、ヨハネの第一の手紙4:4

を聞いた後でそれを拒否し、地獄へ行くことを選んだ場合、神が無理やりその考えを変えさせることはありません。これとは逆に、邪悪な者たちは、キリスト教徒たちの信仰、そして、神的な考えやみわざを捨てさせようとするのです。父なる神の意志を行い天国に行くか、あるいは、自分の意志を行い、恐ろしい地獄で永遠に過ごすかの、どちらかしかないのです。

メシヤは正義、すなわち彼の父なる神の意志を行うための、粘り強さと忍耐を持っている方です。確固たる最終目標に到達するための勇気を持ち、成功を収めることができる方です。「彼は衰えず、くじけない」(イザヤ書42:4)。マタイは、イザヤがメシヤについて言ったことをイエスが実現したと言って、イエスの務めを説明しています。

「これは、〔父なる神の御霊により〕預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。『これぞ、私の選んだ私のしもべ、私の心の喜ぶ私の愛する者。私は彼の上に私の霊を置き、彼はあらゆる国々に正義を伝える。〔彼は〕争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者はない。彼は傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、正義を勝利に導くまでは。あらゆる国々は彼の名に望みをかける』」(マタイによる福音書12:17-21)。

メシヤの優しさを描いた優美な人物像の中に、その哀れみと労わりの心が表れています。「主は羊飼いのように、その群れを養い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く」(イザヤ書40:11)。新約聖書のマタイ9:36、14:14、15:32、そしてその他の多くの箇所で、イエスの哀れみ深い心が描かれています。ヨハネによる福音書第10章では、羊のために命を捧げるほど、自分の羊たちを愛し大事に思っている「良い〔羊飼い〕」に例えられています(ヨハネによる福音書10:1-18)。イエスが優しく慈悲深いといっても、サタンや悪霊、それらに従い悔い改めない者たちを嫌わないということではありません。

メシヤは「正しく謙虚」な方で(ゼカリヤ書9:9)「他の人よりも心が麗しく」その唇からは「優しさ(恵み)が流れ出る」、神がとこしえに祝福される方なのです(詩篇45:2)。暴力をふるわず(神の御言葉には全く背かず、悪に対して叱責・非難をされるだけで)、表向きの生き方も(装うことなく)潔白であり、内面的にも純潔な人生を送られたのです(イザヤ書53:9、ペテロの第一の手紙2:22)。メシヤに対しては非常に間違った行いがなされ、そのために苦しみを受けられます(イザヤ書50:6、53:7、マタイによる福

音書26:67-68、27:28-44、ルカによる福音書23:11、35-37、ヨハネによる福音書19:1-3、16-18)。新約聖書で私たちは、イエスが神の前において従順かつ謙虚であり、父なる神の戒律をすべて守る(マタイによる福音書11:29)方だということを知らされます。父なる神は、イエスについて次のように証されます。「あなたは正義を愛し〔神の意思すべてを行い〕、不正を**憎みます**。それゆえ、神…は、あふれるばかりの喜びの油、〔聖霊〕を、あなたと共に立つ者に増して、あなたに注いだのです」(ヘブライ人への手紙1:9)。主イエスは十字架にかけられた時、降りかかる侮辱・軽蔑・不敬・精神的拷問および身体的暴力を、すべて謙虚に(神に対して従順に)お受けになりました。そして、御霊による洗礼をまだ受けておらず、苦難を耐え忍ぶ力がなかったために逃げ失せた弟子たちのために祈られたのです(マタイによる福音書27:12-14、ルカによる福音書23:34)。その後、使徒行伝第2章の1-4節に書かれている聖霊降臨祭の日に、聖霊によって洗礼された時、神の御心をすべて行い、どんな苦難も強く耐え忍ぶ力を授かったのです。

師としてのメシヤは「衰えず、…ついには、地に正義を打ち立て」、そして国々は「その教えを待ち望む」(イザヤ書42:4)のです。救世主イエスは、旧約聖書のメシヤに関する預言をすべて完全に満たした方なのです。このことは、イエスが本当のメシヤ、そして、万物の審判者であることを証明しています。つまり、イエスが死・地獄・墓に対する勝利によってよみがえり、昇天して天国にお戻りになられたことも、この事実を証明しているのです。さらにイエスは、彼の言葉を信じ、従う者たちに力を与える能力を持っています。イエスを信じる者は、内に生き、みわざを行われる主の助けで、神の戒律に従うことができるのです。死・地獄・墓に対する勝利、死人の中からよみがえり昇天した事実、そして内に生き、みわざを行われる主の助けによって、その言葉を信じ従う者たちに力を与える能力によって、イエスは万物のメシヤかつ審判者であることを証明され、欠かすことなく旧約聖書の預言を実現させました。イエスの言葉を信じ行う者たちは、この地におけるイエスの命と行いの継承者、すなわち御言葉の化身の継承者となるのです。イエスの判決は正しいものです。そして世界の諸国民もまた、イエスの一生を学ぶことにより、その裁きが真実に基づく正しいものであり、すべての男女と子供たちに平等であることを知るでしょう。

メシヤが「たとえ話」によって話すであろうことは、事前に記されていました。彼は「昔からの謎を物語ろう」(詩篇78:2)と書かれています。偉大な師、イエスが来た時には「ユダヤ人聖書学者たちとは違い、聖書は何と言っているか、権威を持って」(マタイによる福音書7:29)教えられたのです。当時のユダヤ人聖書学者たちは、他の聖書学者が言ったことをただ引用して教えましたが、イエスは、「**誠に、誠に、あなたたちに告げます**」(ヨハネによる福音書5:24、6:47)と言って、神の聖霊による言葉をきっぱりと確信を持って語りながらお教えになりました。さらに、たとえ話の活用は、イエス特有の教え方だったと言うことができます。「**たとえを使わずには、何もお話しにならなかった。それは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。『私はたとえ話を持って口を開〔く〕』**」(マタイによる福音書13:34-35)とも書かれています。

来るべきメシヤは、神ご自身と同じ正義であり、他の人間より清く賢い方であろうと、旧約聖書は率直に述べています。「清く、悪も汚れもなく、罪人から離れ、天よりも高く」(ヘブライ人への手紙7:26)。全世界の歴史上、メシヤ・イエス以外に、これに該当する者がいるでしょうか。

世界における文学上の奇跡－メシヤ・イエス、完璧なる神人（神が内に住み、みわざを行う人）の描写

さて、ここで私たちは、世界文学上の奇跡に出会います。それは、新約聖書に描かれる完璧な神人、メシヤ・イエスの描写です。旧約聖書中に抽象的に描かれている、来るべき完璧なメシヤの描写は、新約聖書のメシヤ・イエスによって具体的な現実となっています。主イエスとして、「麗しい方」（雅歌５：１６）、「万人よりすぐれた方」（雅歌５：１０）、天の父親の喜びである方、これらすべての条件を備えた一人の人間に出会います[14]。

その神性が、人間性に征服させることは決してありませんでした。人間に潜む自尊心でその完璧さを汚したり、愚かさによってその知恵を損なうことも全くありませんでした。偏見によって公平さをねじ曲げたり、利己的な気まぐれでその正義を堕落させることもありませんでした。イエスは尊厳と共に、神の意を行おうという謙虚さを併せ持っていました。他人

14. 神の認可を得たなどと言って過去の不純と将来の犯罪を正当化した悪賢いマホメットを、イエスと比較してみてください。主イエスは、マホメットとはあまりにも違います。イエスは「もし私が父のみわざを行なっていないなら、私を信じてはいけません」(ヨハネによる福音書10:37)とまで言われました。

への心遣い、熱意、忍耐と共に、正直さを保った如才なさ、罪なき率直さを備えていました。神の威厳を持っていながら、それは、優しさ、忍耐、忠告、叱責、そして偉大なる力、サタンへの憎しみと、サタンに対して全く後に引かない不屈な態度と調和していたのです。

イエスは負けることを知りません。自分の発言を撤回する必要も、謝罪を申し出る必要も、教えを変える必要も、罪または過ちを告白する必要も、人類からの助言を求める必要も、全くありませんでした。常に正しい答え（神の意志と御言葉）を知っていたからです。

常に善を行い、祈りを捧げ、あらゆる機会において神の栄光と感謝を述べ、物を貯め込むことに興味など持たない方だったのです。貧困の中で生き、この世を去りながらも、十字架の上で苦難を受けるその時まで、何も不自由したことがなかったのです。

イエスの奇跡はすべて慈善の心に富むものであり、決して自慢するためのものではありませんでした。イエスは完璧な師であり、自らの教えどおりに実際に生き抜かれました。本当の意味で「人の子」であり、私たち人間の一人として存在しましたが、罪を犯さなかったという点では人間では**なかった**といえます。イエスはこの地ではなく天から来られた方であり、無比無類な神の息子だったのです。「この方のように話す人間は他にいません」。彼は、救われた人の内に生き、みわざを行う御霊を通して、父なる神と共におられるイエスの存在によって、一人の人間が完璧な存在となることを示されたのでした。

「私は世の光です」(ヨハネによる福音書9:5)と言ったこの方は、数多くの生まれながらの盲人たちの目を見えるようにされたのです。この奇跡によって、イエスがまさにメシヤだという事実を、皆が理解できるようにするためです。「私は蘇生した者です。命です」(ヨハネによる福音書11:25)と仰せになり、ラザロを生き返らせることにより、この言葉がありのままの真実であることを証明したのです(ヨハネによる福音書11:43-44)！「私は命のパン〔神の御言葉〕です」(ヨハネによる福音書6:35)と仰せになり、数塊のパンと数匹の魚で五千人に食事を与えるという奇跡によって(ヨハネによる福音書6:5-14)、自らが「命のパン」であるという強力な証拠を示されたのです（これは、イエスが「命のパン」であり、私たちの魂の糧であるということを表しています）。もしイエスが真のメシヤ（世界の救世主）でなかったら、その約束は嘘となり、結局はこ

の世で永遠に人々をだましたことになります。それは人類に対する容赦ない大罪であり、信じがたい無謀さと愚かさであり、絶対に許されないうぬぼれに他なりません。しかし、イエスのように善良かつ愛情深い方が、このような悪を行うはずがありません。私たちは、イエスが本当にメシヤであり、神の息子であり、人類の救い主としてこの世に来られた方であると確信しているのです。

主イエス・キリストの栄光については、すでに数多くの本が書かれ、今後も増え続けると思いますが、イエスが目に見えない神の明白な現れであり(ヘブライ人への手紙1:3)、あらゆる善の総体かつ本質であり、神の性質が人の形をとって宿っている方(コロサイ人への手紙2:9)と述べるだけで十分ではないでしょうか。イエスの神聖さはくもりない光沢となって世に輝きました。その美しさは、神の栄光と同じ清く純粋なものでした。完璧な神人でありながら、他に比べようのない不当な苦難を受け、私たちのために死んでくださったイエスのような愛を、人類は全世界の歴史を通して一度も経験したことがありませんでした。その愛は、神の愛のように無私無欲で完全なものでした。イエスは全人類の犠牲となって十字架の上で死んだ時も、不平を言わずに苦難を受けました。

(2)メシヤの超自然的な「奇跡」のみわざは、はっきりと預言されています。メシヤの刻印として、神に任命され、神から遣わされた救い主であることを証明するためには、超自然的なみわざを示さなければなりませんでした。「特殊な」みわざとして、メシヤは人類を救うために、その身代わりのいけにえとして、ご自身を捧げられます。

「神である主の霊が、私の上にある。主は私に油〔聖霊〕を注ぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者を癒すために、私を遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放〔人間がどのように罪とサタンの拘束から解放されることができるか〕を告げ、主の恵みの年…を告げ…灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは正義の木、〔神の〕栄光を現わす主の植木と呼ばれよう」(イザヤ書61:1-3)。イザヤがこう預言したように、メシヤはあらゆる務めを通して人々に祝福をもたらすことになっているのです。

人々の間におられる主なる神として、メシヤは、卓越した奇跡のみわざを示さなければなりませんでした。

「『見よ、あなたたちの神…は来て、あなたたちを救う』。その時、盲人の目は開かれ、難聴者の耳は開けられる。その時、足のなえた者は鹿のように飛び跳ね、声なき者の舌は喜び歌う。荒野に水が湧き出し、荒地に川が流れる」(イザヤ書35:4-6)。

「主としての私は、正義を持ってあなたを召し…あなたを聖約として、そして国々の光として民に与える。こうして、盲人の目を開き〔主の知識を持たない者にその知識を与え〕、囚人を〔罪とサタンの〕牢獄から、闇の中…〔の〕獄屋から連れ出す」(イザヤ書42:6-7)。神への信仰と、私たちの内に生き、みわざを行われている神の力への従順さによって、サタンの力は崩れるのです。

メシヤは「地の果てまで…の救い」(イザヤ書49:6)に来られる世界的な**救い主**、「国々の光」(イザヤ書42:6、11:10)、そして「イスラエルを救う、その聖なる方」(イザヤ書49:7)なのです。

新約聖書も、イエス・キリストを世界的な救世主として描いています。「神は、実に、そのひとり息子をお与えになったほどに、**世**を愛された。それは神の息子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠の命を持つためである」(ヨハネによる福音書3:16)。

預言者シメオンが神殿で、まだ赤子であったイエスに会った時、彼はこの子がメシヤ(救世主)であることを知っていました。そして言いました。「主よ。…私の目があなたの御救いを見〔ました〕。御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光です」(ルカによる福音書2:29-32、1:68-79、ロ―マ人への手紙3:29)。

メシヤの**特殊な**みわざは、ご自身の魂と体をすべて、一度だけ、身代金・供え物・いけにえとして捧げることでした(イザヤ書53:4-6、10、12)。このみわざによって罪人が救われた時、過去の罪すべてが赦されるのです。そしてまた、救われた者が無知のために罪を犯しても、その罪に気づき、再び同じ罪を犯さなければ、赦しを得られるのです。しかし、悔い改めた後に、もう一度罪を犯すとしたら、それはもはや無知の罪と解釈されず、意図的な罪ということになります。救われた後、意図的に罪を犯せば(「死に至る罪」)、もはやそれは許されようのないものです[15]。ご自身をいけにえとして捧げるという、この最大の犠牲によって、メシヤはサタンの頭を「踏み砕く」のです(創世記3:15をヘブライ人への手紙2:14、ヨハ

15. ヘブライ人への手紙6:4-8、10:26-29、ヨハネの第一の手紙5:16-17

ネの第一の手紙3:8と比較参照)。そして、この偉大な贖罪の行いによって、メシヤは永遠の御国を確立されるでしょう(ダニエル書7:14、イザヤ書9:7、ルカによる福音書1:32-33)。

神聖なる完璧さ、「みわざ」および十字架の上での特殊な「みわざ」に関して、新約聖書のイエスと旧約聖書でのメシヤが完璧に一致するということが分かります。

イエスの行った多くの奇跡(みわざ)は、**その世代の人々によく知られていました**。ペテロは聖霊降臨当日の説教で、イエスがメシヤである**証拠**として、イエスの奇跡の務めについて事実を伝えました。

「イスラエルの人たち。この言葉を聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたたちの間で、**力あるわざと、不思議なわざと、証の奇蹟**を行なわれました。それらによって、神はあなたたちに、この方の証をされたのです。これは、**あなたたち自身が承知のことです**。…ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や**主ともメシヤ**ともされたこのイエスを、あなたたちは十字架につけたのです。〔そして神は、イエスを死からよみがえらせたのです〕」(使徒行伝2:22、24、36)。

福音書(新約聖書のはじめの4つの書)の中で、イエスは触れ合いを持った求道者たちを皆祝福し、救い、そして助けの手を差し伸べたとあります。病気の者を治し、らい病人を清め、盲人の目を開き、死者を生き返らせ、飢えている者に食物を与え、ガリラヤ湖の水の上を歩き、その他にも多くの奇跡を行なったのです[16]。

洗礼者ヨハネは、ヘロデ王により投獄された後に、彼の弟子のうちの二人をイエスのもとへ送り、「おいでになるはずの方〔メシヤ〕は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか」とたずねることにより(マタイによる福音書11:2-3)、イエスに「あなたはメシヤですか。メシヤではないのですか」という直接的な質問を投げかけたのです。イエスの返答は、彼の**奇跡のみわざ**をヨハネと彼の弟子たちに思い出させることでした。そうすることにより、彼がメシヤだったことを、彼らに確信させます。というのは、**メシヤのみがそれらのみわざを行うことができた**からです。

「自分たちの見聞きしていることを〔**もう一度**〕ヨハネに報告しなさい。盲人に物が見え、足のなえた者が歩き、らい病人が清められ、難聴の人

16. マルコによる福音書1:32、34、40-42、ヨハネによる福音書6:9-13、19-21、9:6-7、11:43-44

が音を聞き、死人が生き返り、貧しい者には福音〔神の国と救いの教え〕が述べ伝えられているのです」(マタイによる福音書11:4-5)。**これらは、まさに旧約聖書に述べられているメシヤの印なのです!**

人々を治し、祝福して慈善の務めをされた後、イエスは、この世に来られた理由である偉業、世の始まる前から決められていた運命である偉業を成し遂げられたのです(ペテロの第一の手紙1:18-20)。人類を救うために身代わりのいけにえとしてご自分を捧げ、十字架の上で死んでくださいました。

「イエス・キリストは、すべての人の救いの代價として、ご自身をお与えになりました」(テモテへの第一の手紙2:5-6)。

「イエスの死は、神の恵みによって、すべての人のためにイエスがお受けになったものです」(ヘブライ人への手紙2:9)。

イエス・キリストは「ただ一度、今の世の終わりに、…ご自分をいけにえとして罪を清めるために現れました」(ヘブライ人への手紙9:26)。

イエスご自身が、自らを信じるよう、またはその「わざによって」自らを信じるよう、人々に強く言いました(ヨハネによる福音書14:11)。「私が父におり、父が私の内におられることを、あなたは信じないのですか。私があなたたちに言う言葉は、私が自分で話しているのではありません。私の内におられる父が、ご自分のわざをなさっておられるのです。私が父におり、父が私の内におられると私が言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい」(ヨハネによる福音書14:10-11)。

イエスがメシヤであると証明する下記の７**つの**証拠を揃えることなど、偽のメシヤには不可能です。

(1)処女から生まれる。

(2)神が内におられるため、神と同じく完璧である。

(3)「奇跡」のみわざを行なう。

(4)人類の贖罪のために、いけにえとしてご自分を捧げる。

(5)死からよみがえる。

(6)何百もの証人の前で、天国に昇天する。

(7)自らに与えられた地位である、神の知恵と力の座に着く。

こうした7つの必要条件は、偽の「メシヤ」をふるい落とすだけでなく、すべてを実際に満たしたナザレのイエスが真のメシヤであるという、確固たる証拠にもなるのです!

イエスによる神の国と救いの教えは、過去20世紀の間に、文字通り世界中に伝道されました。多くのユダヤ人同様、何百万人もの非ユダヤ人たちもイエスを信じ、また信じ続けています。イエスは本当に全世界の救世主、「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネによる福音書1:29)なのです。その愛は世界を包みます(ヨハネによる福音書3:16)。その救いは地上のすべての人々に与えられるものです(マルコによる福音書16:15)。「御名の他には、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです」(使徒行伝4:12)。

さらに多くの印に見られる圧倒的な累積的効果

これまで、セムから始まり、アブラハム、イサク、ヤコブ、ユダ、エッサイ、ダビデを通り、定められた時と場所でのメシヤの処女降誕(「女の子孫」)に至る、メシヤの系図を見てきました。その結果、ひとつの落ち度も無く、ナザレのイエスですべてが完全に満たされていることも分かりました!

また、系図の記録がすべて西暦70年に滅ぼされたことから、それ以降にメシヤを自称する者が自身を証明しようとしても、それが不可能であることも分かりました。

私たちは、旧約聖書がメシヤを預言すること、そしてそのメシヤは、癒しの奇跡を特徴とする、慈善の務めをもたらす完璧なる神人(イマニュエル、「私たちと共にあられる神」)であり、その偉業は(メシヤを信じる)人類を救うために、いけにえとしてご自分を捧げることであると説明してきました。4つの福音書に書かれているナザレのイエスは、これらすべてを完全に満たしました。ひとつたりとも見逃さずに預言を次から次へ実現させていった累積的効果は圧倒的なものです。

ここで、比較的少数の特別な「印」さえあれば、数十億人の中から容易に一個人を見極められるということを、例を挙げて説明します。

デービッド・グリーングラスを見分ける

第二次世界大戦後、ロシアに原子力機密情報を渡した売国奴デービッド・グリーングラスは、指名手配犯として米国政府に厳しく追求され、メキシコへ逃亡しました。共犯者たちは、グリーングラスがメキシコシティ駐在のロシア大使秘書と会うよう手配し、グリーングラスが本人だと分かるような印を事前に設けたのです(同一の指示が、グリーングラスとロシア大使秘書の両者に出されました)。

(1)グリーングラスが秘書にメモを書き、「I・ジャクソン」という名で署名すること。(2)3日後に、メキシコシティのコロンブス・プラザ(Plaza de Colón)へ行くこと。そして、(3)コロンブスの彫像の前に立つこと。(4)その時に、中指を旅行案内書の間に挟んでいること。(5)秘書が近づいて来た時、その彫像がすばらしいと言うこと。そして、オクラホマ州出身であると告げること。(6)秘書は、そこで彼にパスポートを渡すこと。言うまでもなく、この計画はうまく行きました[17]。

わずか六つの識別サインだけでも、それらをすべて知らない限り、どのようなペてん師でも、その秘書をだますことは不可能だということを、(皆が知っているように)彼らもよく分かっていたのです。神は、メシヤを認識するために(メシヤの処女降誕や復活など)偽のメシヤには到底装うことができないような印を、六つといわず何百も人類に与えてくださったのです!私たちがここでお話している**事実をよく考えれば、メシヤは預言され、新約聖書のイエス・キリスト以外には、そのメシヤでありうる者はいないということを確信し、理解していただけると思います。**

公平な考えの持ち主が、ここで話していることを熟考すれば、メシヤ第一の到来に関連する何百もの預言をすべて成就した新約聖書のイエス・キリストが、メシヤになりうる、全歴史における唯一の人間だということ、そしてまた、聖書のメシヤの預言は他のどの本とも違う特別なものであるということを確信できると思います。

三. メシヤの預言に見られる預言的逆説

旧約聖書を読むと、来るべきメシヤに関する預言が、時として非常に矛盾し合っているように見えます。そのため、実現不可能だと思われるような奇怪な預言的謎にも遭遇します。このような相容れない、どう見ても矛盾して見える預言を「**預言的逆説**」と呼びます。「預言的逆説」は、実際に不条理ではないけれど、預言の実現の中にある手がかり無しでは解決不可能な謎を持った、互いに矛盾しているように**見える**複数の預言として定義されます。旧約聖書には、メシヤに関するこうした預言的逆説が数多く存在します。これらは、新約聖書がイエス・キリストにおいて答えを示してくれない限り、解決の望みが全く無い謎なのです。預言におけるこれ

17. これらの事実は、1951年4月2日版の『The New Leader』誌からの引用です。

らの逆説は、新約聖書だけに**鍵**が秘められているのではと思わせるような隠された要素を持っています[18]。その鍵は、まさにメシヤ・イエスです。

多くのメシヤの預言（の逆説）が持つこの驚くべき特徴は、邪悪な人間と過度の熱意を持った弟子たちが、故意に預言を実現すること(もし彼らにそれができればの話ですが)を防ぐためです。預言のいくつかは、それが実現し、明確になるまで完全に理解されませんでした(ペテロの第一の手紙1:10-11)。これほど独自の預言は、預言を定められた神と、それらを成就された摂理の神が同じ方だということを、疑いなく証明しています。

預言的逆説に関し、驚くべきことはまだあります。新約聖書に記されたイエス・キリストの生涯において、神の摂理によって実現されたこれらの預言が奇跡的でありながら、その有様があまりにも平凡かつ自然であったということです。話を合わせるために、事実または預言のいずれかをこじつけたり、無理に操ったりする必要もないのです。

こうした「ありえない」対比の見られる預言のいくつかを、しばらく検討してみましょう。まず、神が子供として生まれるために、この地に来るという点です。メシヤは神によって生まれますが、神ご自身でもあられるのです。「息子」としてこの地で一生を過ごされますが、「永遠の父」(イザヤ書9:6)でもあられるのです。神によって選ばれ、任命された尊い方であるにもかかわらず、人から軽蔑され、拒まれ、「悲しみの人で、心の痛みを知っていた」(イザヤ書53:3)方でもあるのです。ユダヤ人のもとを訪れ、その国に拒まれ、非ユダヤ人たちによって求められ、「諸国の民の光」となるのです。罪が無く、ことごとく慈善に満ちた務めをもたらす、神である人、人である神なのです。「憎悪される」と同時に高められるのです。「断たれ」ながらも、その命はとこしえに保たれるのです。悲嘆と栄光、辛苦と勝

18. 恐らく史上最高の手品師であるハリー・フーディーニが、パリで錠を開ける芸を披露した時のことです。地元の手品師は、フーディーニと全く同じことができると断言し、フーディーニの特殊な鍵がかかった檻から翌日に脱してみせると公言しました。この悪賢いフランス人の手品師には、隠れた共犯者がおり、その共犯者が、アメリカの手品師から錠の組み合わせを密かに聞き出していたのです。しかし、フーディーニはそのごまかしに気づき、その夜、錠の組み合わせを変更したのです。翌日、高飛車なフランス人は錠を開けることができず檻に閉じこめられたのです。群衆の嘲笑の中、新しい組み合わせを見つけようと無駄な努力をしましたが、最後には、フーディーニに泣きつかなければなりませんでした。フーディーニは、公然とこのフランス人の手品師に恥をかかせた後、檻から出したのです。そのすぐ後で、フーディーニは彼と聴衆に、新しい5文字の組み合わせを知らせました。それは「F-R-A-U-D」（詐欺）というものでした。鍵を開けることができるのは、その組み合わせを設定した者だけだったのです。これらの不思議な旧約聖書の預言を**錠**として与えた神は、その謎を解き明かす組み合わせを熟知しています。神のみが熟知しているのです。イエスは、謎を解く「鍵」を持っていました。その「鍵」とは、イエス自身とその務めだったのです！ 虚偽の「メシヤ」はすべて詐欺師です！

利、屈辱と称賛、十字架と王冠が、非常に複雑かつ揺ぎなく交じり合っていたため、古代ユダヤ人の解説者たちは、これらを和解させることができませんでした。旧約聖書の預言と新約聖書の実現に見られる、来るべきメシヤの全貌はあまりにも斬新であり、謎に満ち、自然であり、そしてまた複雑きわまりないため、過去も現在もこれからも永久に、文学界中の驚異として残ることでしょう。

来るべきメシヤの預言に見られる多くの預言的逆説の中から数件を選び、より詳細に検討してみましょう。

(1)メシヤの誕生に関して、次の預言が著しく矛盾していることに注目してください。処女から子(息子)が生まれる…これは他に例のない現象です。そして、この息子は**神**、「私たちと共にあられる神」であり…神から生まれ、かつ同時に神の化身であられるのです!

「主みずから、あなたたちにひとつの印を与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『**インマヌエル**』と名づける」(イザヤ書7:14)。

「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な〔奇跡的な〕助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる」(イザヤ書9:6)。

これらの驚くべき預言を満たすために、神は「生物学上の奇跡」をもたらされ、イエスは聖霊によって受胎され(ルカによる福音書1:35)、マタイ1:16-25に書かれているとおり、処女マリアから生まれました。実現する700年前に与えられたこの二つの預言を満たすため、神はご自分の息子として、この地を訪れました。そして、化身が現実となったのです。「いと高き方の息子」はマリアの息子(人間の体における神の現れ)となりました(ルカによる福音書1:31-33、ヨハネによる福音書1:1-3、14、テモテへの第一の手紙3:16)。そして、マリアに男性との経験がなかったにもかかわらず、このすべてが実現したのです(ルカによる福音書1:34)。

メシヤは処女から生まれた**神人**であった(イザヤ書7:14、9:6)だけではなく、不思議なことに、女の子孫(創世記3:15)、人の子(ダニエル書7:13)、神の息子(詩篇2:7)、アブラハムの子孫(創世記22:18)、そして、ダビデ王の身から出た「実」(詩篇132:11)だったのです。しかし、いかにして神が人となり、人が神となり得るのでしょうか。同じく、いかにして人の子であると同時に、神の息子であり得るのでしょうか。神でありながら、い

かにして神から生まれることができるのでしょうか。「人の子」でありながら人間の父親がいないというのは、どういうことなのでしょうか。その女性が「男性を知らない」のに、メシヤがその「女の子孫」となり得るでしょうか。一体どうやって、一人の人間をこれら**すべて**にあてはめることが可能なのでしょうか。イエスは、これらすべてにあてはまる、まったく驚くべき謎の存在です！主イエスは、過去・現在・未来を通して常に神であられます(ヨハネによる福音書1:1)。イエスはひとりの人間(ヨハネによる福音書1:14)として「女〔処女〕から生まれ」ました(ガラテヤ人への手紙4:4)。「人の子」、すなわち、完璧な人間の例(ルカによる福音書19:10)でありながら、「神の息子」でした(ヨハネによる福音書3:16)。「アブラハムの子孫」であり、「ダビデ王の子孫」でもありました(マタイによる福音書1:1)。聞いてください！これはまさに歴史的奇跡です。イエス・キリストは完璧な人間でありながら、まさしく神であられる方。神から生まれ、そしてかつ、神の化身である方。神と人がひとつになった、愛に満ちた、他と比べることのできない方なのです！福音伝道者ヨハネは「神の奥義…そしてキリストの奥義」と呼ばれる絶大な謎を、次の言葉で説明しています(コロサイ人への手紙2:2、4:3)。

「〔神であり、父のふところで神と共にあった〕言葉は、人となって私たちと共に住まわれた（私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られた、ひとり息子としての栄光である）。この方は恵みと誠に満ちておられた」(ヨハネによる福音書1:1-2、14、18)。

(2)イエスの出身地－イエスはどこの出身なのでしょうか。ベツレヘムでしょうか。エジプトでしょうか。ナザレでしょうか。ここに、もうひとつの複雑な預言を紹介します。その預言は「あなた〔ベツレヘム〕のうちから、私のために、イスラエルの支配者になる者が出る」と言っています(ミカ書5:2)。しかし、聖書の別の一節は、「〔私は〕息子をエジプトから呼び出した」(ホセア書11:1をマタイによる福音書2:15と比較参照)と言っています。そして、預言者たちが口伝えにイスラエルの人々に語り、一般に広まった預言も存在しました。メシヤが若枝(ヘブライ語の「**neh-tzer（ネッツェア）**」＝「切り離されたもの」または「ナザレ人」の意)と呼ばれているイザヤ書11:1に基づき、「この方はナザレ人と呼ばれる」(マタイによる福音書2:23)というものです。

これらは矛盾しているでしょうか。いいえ、そんなことはまったくありま

せん。なぜなら、神に定められた生涯を通して、その謎を解くことができる方が来られたからです。ミカが言ったとおり、メシヤ・イエスはベツレヘムで**生まれた**のです。その後すぐ、ヨセフとマリアに連れられてエジプトに行きました。そこから、邪悪なヘロデ王の死後、神によって聖地（イスラエル）へと「呼び戻されます」(マタイによる福音書2:13-21)。そして、ヨセフとマリアはまだ子供であったイエスを連れてイスラエルに戻り、ナザレに定住しました（ここで、主は成長されたのです）[19]。故に、務めを行っている間、「ナザレのイエス」(ルカによる福音書18:37、使徒行伝2:22)と呼ばれたのです。ベツレヘムで生まれたにもかかわらず、誰からも「ベツレヘムのイエス」と呼ばれたことがなく、「ナザレのイエス」と呼ばれながらも、ベツレヘムで生まれたことが周知の事実であったのはおかしいと思いませんか。

ユダの部族であり、ベツレヘムで生まれながら、ユダヤの地でユダの部族の同志と住まず、ガリラヤに住んでいたため、イエスは真の「ナザレ人」すなわち「切り離された者」だったのです。同様に、古代（創世記時代）のヨセフも離卿して兄弟と切り離され(「nazir（ナジール）」)、エジプトで非常に長い年月を過ごしたのです(創世記49:26参照。ここで使われる「切り離す」という言葉は、ヘブライ語の「**nazar（ナザール）**」を語源とする)。

イエスの一生を語る、史実に基づく記録は、矛盾しているように見える3つの預言を、一点の曇りもなく明白なものとします。

(3)いかにして、メシヤがダビデ王の子孫…であると同時に、ダビデ王の主であり得るのでしょうか。

イエス自身、パリサイ人に対してこの興味深い問いかけを行いました。彼はパリサイ人に鋭く尋ねました。

---

19. ここに「この方〔イエス〕はナザレ人と呼ばれる」（マタイによる福音書2:23）という、預言の成就の理解を助ける歴史的な情報があります。ヨセフとマリアがエジプトからイスラエルへ戻った時、ヨセフは明らかにユダヤ地方のベツレヘムの近くに住みつくつもりでした。「しかし、アケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行って留まることを恐れた。…ガリラヤ地方に立ち退いた。そして、ナザレという町に行って住んだ。これは『この方はナザレ人と呼ばれる』という預言が成就するためであった」(マタイによる福音書2:22-23)。憤怒の間、死を目前にしたヘロデ王は遺言状を変え、アンティパスの代わりに、生存する息子たちの中で最も悪いアケラオを統治者に任命したのです。ヨセフが別の住居を求めたのは、アケラオに対する恐れのためでした。その時に、神は彼をナザレへ導かれたのです！ 従って、ご自分の意志を成就させるために人間の怒りさえ使う神は、預言を成就するために、この短気な王の怒りを利用したのです(詩篇76:10)！ ヨセフとマリア、そしてイエスがナザレへ行くことになった事実は、数百年も前に神が預言していたのです。神が私たちの動きをすべて知っており、この世を創造なさる前から、あらゆる成り行きを終りまでご存知でもあることが分かります(イザヤ書46:10)。神はこうして、私たちの心の中の悪に満ちたあらゆる考えや意図、悔い改めの見られない悪行すべてに関して、最後の審判の日に私たちを裁かれるのです(マタイによる福音書12:36-37、ロ―マ人への手紙2:16、ヘブライ人への手紙4:12-13)。

「『あなたたたちはメシヤのことをどう思うか。彼は誰の子孫だろうか』彼らが『ダビデ王の子孫です』と答えると、イエスは言われた。『では、なぜダビデ王は、霊によって、メシヤを主と呼んでいるのだろうか。「主は私の主にお告げになった。『私の右座につきなさい、私があなたの敵を足元に屈服させる時まで』と」こうしてダビデ王がメシヤを主と呼んでいるのなら、なぜメシヤがダビデ王の子孫なのか』」(マタイによる福音書22:41-45―ここでキリストは詩篇110:1を引用しています)。

メシヤをダビデ王の子孫かつ主として考えるのは難しいことでしょうか。新約聖書が示す事実に解決の鍵を見出せる者にとっては、全く難しいことではありません。メシヤ・イエスは、人としてはダビデ王の子孫であり(ルカによる福音書1:32、ロ―マ人への手紙1:3)、メシヤが神、王の王、万物の主(黙示録19:16)であるという点で、ダビデ王の主なのです。メシヤはエレミヤ書23:6で「**主は私たちの正義**」と呼ばれ、マラキ書3:1では主(ヘブライ語でHa-adon＝ハアドン)そして詩篇110:1では主(ヘブライ語でAdoni＝アドニ)と呼ばれています。イザヤ書9:6、マタイ1:23、ヨハネによる福音書14:8-10を読んでください。これらはすべて、旧約・新約聖書で使われている多くの神の呼び名です。メシヤがダビデ王の主であるだけでなく、**万物の主**であることは明らかです。

(4)メシヤ・イエスの持つダビデ王の継承権－ここで、複雑難解な謎に出会います。非常に難解なので、問題と回答を頭の中でよく理解しながら読むには多少の集中力を要すると思いますが、後で努力のかいがあったと思われるはずです。

イエス・キリスト(ダビデ王の子孫)は処女から生まれなければならず、同時に、ダビデ王の王座を引き継ぐ法的権利を持っていなければなりませんでした。しかもその上に、さらに二つ満たさなければならない条件がありました。それは、エコヌヤという邪悪な者がソロモンの子孫におり、その子孫は決してユダを支配しないだろうと書かれていること(エレミア書22:28-30)、そして、イスラエルでは**父方の血縁を通してのみ王権が引き継がれていた**ということです。これに追い討ちをかけて、イエスは処女から生まれたため、父方の血縁を持っていなかったのです！

メシヤが「ダビデ王の王座」を受け継ぐことは間違いなく預言されていました(イザヤ書9:7、エレミア書33:15-17、詩篇132:11、歴代志上17:11、14)。しかし、処女から生まれなければならない(父方の血縁を持

たない)となると、**いかにしてダビデの王座への法的権利を得られるのでしょうか**。そして、エコヌヤの罪による難関をいかにして越えることができるのでしょうか。誰が見ても実現不可能なこれらの預言を、実現させることができるのでしょうか。それは、特異な預言を考案し、その成就を成し遂げる全知の神にお任せしましょう。「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」(イザヤ書9:7)と、預言者イザヤが言ったことを思い出してください。

メシヤ・イエスにおいて、明らかに不可能な難関の答えが出され解決されただけでなく、神は新約聖書の系図の中でイエスがどのようにそれを成し遂げたかについて、完全な記録を残してくださいました。マタイによる福音書では、イエスの系図は**ヨセフ**(義理の父)に遡ります。この系図は、イエスが「ダビデ王の子孫」であり(従って、ダビデ王の継承権を持っており)、「アブラハムの子孫」であるということ(従って、約束の地、すなわちアブラハムとその子孫に与えられた領土所有権を持つということ)を、示しているのです[20]。

ヨセフはマタイの系図によると、ダビデと跡継ぎの**ソロモン**に始まる王族の血筋を引き、**王位相続**の血統を持ったとされています。しかし、ヨセフはエコヌヤを通したダビデ王の子孫であったため、自身が王座を継承することは禁じられていました。マタイによる福音書の系図には、イエスが、ヨセフを通した「ダビデ王の身から出た者」(つまりヨセフによるダビデ王の血のつながった子孫)では**なかった**ことが注意深く示されています。

ルカによる福音書3:23-38の中で、イエスの系図は**マリア**に遡ります(ヘリはヨセフの父、つまり、明らかにヨセフの義父[21]、マリアの実の父だったと23節に書かれています)。イエスはこの記録の中で、母マリアによって**実際に**「ダビデ王の身から出た実」とされたと説明されています。ここで重要なのは、マリアはダビデ王を初代とする**王室**と血がつながっていながら、**王位相続**の血統には属していなかったということです。王権は**ソロモンから続く**系図に属しており、彼女は**ナタンから続く**子孫だったからです(歴代志上28:5-6)。従って、イエスが生まれる前に、ヨセフがマ

---

20. ルカによる福音書3:38の中で、イエスの系図がヘリ(マリアの父親)によって**アダム**と**神**まで過去にさかのぼっているのは興味深い事実です。イエスは「〔神によって世界を与えられた〕アダムの子孫」であり、地球全体の所有権(創世記1:27-30、ヘブライ人への手紙2:6-9、黙示録5:1-10)を持っていました。イエスは「神の息子」であり、「**万物**」の所有権(ヘブライ人への手紙1:2)を持っているのです。

21. マタイによる福音書の系図に、「ヤコブにヨセフが生まれた」(マタイによる福音書1:16)と書かれていることは注目の価値があります。ヨセフの実の父親はヤコブであると言っています。しかし、ルカによる福音書では、「ヨセフはヘリの息子」(ルカによる福音書3:23—ヘリの娘と結婚しているという意味で、「息子」)と書かれています。これはユダヤ人の習慣に従っています(サムエル記上24:16)。

リアと結婚することが絶対に必要だったのです。そして、全くそのとおりになりました。

「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフの妻と決まっていたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。…主の使いが夢に現われて言った。『ダ**ビデ王の子**、ヨセフ。恐れないであなたの**妻マリア**を迎えなさい。その胎に宿っているのは聖霊による者です』」(マタイによる福音書1:18-20)[22]。

メシヤ・イエスはこうして、マリアの系図を通してダビデ王家との**血統**を確保しました。そして、マリアと同じく「ダビデ王の子孫」であったヨセフとマリアが結婚することにより、イエスは、ダビデの王座への**法的**権利を確保したのです(マリアはイエスが生まれる前からヨセフの**妻**であったため、ヨセフはイエスの法的な父となります)。また、メシヤ・イエスはエコヌヤの血のつながった子孫で**ない**ため、エコヌヤに関する預言もここでまた満たされます。これよりも複雑難解で、このような正確さで成し遂げられた出来事を他に聞いたことがありますか。

イエスの両親(育ての親ヨセフと、実の母マリア)は、ヨセフとマリアであることが不可欠だったのです。この二人だけが、その世代で唯一、メシヤの預言を満たす両親となり得たのです。そして、イエスがヨセフの系図によってダビデ王の法的継承権を得られるよう、ヨセフとマリアはイエスが生まれる前に結婚しなければなりませんでした。同時に、エコヌヤの子孫に対して王座継承が禁じられていたため、メシヤがヨセフの実の子であってはなりませんでした。ヨセフとマリアは結婚していなければならず、メシヤは処女から生まれなければならなかったため、ヨセフはイエスの誕生後まで、マリアを妻として「知る」ことができなかったのです。神の采配による預言の成就は、あらゆる詳細にわたって完璧なものとなりました!

(5)メシヤは、礎の石でもあり、妨げの岩でもあるとされていました。

「この方〔メシヤ〕は…イスラエルの二つの家〔イスラエルとユダ〕〔そして全世界〕にとっては、つまずきの石、妨げの岩…となる」(イザヤ書8:14)。

「家を建てる者たちの捨てた石〔メシヤ〕。それが〔新しいエルサレム、

22. 聖書に記された家系図の重要性を軽く見るのは大きな間違いです。これらは、ナザレのイエスが預言される**メシヤ**であり、ダビデ王の継承権を有することを証明する上で、最も重要なものだからです。ちなみに新約聖書における家系図は、イエスがダビデ王の子孫である**証拠**を神がどれだけ重要視しているかを示しています。この家系図は、イエスがメシヤの家系に関する預言を実現したことを証明する強力な証拠なのです。

つまり、神の真の教会であり、キリストの花嫁（すべての信者）である〕礎の石になった」(詩篇118:22、イザヤ書28:16)。

この謎を解き明かす鍵は単純なものです。それはイエスを**信じるか否か**によるのです。信じない人々にとって、メシヤは「つまずきの石」「妨げの岩」となるでしょう。信仰、不信仰を問わず、すべてはイエスに対する各人の姿勢によることをペテロは示し、その謎を説明しています。

「聖書には、こう書いてあるのです。『見よ。私はシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼を信頼する者は、決して失望しない』。従って、信心深いあなたたちには尊いものですが、信じていない人々にとっては『家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった』のであって、『つまずきの石、妨げの岩』なのです。彼らがつまずくのは、御言葉に従わないからです」(ペテロの第一の手紙2:6-8、ロ―マ人への手紙9:32-33)。主イエスが新約聖書において預言を実現したことに、しばしば注意が促されています。

「イエスは彼らに言われた。〔パリサイ人（ユダヤ教のグループのひとつ）〕『あなたたちは、次の聖書の言葉を読んだことがないのですか。「家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである」』」(マタイによる福音書21:42)。

主はまた、次の意義深い御言葉を加えられました。「〔主の慈悲と力を求めて〕この石〔イエス〕の上に落ちれば、誰でも粉々に砕け〔自己に依存した希望が完全に砕かれ、主のみを信じるようになり〕、この石が〔裁きを持って〕人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛び散らせて〔この世だけでなく永遠に、その者を完全に滅ぼして〕しまうのです」(ルカによる福音書20:18)。

信じる者にとって、メシヤ・イエスは**礎の石**であり、とても尊い方です。信じない者にとって、イエスは**つまずきの石**であり、**妨げの岩**なのです。信じる者には、岩なるイエスが永遠の救いをもたらし、信じない者には、裁きをもたらします。不信仰のためにイエス（石）につまずく人々は、イエスを拒み、結果として永遠の破滅へと自らを落とし入れるのです。

(6)イスラエルによって拒まれた(イザヤ書53:3)メシヤは、「地の果てにまで救いをもたらす、諸国の民の光」となるのです(イザヤ書49:6)。

人種的に、メシヤはユダヤ人(エッサイの根株から出る「若枝」ーイザ

ヤ書11:1、10)であることが不可欠で、現にユダヤ人であるにもかかわらず、非ユダヤ人たちが彼を求めると記されています(イザヤ書11:10)。ユダヤ人と非ユダヤ人の間には何百年も続く敵意が存在しており、こんなことは今まで聞いたことがありません。しかしこの対立は、ユダヤ人と非ユダヤ人がメシヤ・イエスにおいて結束することにより、取り除かれるとされているのです(エペソ人への手紙2:13-15)。

非ユダヤ人の心を覆う、真実を見えなくさせるベールは、神の御言葉を信じることによって取り除かれ(イザヤ書25:7)、反対に、不信仰のベールが(全員ではないが)多くのユダヤ人の心を覆うでしょう。これはイザヤによって預言されていました。この裁きは、イスラエルが自身のメシヤを「さげすみ拒んだ」ためにもたらされました。メシヤ・イエスを受け入れ、そして拒絶する多くの非ユダヤ人の身には、最後の日々に同じ事が起こるでしょう。

イザヤ書6:10で、神はこうおっしゃいました。「この民〔イスラエル〕の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。…〔神に〕立ち返って、癒されることのないよう」。

「私はあなたをしもべとして、…イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。私はあなたを国々の光とし、私の救いを地の果てまでもたらす者とする」(イザヤ書49:6)。

20世紀におよぶ歴史は、これらの言葉が真実であることを証明しています。ローマがメシヤ・イエスを十字架にかけ、イスラエルがそのメシヤを拒んだ時、イスラエル中が不信仰のベールで覆われたのです。その時、主イエスを信じて救われたユダヤ人もいましたが、ほとんどのイスラエル人の心は不信仰のベールで覆われていました(コリント人への第二の手紙3:14-15)。そして、神は非ユダヤ人たちにも福音(神の国と救いの教え)を与え(使徒行伝28:28)、人々を地獄から救うために一人息子を犠牲にされたという、ヨハネによる福音書3:16の栄光に満ちたメッセージは、ユダヤ人と非ユダヤ人、すなわち全世界に伝道されることになったのです。非ユダヤ人が一人のユダヤ人を信じ、救いを求めるとは非常に妙な話ですが、事実は事実です。メシヤが祝福するために遣わされた国家が、メシヤを見捨てたとは全く考えられない話ですが、本当にそうだったのです(ヨハネによる福音書1:11-12)。神の人々でなかった非ユダヤ人が、ユダヤ人であるメシヤの信仰によって神の人々になること

も、途方もないことに思えます。しかし、それが神の方法であり、すべてがそのとおりになったのです。

(7)メシヤには、2つの異なる使命が与えられていました。第一の到来における救世主としての慈悲の務め、そして第二の到来における来るべき王としての裁きの務めです。

メシヤがこの世に初めて来られた時に、罪を悔い改める全世界の人々の罪のため、苦しみを受け、死んでくださったことで、**第二の**到来においては**審判者・王**としての役割を成就されることが明らかになりました(イエスの時代のユダヤ人の中には、これを受け入れるのに苦労した者も存在したようですが)。

イザヤは、神の聖霊の雄弁を通じ、来るべきメシヤの王国の栄光について述べると同時に、歴史家のような正確さで、救世主の勝利に先立つ屈辱、試練、苦悩を描いています。メシヤを栄えある王、神ご自身、全能たる「私たちとあられる神」として描く一方、容貌がひどく損なわれ、骨の関節も外れ、喉の渇きのうちに死んでいく者としても描いています(詩篇22章)。聖なる偉大な国王であり、ソロモンの神殿の栄光を再建する方が、どのようにして、世界の人々が過去の罪を悔い改めるためのいけにえとなり得るのでしょうか。

どう考えても、これらのあまりに対照的な運命を、**同時に成し遂げることは不可能でしょう**。しかし、考えられる答えがひとつだけあります。神の意によると、二つの異なる時期(メシヤの第一の到来と第二の到来)に、神の偉大なる贖罪と救いの計画が実行されなければなりません。

「苦難を受ける」メシヤ(と慈悲の務め)については、審判・王としての行いが記されている聖書の中で、頻繁に述べられています。以下に引用する聖書の句では、第二の到来において行われる(審判としての)みわざについて述べている部分を、**太字**で記してあります。太字でないものは、第一の到来について書かれている部分です。

「神である主の霊が、私の上にある。主は私に油〔聖霊〕を注ぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心が傷ついた者を癒すために、私を遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、**私たちの神の復讐の日を告げ〔る〕**」(イザヤ書61:1-2)。

ゼカリヤ書9:9-10、ミカ書5:1-4、ダニエル9:24のような多くの聖句で、同じように、二度の到来におけるメシヤの行い(第一の到来における

屈辱と贖罪、そして第二の到来における、救われた者たちを天上の永遠の王国へ連れ帰るという行い）が、交じり合って記述されていることが認められます。

メシヤの預言を検討する際に大切なのは、第一の到来、第二の到来、または両者のうち、どの部分について語っているのかを見極めることです。

イエスがナザレのシナゴーグ（ユダヤ教会堂）で、ご自分のことを指してイザヤ書61:1-2の句を朗読された時、「主の恵みの年を告げる」という部分で留まりました(ルカによる福音書4:17-21)。なぜでしょうか。イエスは第二の到来の時まで、**神の復讐の日**をお告げに**ならない**からです。

来たるべきメシヤに関して、これらの預言やその他を研究していた古代のラビ（ユダヤ教聖書学者）は、苦難を受ける者と勝利・裁きをもたらす者、二**人のメシヤ**がいるに違いないという結論に達したのです。ほとんどのイスラエル人たちが今日もそうであるように、当時のイスラエル人たちも、主イエス・キリストが**唯一のメシヤ**であり、二つの全く異なる役目を持たれるという、偉大な真理を理解することができなかったのです。その役割のひとつは、第一の到来で「罪悪をあがなうこと」にあります。もうひとつは、偉大な王としてこの地に戻る第二の到来で、「永遠の正義をもたらすこと」(ダニエル書9:24)にあります。異なる目的を持つ第一および第二の到来において、一見矛盾する多くの預言がどのように関係しているかは、イエス・キリストにおいて明らかになります。二度にわたるメシヤの到来は、イザヤ書11章と53章、詩篇22章、69章、72章、89章などの節で対照的に書かれています。これと同じことが、第一の到来における「メシヤの苦難」、第二の到来における「それに続く栄光」を語る新約聖書の節（ペテロの第一の手紙1:11など）で明らかにされています。また、ヨハネによる福音書3:16-17とヨハネの黙示録19:11-21、ルカによる福音書9:56とユダの手紙1:14-15、そしてルカによる福音書19:10とテサロニケ人への第二の手紙1:7-10を比べてみてください。

(8)メシヤは「王として、また祭司として世を治め」ます。

「天の軍勢の主は、彼にお話しになる。『おまえは、やがて来る人を表す印だ。その人は「**枝**」と呼ばれ、…神の神殿〔イエスの体（すべての信者）、教会、新しいエルサレム〕を建てる。…彼は王として、また祭司として世を治め〔る〕』」(ゼカリヤ書6:12-13)。

詩篇110:4は、メシヤを「とこしえにメルキゼデクのような祭司である」方と呼びます。メシヤは「王の王、主の主」(テモテへの第一の手紙6:15、ヨハネの黙示録19:16)なのです。エレミヤ書23:5は、メシヤを「正義の若枝…王」と呼びます。祭司はレビの部族の出でなければなりませんでした。メシヤ・イエスはユダの部族の出であり(ヘブライ人への手紙7:14)、二部族(ユダとレビ)両方の出身というわけにはいきません。では、どうして祭司となれるのでしょうか。

この謎は、いかにして解かれたのでしょうか。イエスはユダ部族出身の王です。第二の到来でこの地の王座に着くでしょう。イエスはまた、しばしばイスラエルの人々の罪のためにいけにえを捧げた、アロン司祭のような祭司です(詩篇22:16、イザヤ書の53章、ヘブル人への手紙9:26に見られるとおり、イエスは、あらゆる者たちの過去の罪の犠牲となって、ご自身を一度限りのいけにえとして捧げられたのです)。しかしまた、王でも祭司でもあったメルキゼデク(ヘブライ人への手紙7:1-2)の**ような**祭司**でした**(ヘブライ人への手紙5:6、詩篇110:4)。メシヤが祭司であるという興味深い事実については、ヘブル人への手紙7-9章がすべて説明しています。この謎はイエスにおいて解決するのです。

(9)主に選ばれた聖なるしもべメシヤは、父なる全能の神がもっとも喜ばれる、最も有力な神人である(イザヤ書42:1)にもかかわらず、イスラエルの民に忌み嫌われるのです(イザヤ書49:7)。

来るべきメシヤにおいて「主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る」と、イザヤ書40:5に書かれています。それに続く完全な対照として、メシヤは「さげすまれ、人々からのけ者にされ」、イスラエルの人々が「目を留めるような容姿を持たない」(イザヤ書53:1-3)方として語られています。

この逆説はイエスの生涯によって解き明かされます。父なる神はイエスについて「これは私の愛する息子、私はこれを喜ぶ」(マタイによる福音書17:5)と仰せになりました。その反面、大半の人々がイエスを拒みました。イエスの受けた拒絶を語る預言は、実現するたびに最も大きな悲しみをもたらします。メシヤの受けた拒絶への悲しみは、イエスご自身の言葉によって表されています。

「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、神がこの都のために遣わされた人すべてを石で打ち殺す町よ。私は、めんどりがひなを

翼の下に集めるように、何度、あなたの子らを集めようとしたことでしょう。それなのに、あなたたちはそれを拒んだのです」(マタイによる福音書23:37)。

理由も無く彼を嫌った人々の数は、彼の髪の毛の本数を超えるものでした(詩篇69:4、ヨハネによる福音書15:25)。新約聖書には、「この方はご自分の国に来られたのに、ご自分の民に受け入れられなかった」(ヨハネによる福音書1:11)と書かれています。

(10)「銀貨30枚」とは、メシヤの値段なのでしょうか、それとも陶器師の土地の値段なのでしょうか?

「私は彼らに言った。『あなたたちが良いと思うなら、私に賃金を払いなさい。もし、そうでないなら、やめなさい』。すると彼らは、私の賃金として銀30シェケルを量った。主は私に仰せられた。『彼らによって見積もられた尊い値を、陶器師に投げ与えよ』。そこで、私は銀30枚を取り、それを主の神殿に投げ入れた〔その後、その銀は陶器師に与えられた〕」(ゼカリヤ書11:12-13)。

これは、実に理解しがたい奇妙な言葉です。歴史上で唯一の出来事によって、私たちは、この預言を理解することができます。**この出来事とは、新約聖書に書かれている、その預言の実現です**。つまり、ユダがイエスを裏切り、祭司長に彼を引き渡す契約を結び、「銀貨30枚を彼に支払った」という記録です(マタイによる福音書26:15)。また、自分がどれだけ凶悪な罪を犯したかに気付いたユダは、「銀貨30枚を、祭司長、長老たちに返し〔た〕…〔そして〕、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行き、首を吊った。祭司長たちは銀貨を取り…相談し、その金で陶器師の土地を買〔った〕。…その時、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。『彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの人々に値積もりされた人の値段である。彼らは、…その金を払って、陶器師の土地を買った』」(マタイによる福音書27:3-10)。

ユダだけでなくイスラエルの民の大半が、イエスを売り渡し、悲しいほどに過小評価したのです。彼らは、息絶えた奴隷の価値と同じ銀貨30枚(出エジプト記21:32)のために、イエスを売り渡したのです。この行いにより、ユダヤ人指導者たちは、神の聖なるメシヤに対する憎しみと軽蔑を示したのです。これは、預言における多少不明瞭な点が、その実現によって明らかにされている好例です。

新約聖書における成就と、旧約聖書における預言で、完璧にその金額(銀貨30枚)まで一致していることに注目してください。それが単なる偶然などとは、誰も思わないでしょう。その銀貨が陶器師の土地を買うために使われるという預言までも、そのとおりに成就されました。これは神の采配によるものとしか思えません。その成就において、不明瞭な点がすべて取り除かれ、預言と成就の間に完全な調和が見られます。あまりにも正確に実現したため、預言者を通して話されたその神が、全能の見えざる手をもって、悪人さえも遣われて、すべてを手配されたことは、誰の目にも明らかなはずです。ユダが投げ返したその銀貨で、祭司長が陶器師の土地を買うことにより、彼らは預言を満たしただけでなく、メシヤに対する罪の記録を永久に残し、彼らの国家に対する神の復讐を奮い起こしたのです。

(11)恐ろしい苦難と死が、常に完全に神に従う方(メシヤ)に訪れることになっていました。

「三時ごろ、イエスは大声で『わが神、わが神。これは私の運命でした』と叫ばれた」(マタイによる福音書27:46、アラム語原文聖書)。神は私たちのために、罪を一度も犯したことのないイエスを罪の象徴としました。イエスの犠牲を通じて、それを信ずる者の罪が赦されるのです。そして神は、その者達に、もはや罪を犯さず生きる力を与えられるのです(コリント人への第二の手紙5:21)。

(12)「傷つけられ」そして「打ち抜かれ」、それでも「その骨は一本たりとも折られない」という、来るべきメシヤに関する預言があります。

メシヤは、同士の家で打たれ(ゼカリヤ書13:6)、両手両足を刺し通され(詩篇22:16)、それでも骨は一本たりとも折られないことになっていたのです。詩篇の中で、エホバ(ヘブライ語の神の名)はメシヤについて仰せになりました。「主はその骨をことごとく守り、そのひとつとして砕かれることはない」と(詩篇34:20、出エジプト記12:46)。

キリストを含む３人に対する、はりつけの刑が執行されました。この３人は長々と生死の境をさまよい、安息日前に十字架から死体を降ろせないようでは困ると思ったユダヤ人たちは、ピラトに「彼らの脚を折ってもよい」かと許可を求めました。(脚を折ることにより死を早め、十字架から降ろせるということだったのです)(ヨハネによる福音書19:31)。「兵士たちが来て、イエスと共に十字架につけられた二人の男の脚を折った。しかしイエスのところに来ると、すでに死んでおられるのを認めたので、そ

の脚を折らなかった。しかし、兵士のひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。それを目撃した者が証をしているのである。その証は真実である。…この事が起こったのは『彼の骨はひとつも砕かれない』という預言を成就させるためであった。また聖書の別の預言には、『彼らは、自分たちが突き刺した者を見る』と記されているからである」(ヨハネによる福音書19:32-37)。

これは、神の摂理による驚くべき奇跡です。十字架に打ち付けられた者のうち2人の脚は折られ、3人目(イエス)の脚は折られ**なかった**のです。預言が「彼の骨は、一本も砕かれることがない」と言っているからです(詩篇34:20)。死刑執行人たちは、イエスの両手両足、脇を突き通しましたが、その時も骨は折られず、骨格の間を刃が通り抜けたのです。

(13)「断たれ〔世界の罪のために十字架の上で死なれ〕」(イザヤ書53:8;ダニエル書9:26)、「自分の命を死に明け渡す」(イザヤ書53:12)メシヤは、「高められ、持ち上げられ、非常に高くなる」(イザヤ書52:13)方でもあるのです。そして、「彼の命をとこしえに保ち、…主のみこころを彼によって成し遂げ」(イザヤ書53:10)、神は「私は彼に、偉大な勝利者としての栄誉を与える」(イザヤ書53:12)と仰せになっています。

従って、メシヤの贖いの死と復活の壮麗な事実が、預言されたように実現するのは確かです。しかし、それが実現するまでは明確化しないのです。これは、聖書全体で最も緊迫感のある預言的逆説のひとつです。

新約聖書は、イエスについて「人間の姿で現れ、へりくだり、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はイエスを高く上げ、あらゆる名に勝る名をお与えになりました。こうして、天上の者、地上の者、地下の者すべてが、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです」(ピリピ人への手紙2:8-11)と記しています。

イエスはさげすまれ、人々からのけ者にされました(イザヤ書53:3)が、神はご自分が計画なさった時期に、イエスを「地の王たちよりも高い者」(詩篇89:27)とされるのです。旧約聖書の預言者も読者も、この謎に首をかしげました(ペテロの第一の手紙1:10-11)。しかし、新約聖書のイエス・キリストが、私たちの罪のために死んでくださり、そして3日目に死者の中からよみがえられた時に、すべてが明らかになったのです。

四. メシヤ(イエス)の苦難、死、復活に関する預言

(1)詩篇22章、(2)イザヤ書53章についての考察

(1)詩篇22章

詩篇第22章の奇跡とは…「十字架はりつけの刑」は、ローマとギリシアの慣習であって、ユダヤ人バビロン捕囚となる紀元前600年まで、ユダヤでは知られていませんでした。ユダヤ人は**投石**によって犯罪者を処刑していたのです。それにもかかわらず、はりつけによる死刑など見たことも聞いたこともない者(ダビデ王)によって、イエス・キリストの時代の1,000年前に書かれた詩篇22章に、はりつけの刑による死が生々しく描かれているのです!

この聖詩がメシヤについて語っていることは、敬虔な聖書学者すべてが認識するところです。

詩篇22章は、非常に奇妙な状況で恐ろしい死に方をする特定の人物(メシヤ)を表しています。そこには、こう書かれています。「悪を行う者どもの群れが私を囲み、私の手と足を刺し貫いた。私は自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、私を見る」(16-17節)。はりつけはダビデ王の時代のユダヤ人には知られていなかったにもかかわらず、衣服をはぎ取り(「骨をことごとく数えることができる」)、両手足を刺し通すという描写は、はりつけの刑を意味する以外の何ものでもありません。十字架に打ち付けられた者は、〔釘で〕両手足のみを突き通され、屈辱を与えるために衣服をはぎ取られるのです。**偽のメシヤが、自分を証明するためにこのような預言を選ぶでしょうか**。この聖詩の一字一句に至るまでが実現しました。誕生とみわざの預言句に見られるように、この古代文書も、後に非の打ちどころないほど詳細にわたって実現した、ある出来事の写し絵なのです。

イエスは「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか」と言ったのではありません。

四つの福音書の初代における原文は、様々な言語による翻訳版の原

典であるギリシア語ではなく、アラム語とヘブライ語で書かれていました。イエスとその弟子たちは、ギリシア語ではなくアラム語とヘブライ語を話したからです。十字架の上でキリストが本当に言われた言葉の正しい訳は次のとおりです。「わが神、わが神。これは私の運命でした」。

「さて、十二時から全地が暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で『エリ、エリ、レマナ、サバクタニ！』と叫ばれた。…すると、そこに立っていた人々の一部は『この人はエリヤを呼んでいる』と言った」(マタイによる福音書27:45-47、アラム語原文)。

四つの福音書の翻訳版はすべて、この言葉を原語のまま引用し、本意とは異なった説明を加えています。アラム語は、当時その地域の共通語でした。アラム語のマタイによる福音書は、イエスが実際に説教を行い、それを見聞きした人々の言葉で書かれているため、翻訳や説明の必要はありませんでした。後の翻訳者たちがこの句をギリシア語に訳した時、その真意を理解していなかった可能性が高いことが分かります。これはアラム語が極少数により使われていた言語のため、それを正しく翻訳するために必要な言語知識を新約聖書の翻訳者たちが持っていなかったためと思われます。現在、アラム語はかつてアッシリアと呼ばれた中東の一部の地域で少数の人々に使われており、これはイエスの時代、イスラエルのガレリアで使われていた言葉と同じです。アラム語でこの句は、「わが神、わが神。これは私の運命でした〔私はこのために生まれました〕」という意味なのです。

ダビデ王は、主に関する預言を意図して詩篇22:1を書いたのではなく、多くの敵が存在した時に、自分自身を指して書いたのです。ダビデ王はここで、深く考えずに「神が私をお見捨てになった」と言っているのであって、神の権化としてのイエスが、人の形で十字架にかけられている様相を語ったのではありません。詩篇22章のこの部分は、イエス・キリストの死を預言したものではありませんでした。それに、イエスはこの聖詩を引用したのではありません。もしイエスがヘブライ語で書かれた詩篇22章から引用していたなら、アラム語の代わりにヘブライ語で言われたはずです。それに、もしヘブライ語から訳してアラム語で言ったなら、「私の運命をさだめる」の意であるアラム語の「サバクタニ」ではなく、「私を見捨てる」を意味する「ナシャタニ」を使っていたでしょう。十字架の脇に立っていたローマ兵士たちは、イエスが苦悩と苦難の真っ只中に発した

言葉を理解することができませんでした。彼らは、イエスがエリヤを呼んでいると思ったのです。というのも、「エリヤ(Elijah)」と言う単語はアラム語で「イーリア(Elia)」となり、アラム語で「私の神」を意味する「エリ(Eli)」に似ていたからです。

苦難の時が終わりに近づき、イエスは、死の場面を見に来たラビ、祭司、およびエルサレムの男女の群を見つめました。中にはイエスを侮辱する者もいました。他の者はイエスの顔に唾を吐き、ひどい名で呼んだり、イエスがメシヤ、最初の神人、つまり「三位一体の神がその内に住み、みわざを行われた最初の人間」であるという主張に、異議を唱えたりしました。「犯罪者」「神の意志に背く者」などと非難しました。イエスは十字架上でその身を犠牲にするために、この世に生まれたのです。これにより、神の言葉の真実性が証明され、個人の意志ではなく神の意志に従った人生を送りたいという者たちに救いの道が開かれたのです。十字架による処刑以外に、このような勝利の栄光をもたらす方法は他にありませんでした。

イエスと同じ言葉を話すガリラヤ出身の弟子と女性たちは、イエスが「神に見捨てられた」と言ったなどとは、一瞬も思わなかったでしょう。イエスが弟子たちに「お前たちを含めた世界の皆が私を見捨てるだろうが、三位一体の神は私の内にあられるため、父なる神は常に私と共におられる」と言われた後で「神が私を見捨てた」と言われるはずがありません。イエスはペテロに言われました。「私が父にお願いして、十二の軍隊よりも多くの天使たちを、今すぐ私の配下に置いていただくことができないとでも思うのですか」(マタイによる福音書26:53)。イエスはまた言いました、「わが父よ。どうしても飲まずに済まされぬ杯〔十字架上の死の意〕ならば、みこころのままに従います」(マタイによる福音書26:42)。この「エリ、エリ。レマナ、サバクタニ」という言葉は、今日でもアラム語を母国語とするアッシリアと呼ばれていた地域の人々が、不条理な苦しみや死に直面した時に使う表現です。文句や不平不満を言う代わりに、彼らはすべてを神に任せるのです。彼らは、そのような経験を通り抜けることが、神のお望みであると信じているのです。これが、神を敬う中東の人々が自殺をしない理由です[23]。

23. 聖書:『From the Ancient Eastern Text(古代アラム語原文)』(ジョージ・M・ラムサ英訳、ハーパー・コリンズ刊)、および『Idioms in the Bible Explained and A Key to the Original Gospels(聖書の中で使われている用語の説明と、初代福音書読解の鍵)』(ジョージ・M・ラムサ英訳、ハーパー・コリンズ刊)を参照。

彼らはイエスを嘲笑した

詩篇22章6-8節には、イエスを非難し嘲笑した人々のことが書かれています。「私を見る者は皆、私をあざけります。彼らはイエスをののしり、頭を振ります。『主に彼を任せよ。神が助け出せば良い。神に救い出させよ。彼は神のお気に入りなのだから』」(詩篇22:7-8)。

新約聖書は、人々がいかに十字架の上のイエスを馬鹿にし、嘲笑したかを伝えています(マタイによる福音書27:39-44)。それは、預言で使われている言葉とほとんど同じです。「ユダヤの祭司長たちも同じように、律法学者、長老たちと共にイエスをあざけって言った。『…彼は神を信じている。もし神のお気に入りなら、今すぐ救っていただくが良い』」(マタイによる福音書27:41,43)。

イエスの人間性と喉の渇き、そして民衆の嘲り

預言には、さらに驚くべき詳細な事実が加えられています。「彼らは私に向かって、その口を開きました。…私は、水のように注ぎ出され、私の骨々は皆、関節からはずれました。私の心臓は蝋のようになり、私の内で溶けました。私の力は、土器のかけらのように乾ききり、私の舌は、上あごに貼りついています。あなたは、私を死のちりの上に置かれます」(詩篇22:13-15)。

「彼らは私に向かって、その口を開きました」(詩篇22:13)。メシヤが、公衆の軽蔑にさらされるという預言は、新約聖書の時代の人々が「十字架の傍らに座って、イエスの見張りをした」(マタイによる福音書27:36)時に、その十字架の傍で成就されたのです。容赦なく照り付ける日差しの下で経験した極度な衰弱、発汗、喉の渇きも預言されていました。

「私は、水のように注ぎ出され、…私の力は、土器のかけらのように乾ききり、私の舌は、上あごに貼りついています」(詩篇22:14-15)。

新約聖書の短い一文に、イエスの人間性と喉の渇きが表されています。「この後、すべてが完了したのを知っていたイエスは、預言が成就するために『私は渇く』と言われた」(ヨハネによる福音書19:28)。

イエスは実際に心臓が破裂して死なれた

両手両足に刺された釘の力だけで吊されている体の重みで、骨が関

節からはずれ、激しい痛みを味わったメシヤの悲惨な苦しみを考えるだけで、私たちの心は悲しみに埋もれます。「私の骨々は皆、関節からはずれました」(詩篇22:14)。これに加えて、精神的・霊的拷問があまりにもひどかったため、イエスの心臓は文字通り引き裂かれたのです。「私の心臓は、蝋のように私の内で溶けました」(詩篇22:14)。死によって、イエスは苦しみから解放されました。「あなたは私を、死のちりの上に置かれます」(詩篇22:15)。

イエスが心臓破裂で亡くなったという証拠は、新約聖書に記録されています。ローマ兵士が「イエスの脇腹を槍で突き刺した」(ヨハネによる福音書19:34)時、「ただちに血と水が出て来た」のです。これは恐らく、イエスが味わっていた過度の感情的苦痛から、(槍が脇腹を突き通す前に)心臓が破裂したことを指摘しています。明らかに、リンパ液が赤い血から分離し、「血と水」をつくりだしたのです。「リンパ」という言葉は、ラテン語で「水」という意味の「lympha」から来ています(ヨハネの第一の手紙5:6も参照)。

イエスの上着の取り分け、詩篇22:18

「彼らは私の上着を分け、その下の衣服を取ろうとしてくじを引いた」。

絶妙なる細目に渡って劇的に実現したこの預言は、全預言の中でも至宝ということができます。一見取るに足らず、一体どうしてこんな事が聖書に記録されているのかと疑問に思うかもしれませんが、これは1,000年以内に確実に実現すると、神は預言者に告げられました。この部分は、神が自ら預言を作成し、それを実現したことを私たちに知らせるために聖書に含まれていたのです。

新約聖書でイエスのはりつけを語る中、ローマ兵が「彼の手と足を刺し貫いた」という場面で、メシヤの衣服を分け合うという一見「些細な」事柄が補足のように、しかし詳しく述べられています。ローマ兵たちは神や預言について無知であり、彼らの行いが持つ神聖なる意味合いにも気付かずに、神の預言を一字一句成就していたのです!

「さて、兵士たちは、イエスを十字架にはりつけると、イエスの上着を取り、ひとりの兵士にひとつずつあたるよう四分した。その下の衣服も取ったが、それは上から全部ひとつに織った、縫い目なしのものであった。そこで彼らは互いに言った。『それは裂かないで、誰の物になるか、くじを引こう』。それは『彼らは私の上着を分け合い、その下の衣服を取ろ

うとしてくじを引いた』という預言が成就するためであった」(ヨハネによる福音書19:23-24)。

こうして、1,000年間旧約聖書に秘められていた預言は、一度ですべて明かされ、生きる奇跡として現実となり、**神が**旧約聖書で**宣言され**、新約聖書で**実現された**ということを、再度証明することになったのです。新約聖書、旧約聖書が神の霊感によることを確かに実証するこの預言1つで「旧約聖書のメシヤに関する預言が、新約聖書のイエスによって実現された」ことが、最も懐疑的な人間にも納得できるはずです。

メシヤの復活

あまりにも残酷な方法で殺されるメシヤは、助けられ(詩篇22:19)、救い出され(詩篇22:20)、獅子の口から救われるでしょう(詩篇22:21)。その祈りは聞き届けられるでしょう。「あなたは私に答えてくださいます」(詩篇22:21)。ここで引用した第21節は項の終りです。第22節から新しい項が始まります。そして今、輝かしく救い出され、生き返られたメシヤは言われます。

「私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、公衆の中で、あなたを賛美しましょう」(詩篇22:22)。

もちろん、新約聖書には死の3日後に神がイエスをよみがえらせたという証言が豊富に含まれています。

「あなたたちは、神の定めた計画と、神の予知によって引き渡されたこの方〔メシヤ〕を、邪悪な者の手によって十字架の上で殺しました。しかし**神は**、この方を死の苦しみから解き放ち、**よみがえらせました**。この方が死につながれていることなど、ありえないからです」(使徒行伝2:23-24)。

まとめ

詩篇22章のイエスに関する預言はあまりにも数多く、細部に渡っています。すべてを完全に見通され、ご自分の意思に応じてあらゆることを可能とされる神以外、この詩篇の著者に霊感を与えることなど不可能なことは明らかです。主の死に伴う最も些細な出来事が、最も重要な題材と同等の正確さで述べられています。はりつけの刑がユダヤではなくローマの処刑方法であった時代に、メシヤが十字架にかけられることは、何にも増してありえない話だと思いませんか。ダビデ王はこの聖詩におい

て、ローマ帝国が築かれる何世紀も前、この預言が成就する10世紀も前に、このことを預言したのです！

(2)イザヤ書53章

メシヤの苦難と昇天に関するこの**並々ならぬ預言**は、イエス・キリストの時代の700年前に書かれました。それは預言というよりも、イエスの苦難とそれに続く栄光を述べる福音書の、歴史的概説であるかのように書かれています。ある注釈者は言います。「〔この預言は、〕あたかもゴルゴタの十字架の下で書かれたように読み取られます。この旧約聖書に書きとめられている預言は、最も奥が深く、最も卓越した功績です」。

イザヤ書53章には、一見矛盾していると思われる預言が非常に多く見られます。現に、この章は新約聖書のイエスという人物（そしてその行い）においてのみ解決できる預言的謎を、読者に投げかけることを**目的としている**のです。メシヤ・イエスは乾いた地面から出る根株のような存在であるにもかかわらず、実りに富んでいます。イエスは特に容姿が美しいわけでもありませんが、神に選ばれたしもべなのです。人は彼をさげすみ、拒みます。にもかかわらず、彼は神に召された救世主なのです。死に至るまで苦しみながら、それでも生き続けます。血のつながった子孫はいないものの、イエスにより救われ、神の子となった者たちの数は、海の砂の粒のように数え切れません。人は彼を邪悪な者たちと共に埋葬するよう望みましたが、彼は豊かな者たちと共に埋葬されました。イエスは信じられない虐待に苦しみます。にもかかわらず、恵まれて幸せに満ちています。打ち負かされても、勝利を手にします。イエスは死刑の判決を受けながらも、地獄へ堕ち行く罪びとを救います。これらの一見逆説的な預言は、神の息子イエスが十字架に架けられ、復活し、この世の王として昇天するまで解けない疑問として残っていました。

この預言は「**見よ。私のしもべ**」という言葉で始まります。この見出し句を当節全般（イザヤ書52:13-53:12）の主題とし、エホバのしもべであるメシヤが苦難を受ける様子を詳細に描写しています。

苦難を受けるメシヤ…「エホバのしもべ」

まず問われるべき質問は次のとおりです。「預言者は、誰について述べているのですか。…自分についてですか。それとも、誰か他の者につ

いてですか」(使徒行伝8:34)。唯一の正解は、この預言はある一個人、**メシヤ**について述べており、世界史上ただ一人、新約聖書に記されているイエスのみが該当する、というものです[24]。

本章の内容を深く考え、それから、4つの福音書でイエスに関して何が言われているかを読み、これらの最も完全な一致を見てください。実際に十字架の下に立って見ているように、イエスの磔刑が、はっきりと見えてくるはずです。あらゆる歴史を振り返ってみただけでも、ナザレから来たイエスによって、彼のみによって、完全にこの預言が満たされたことに気付くはずです。

ここで、この章に記されているメシヤの拒絶、苦難、死、復活、および昇天を描写している、いくつかの驚異的な預言の細部に注目してください。次のような驚異的な現象に、繰り返し注目することになると思います。ナザレのイエスがこの預言の700年後に来られ、十字架の上で亡くなられた時に、**文字通り、そして数学的に見ても驚くほどの精密さで、これらの預言が成就されたのです**。

(1)メシヤの驚異的な高揚

「見よ。私のしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる」(イザヤ書52:13)。

この節(イザヤ書52:13-53:12)においてメシヤの受ける屈辱の奥深さが記述される前、冒頭において、すでにメシヤの最終的な**勝利**と**栄光**を確信させられます。「高められ、上げられ、非常に高くなる」という言葉の発展的な本質に注目してみましょう。

---

24. イエスがメシヤだと信じない人の中には、本章が「苦難のメシヤ」ではなく「苦難のイスラエル」(国家)についての言及だと解釈する人もいます。しかし、以下に挙げる五つの事実は、イザヤ書53章の主題がユダヤ人ではなく**メシヤ**であることを証明しています。

(1)この預言は、初めから終わりまで、ある一**個人**について話しています。この章の全般にわたり「**彼**は…育った」(イザヤ書53:2)、「**彼**はさげすまれ、…悲しみの**人**」(イザヤ書53:3)、「彼は…刺し通され」(イザヤ書53:5)と記されています。

(2)第8節は確定的です。「苦しむメシヤ」は、「私の人々」(イスラエル)の罪のために打ちのめされており、「彼」とは、**身代わりとなって**苦しみを受ける一個人のことなのです。従って、「彼」が「その人々」であることは不可能です。

(3)彼は、**罪無く**「苦しむ人」(イザヤ書53:7、9)です。国家イスラエルは罪無く「苦しむ人」とは言えません。

(4)彼は、自ら「自分の命を死に明け渡し」(イザヤ書53:12)、**自由意思によって**「苦しむ人」です。もう一度言いますが、ここには、一国家ではなく一個人の死が描かれているのです。国家としてのイスラエルは、自由意志により自ら進んで苦しんだことも、身代わりとなって苦しんだこともありません。

(5)彼は「口を開かず」(イザヤ書53:7)、**無抵抗に**「苦しむ人」です。国家イスラエルについて、同じことは言えません。これらの言葉は、真実に心を開いている人々にとっては、これ以上意味合いを明らかにすることができないほど明確なものでしょう。イザヤ書53章は、罪無く、抵抗せず、神の人々イスラエルのために、進んで身代わりとなって苦しむ一**個人**について述べているのです。

これらの言葉から、一連の考えが浮かびます。彼は高く上がり、ご自分をさらに高く上げられ、高きところに立たれるでしょう。これは実に、ナザレのイエスの死後に関する預言が満たされる主要三段階と関連しているのです。すなわち、**復活、昇天、神の片腕として高められた地位**に着く、という三つの過程のことです。

次に、彼の受ける屈辱を読んだ時の衝撃を和らげるかのように書かれた、最後にたどり着く永遠の地位に関する記述に、私たちは直ちに出合います。神のしもべ〔メシヤ〕が、苦難の後、一段ずつ高められて行くのが見られます。そして最終的に、何よりも高くそびえる、果てしない高さに達します。

イエスの苦難と死の後に起こる、最高に高められた地位への昇揚が、新約聖書には非常に明白に示されています。

イエスは「神様の栄光を受けて、まばゆいばかりに輝いています。また、その人格と行動すべてによって神であることを示し、力ある言葉によって宇宙を制御しておられます。そればかりか、私たちの罪をすべて清めるために、〔十字架の上で〕死」に、**神の力として高められた地位**に着かれました(ヘブル人への手紙1:3)。

「イエス・キリストは、神であったため、神と等しくあることを誤りとは思わず、…おのれを低くして、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順であられました。**それゆえ、神はイエスを高く上げ、**すべてに勝る名をお与えになりました」(ピリピ人への手紙2:5-9。また、マタイ伝28:6と使徒行伝1:3、9とエペソ人への手紙1:20-23参照)

(2)メシヤの受けた痛烈な虐待

「多くの者があなたを見て驚いたように、…その顔立ちは、誰よりも損なわれ、その姿も、他の誰よりも傷めつけられていた」(イザヤ書52:14)。

メシヤの高揚(イザヤ書52:13)がめざましく「高い」がゆえに、その苦難にはさらに衝撃を覚えます。主イエスは、十字架にはりつけられる前にも過酷な虐待を受けました。主は残酷に打ちのめされ、鞭打たれ、その他にもさまざまな虐待を受けられたのです。そして十字架の上では、耐え難い精神の苦悩と心の痛みに加え、茨の冠、震える身体に打ち刺された釘、はりつけの苦しみにより、すべての神経と筋肉が「拷問の炎」となったのです。その苦しみがあまりにもひどかったために、容貌は驚くほど変形し、もはや人間とは思えない姿になってしまったのです。このように恐ろしい話はほとんど信じ難いながら、旧約聖書には、それが実際に

起こると明らかに記されています。新約聖書にも同じく、イエス・キリストの苦難と死に関する記録として明記されています。

「そこで、ピラトはイエスを捕えて、鞭打った[25]。兵士たちは茨で冠を編み、イエスの頭にかぶせた」(ヨハネによる福音書19:1-2)[26]。

「そして、彼らはイエスの顔に唾をかけ、こぶしでなぐりつけ、他の者たちはイエスを平手で打って」(マタイによる福音書26:67)、「イエスの着物をはぎ取り、緋色の上着を着せたのです。そして茨の冠を編み、彼の頭にかぶせ、からかった挙句、葦を取り上げてイエスの頭を叩いたのです」(マタイによる福音書27:28-30)。

預言に表示された描写を実現するためだけでなく、私たちの代わりとして苦みを受けられるために、イエスがこの恐ろしい苦難に耐えてくださることを、神はお許しになったのです。このような苦難と死を自らに許す者が、**真のメシヤ以外に**いるはずがないと思われるのではないでしょうか。

十字架にかかる前、イエスの**顔立ち**は損なわれ、十字架にかかった時には、全身の姿かたちが損なわれたのです。こうして、預言が全くその通りに実現しました。血の汗、茨の冠の跡による傷跡、顔に吐かれた唾、そして頭部の強打によって、イエスの顔立ちは損なわれていました。鞭打ちの刑を受け、こぶしで殴りつけられ、両手両足に釘を打たれ、はりつけになった体の重みで骨の関節がはずれ、挙句の果てに槍で脇を刺され、その結果として、体全体も変形してしまったのです。これに究極の精神の苦悩と心の痛みが加わった結果として、その容貌はもはや人間とは思えないほど損なわれてしまったのです。イエスがどれほど私たちを愛してくださっているか、どれほどの代償を私たちの贖罪に支払ってくださったかがお分かりになるでしょう!

救世主の受けた実にひどい苦難の実感を、謙遜の心を持ってよく考え、こうした苦難のすべての原因である罪に対して恥と後悔の念を痛感し、心から主に献身しましょう。そして、私たちのためにこれらの苦難をすべて受けてくださった主に対する、より深い愛情と不朽の感謝の気持ちが、私たちの内に芽生えますように。

---

25. 鞭打ちの刑自体が、暴力的、非人間的なものでありました。鞭は多くの場合取っ手に固定された皮ひもで作られていました。時には、皮ひもの先端に鋭利な金属または岩の小片が固定され、犠牲者の肉を切り裂き、かきむしり、その結果として背中の肉が裂け、血まみれになったのです。

26. 私たちは中東を訪れた時に、長さ2〜3インチもある棘をもった茨を見ました。乾燥すると、非常に固くとがり、針のように鋭くなるのです。あのような茨で作られた「冠」を額に押し付けられたら、何箇所も皮膚が裂け、痛いだけでなく血まみれになって、その血で髪の毛が固まってかき乱され、恐ろしい容貌になったはずです。

(3)多くの国々を清め驚かす言葉

「そのように、彼は多くの国々を清める〔私たちすべてのため、彼が十字架の上で流した尊い血により、多くの国の人々の罪を洗い清める〕。王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らは、それまで告げられていなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ」(イザヤ書52:15)。

神は、注目を集め、魂を勝ち取り、人の献身を勝ち取る独自の方法を考案されました。神の息子の姿となった神ご自身が、息子としてあまりに残酷な苦しみを受けられ、はりつけの刑があまりにもぞっとするような場面だったため、**古今を通じてあらゆる人が恐ろしい気持ちになるのです**。はりつけの場面は最も鈍感な者をも驚かせ、最も冷淡な者の心をも切り裂き、最も無気力な者をも奮起させます。今、私たちは神の愛と知恵を理解することができます。なぜなら、神が**十字架の上**でその愛と知恵を表してくださったからです。神の息子イエスを信じ、イエスが身代わりとして犠牲となったことを認める罪人を神はお赦しになるということを、今、私たちは理解するのです。神はまた、神の戒律に従う力を与えます。それにより、さらに罪を重ねることはなくなるのです。神の聖なる精神は、信じる者たちの内に住まい、この力を与えるのです。神は私たちのために、罪を一度も犯したことのないイエスをすべての罪の象徴とし、そのイエスの犠牲によってイエスを信じる者たちの罪が赦されるのです(コリント人への第二の手紙5:21)。福音は多くの者を**驚かせ**、信仰へと導くことでしょう。

(4)イスラエルが信じない言葉

「私たちの聞いたことを、誰が信じたか。主の御腕〔イエス〕は、誰に現わされたのか」(イザヤ書53:1)。

苦難を受けるメシヤに関する衝撃的な言葉は、多くの国々を驚かせますが、妙なことに**メシヤご自身の民であるユダヤ人たちの中では信じる者がほとんどおらず、非ユダヤ人の中にも、本当に少数しか存在しないと考えられます**。「命に至る門は小さく、その道は狭く、そこに至る者はわずかです」(マタイによる福音書7:14)。

新約聖書を読むと、この預言どおりになっていることがわかります。「イエスが目の前で、このように多くの奇跡を行なわれたのに、彼らはイエスを信じなかった。それは『主よ。私たちの聞いたことを、誰が信じたか。主の御腕〔イエス〕は、誰に現わされたのか』と言った預言者イザヤの言葉が成就するためであった」(ヨハネによる福音書12:37-38)。

(5)メシヤの超自然的誕生と主の御前における成長

「彼は主の前に若枝のように芽生え、乾いた地面から出る根のように育った」(イザヤ書53:2)。

「乾いた地面から出る根のように」という句は、メシヤの超自然的な誕生をほのめかしています。乾燥した地面から根が出て育てば奇跡です。必須元素の1つ(水分)が欠けているからです。メシヤの誕生は奇跡、すなわち処女から生まれるという奇跡だったのです。

この逆説にも注目してください。メシヤの成長は超自然的でありながら、自然の過程も経ているのです。(他の子供たちと変わらず普通に)「**彼は育った**」けれども、それと同時に「**主の前で**」育たれたのです。つまりメシヤは、エホバの**目の前で**、行き届いた保護のもとに成長するのです。ここでもまた、メシヤは「乾いた地面から出る…若枝」であるため、自然環境に全く依存する必要がないと述べられています。すなわち、メシヤは天の父なる神の行き届いた保護のもとに成長し、青年期には尊く健全な枝になるとされているにもかかわらず、主に対する知識が欠如する、罪、不信仰があふれる世界で成長するよう定められていたのです。しかし「育つ」という言葉から、通常の成長過程を経るのだということが分かります。メシヤは、最初から大胆さと成功を手に、突然の栄光を輝かせて、一瞬にして世に突び込んでくるというわけではありません。神により創造された自然の法則に従って、ゆっくりと成長していくのです。

メシヤがどのようにこの地に来られるかだけではなく、普通の子供として育ちながら、さらに主の御前における成長を遂げると神が預言されたのは、すばらしいことだと思いませんか。そして、メシヤが来られた時、すべてがまさに預言のとおりになったのです。メシヤは、力強い大人の王として、大胆かつ輝かしく登場したのでは**ありません**。このような登場の仕方は、**第二の**到来のために保留されているのです。新約聖書には、子供時代のイエスについて書かれています。「幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった。神の恵みがその上にあった」(ルカによる福音書2:40)。

(6)メシヤの世代は、その偉大さを理解することも、感謝することもできないでしょう

「彼には、私たちが見とれるような美しい姿も輝きもなく、その外見が目を引くこともない」(イザヤ書53:2)。

偉大な王と政治改革者を求めていたユダヤの人々は、メシヤが来た時に失望しました。人々はその美しさ(神聖さを秘めた美)を見抜くこと

も、その使命を理解することもできませんでした。メシヤは世俗の理想に従わなかったのです。彼らは預言を誤解していたために、メシヤが本当に現れた時、魅了されることも引きつけられることも全くなかったのです。ご自分の魂を「罪への供え物」として捧げるという、第一の到来における目的は、彼らの考えていたメシヤのあるべき姿とは全く異なったものだったのです。それ故に…、

(7)彼は人にさげすまれ、のけ者にされた

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされた悲しみの人で、心の痛みを知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった」(イザヤ書53:3)。

実際、「人々からのけ者にされた」ことは、地位の高い人々からのけ者にされたことを意味しています。つまりメシヤには、権力・影響力によって支援を受けられるような、身分の高い「重要」人物や名士など、一人もいないだろうと言っているのです。

イエス・キリストの生涯は、まさにそのとおりでした。次に挙げる新約聖書の記録が、この事実を表しています。

パリサイ人たち(ユダヤ教の当時の一派)は(ある追従者たちに向かって)言いました、「お前たちも惑わされているのか。ユダヤの指導者やパリサイ人のうち、イエスを信じた者が存在したか」(ヨハネによる福音書7:47-48)。

最初から終りをご存知である無限なる神以外の誰が、あえて、国の指導者たちの支援が**全くない**メシヤを、イスラエルに遣わすという預言を思いつかれるでしょうか。**しかし、この預言の真実性は歴史によって実証されました。**

(8)メシヤは悲しみの人として、神に打たれ、苦しめられた方として知られるであろう

「悲しみの人で、心の痛みを知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれた。…私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと」(イザヤ書53:3-4)。

この預言においても、その成就においても主張されている点は、あらゆる観点において、メシヤが心の痛みに満ちた方であろうということです。

イエスも悲しみを味わいました。人々の罪と不信仰のために、イエスは心の痛みを味わい、さらに人々から救世主として拒絶されたために、悲しみを味わいました。そして、身分や地位の高い者たちから見捨てら

れた(「顔をそむけ〔た〕」)時、その悲しみはさらに増大しました。イエスを尊い方と見なす代わりに、彼らは「彼を尊ばなかった」のです。「世はこの方を知らなかった。この方はご自分の国に来られたのに、ご自分の民に受け入れられなかった」(ヨハネによる福音書1:11)のです。

最悪なことに、人々はメシヤを「神に打たれ」たものだと思ったのです。メシヤが、彼らを自由の身にするために苦しみ、苦しんだ者たちの身代わりとなって救うために、自ら「呪われた者となる」ことを許されたということが分からなかったのです。「イエスは、私たちのために呪われた者となって、私たちを律法の呪いから救い出してくださいました。なぜなら、『木にかけられる者はすべて呪われた者である』と書いてあるからです」(ガラテヤ人への手紙3:13、申命記21:23)。

(9)身代わりとなったメシヤの苦難

「誠に、彼は**私たちの**病を負い、**私たちの**痛みを担った(イザヤ書53:4)。…彼は、**私たちの**背きの罪のために刺し通され、**私たちの**咎のために裁かれた。**彼への**懲らしめが**私たちに**平安をもたらし、**彼の**打ち傷によって、私たちは癒された(イザヤ書53:5)。…主は、私たちのすべての咎を**彼に**負わせた(イザヤ書53:6)。…彼が私の民の背きの罪のために打たれ(イザヤ書53:8)、…彼が、自分の命を罪過のためのいけにえとする」(イザヤ書53:10)。「**彼らの**咎を彼が担う(イザヤ書53:11)…彼は多くの人の罪を負」う(イザヤ書53:12)[27]。

本章で主張される真実は、**メシヤが人類の贖罪のために苦難を受け、死を迎えられた**ということです。この驚くべき章には、わずか12の節しかありません。その中に、メシヤが全人類の贖罪のためにいけにえとなったという教えが14回も説かれています。この概念は、この部分全体(イザヤ書52:13-53:12)にあふれており、主イエスが「私たちの代わりに罪の象徴とされ」(コリント人への第二の手紙5:21)そして「私たちの罪のために死なれた」(コリント人への第一の手紙15:3)まで、完全に理解されなかったのです。

エホバは「私たちのすべての咎を彼に負わせた」のです(イザヤ書53:6)。罪を犯した人に対する神の審判は死であり、救世主イエスは、私たちのためにその刑を担ったのです。イエスを身代わりとした償いによる神の恩恵とは、何とありがたいものなのでしょう!十字架の死は、イエ

27. メシヤが(この贖罪を受け入れ、神の言葉すべてに従う)全人類の贖罪のためにいけにえになるという神の教えは、この章において何度も違う形で述べられたので、どんなに巧妙で学識の豊かな者でも否定することはできません。

スの地位を落としめるものでありながら、彼の最も高みにある栄光を表し、人々を救うための方法ともなったのです。

主イエスが来られ、十字架の上で贖いの死を味わうことによって、メシヤの預言が成就したのです。「そして自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました」(ペテロの第一の手紙2:24)。

(10)メシヤは、不平を言わずに自ら進んで苦しまれる

「彼は痛めつけられた。彼は抑圧されたが、口を開かなかった。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、口を開かなかった」(イザヤ書53:7)。

被害者は、特に不条理に扱われた時は、文句や不平を言って苦痛を訴えるものです。しかし苦難を受けるメシヤは、そうではありませんでした。「私たちの罪を負う」という役目を果たすため、自らを差し出し、ほふり場に引かれて行く小羊のように、死への道を歩まれたのです。崇高なる沈黙の中で、死を迎えるまで究極の苦しみに耐えられたのです。なぜなら、それがエホバの意であるからです。ここで私たちは、無限の愛の持つ底知れぬ神秘を目にします。

新約聖書を読むと、イエスが打たれ、不当に非難され、嘲笑され、ひどい扱いを受け、迫害され、唾を吐かれ、虐待され、鞭打ちの刑を受け、十字架にはり付けられた時、死刑執行人に対する燃えるような憤慨や仕返しの気持ちは全くうかがわれず、大声で文句を言う様子もありません。ただ、その祈りが鳴り響いているだけです。

多くの者がイエスについて偽証した後で、司祭長は言いました。「『何も答えないのですか』…しかし、イエスは黙っておられた」(マタイによる福音書26:59-63)。

ここに、はりつけの激しい苦痛を受ける最中のイエスの祈りがあります。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカによる福音書23:34)。

このすべてがあまりにも他と異なっており、あまりにもこの世の現象(自然界及び全人類の経験)に反しているので、この奇妙な預言と、さらに奇妙な成就の両方に衝撃を受けずにはいられません。

(11)不正な投獄と裁判が行われる時、メシヤには、彼の立場を代弁し、無罪を訴える者が存在しない

「彼は投獄され、裁かれ、彼を弁護する者はいなかった」(イザヤ書53:8)。

当時のサンヒドリン（ユダヤ最高法院）における「死刑判決」には、被告に有利なことを知っている者が前に出て、何でも申し出るために呼び出されるしきたりになっていました。しかしナザレのイエスの裁判において、このしきたりは適用されませんでした。非道にも、自らの条令に背き、正義と公平さのあらゆる規準に反するサンヒドリンにより、手短で簡単な訴訟手続きが行われたのです。

イエスは、弁護する者もなく独りきりで2度の裁きを受けました。最初は堕落したユダヤ人有力者たちの前、次はエルサレムのローマ帝国法廷において、**イエスの肩を持つ者は一人もいませんでした**。ユダは師を裏切りました。ペテロはイエスを知らないと誓いました。そして他の弟子たちは「イエスを見捨て、逃げてしまった」(マタイによる福音書26:56)のです。仕えてきた女性の多くは、イエスが十字架に打ち付けられた時に「遠くから眺めてい」ました(マタイによる福音書27:55)。イエスが最も友を必要としている時に、**味方をする者は一人もいなかったのです**。耐えようのない苦難の時が、打ちひしがれた身体を麻痺させた後で、母マリア、数人の忠実な女性、最愛の弟子ヨハネは確かに十字架の「そばに…立って」いました〔ヨハネによる福音書19:25〕。しかし裁判の間と、はりつけの刑が始まってからの数時間は、独り、完全に孤独だったのです。全世界の歴史を通じ、ここまで完全に、友にも愛する者たちにも身捨てられた事例は他にありません。

しかもイエスは、正式な役人ではなく暴徒、大衆によって逮捕されたのです。「剣や棒を手にした大勢の群衆も一緒だった。群衆は皆、祭司長と長老たちから差し向けられていた」(マタイによる福音書26:47)。イエスでさえも、彼らの行いの道理の無さに一言加えました。「まるで強盗を相手にするように、剣や棒を持って私を捕えに来たのですか。私が毎日、シナゴーグ（ユダヤ教会）で座って教えていた時、、あなたたちは、私を捕えませんでした。しかし、こうなったのはすべて、預言者たちの書が実現するためです」(マタイによる福音書26:55-56)。

偽の証人たちは、「イエスを死刑にするため(マタイによる福音書26:59)」イエスにとって不利な証言をするために出席していました。しかも、違法であったにもかかわらず、イエスの裁判は夜中に行われたのです。

ピラトはローマの法廷で、イエスを有罪にする原因を無駄に捜し求め、人々に「彼はどのような悪事を行ったのか」と尋ねました。唯一返ってきた答えは、指導者たちに煽りたてられた暴徒の「十字架につけろ。…十字架

につけろ」という叫びだけでした(マタイによる福音書27:22-23)。その時、群集には理性と正義の言葉など役に立たず、「混乱」がひどくなるだけだと悟ったピラトは、弱気になってこの事態から手を洗い〔責任を逃れて〕、イエスを十字架につけるため、民衆に引き渡したのです(マタイによる福音書27:22-26)。これは、正義に対する世界史上最大の過ちでした。

しかし、イエスの無罪はピラトのみならず(「私はこの人には非を認めません〔ヨハネによる福音書19:6〕」)、メシヤの古代預言者たちによっても証言されているのです。「彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかった」(イザヤ書53:9)。

(12)死の訪れと共にメシヤの屈辱は終わりを告げ、人はその埋葬が「悪者たちと共に行われる」ように計画するものの、神の摂理によって「富む者と共に葬られ」るよう手配された

「彼の墓は悪者たちと共に設けられ、彼は富む者と共に葬られた」(イザヤ書53:9)。

犯罪者として死んだ者は通常、トペテ(エルサレムの西)に燃え立つ火の中でごみのように焼かれる前に、壁に沿って投げ捨てられることになっていました。しかし、身代わりの苦難が終わりを遂げた今、イエスの身体にそれ以上の侮辱を加えることは神が許されませんでした。ユダヤの支配者たちが、共に処刑された2人の泥棒と同じ不名誉な埋葬を行うことが可能であったにもかかわらず、ローマの政府はイエスの身体を「富む者」であるアリマタヤ人のヨセフに渡し、ヨセフは自分の庭に建てた個人の墓にイエスを埋葬したのです(マタイによる福音書27:57-60)。これは、まさに驚くべきことです。福音書史の内容と預言の言葉が一致していることに、たちまち目をみはらされます。前者と後者を一致させるなどということは、疑いの余地無く、人間の行い得るものではなく、**預言とその成就の両方を成し遂げた神のみわざ以外の何ものでもありません**。

「彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかった」と書かれているように、イエスは神から遣わされ、この苦難を受けました。彼を憎む者によって計画されていた方法とは全く違った、名誉ある埋葬には、この方の完全な**潔白**をさらに重ねて強調するという目的が隠されています。

この完璧な成就を再確認するために、新約聖書にあるイエスの埋葬の話をもう一度、注意深く読んでみてください。

「夕方になって、ヨセフというアリマタヤの金持ちが来た。彼もイエスの

弟子になっていた。この人はピラトのところに行って、イエスの身体の引き渡しを願った。ピラトは、渡すように命じた。ヨセフはイエスを取り降ろし、清潔な亞麻布に包み、岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。墓の入口には大きな石を転がして帰った」(マタイによる福音書27:57-60)。

(13)メシヤが罪のためにいけにえとなった後、神はイエスを復活させ、「彼の命をとこしえに保たれ」、イエスはご自分の子孫を見ることができる。これは、イエスの犠牲によって救われた人々を意味する

「もし彼が、自分の命を罪過のためのいけにえとするなら、彼の命はとこしえに保たれ、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる」(**イザヤ書53:10**)。

罪過のためのいけにえとしてメシヤがご自分を捧げた後、神はメシヤを復活させ「彼の命はとこしえに保たれ」、彼の「**子孫**(イエスの犠牲によって救われた人々)を見る」ことになっているのです。

この逆説の成就は、既に指摘したように「聖書の預言が示すとおりに、私たちの罪のために死なれ…また、聖書の預言に従って3日目によみがえられた」(コリント人への第一の手紙15:3-4)メシヤ・イエスの死と復活にあるのです。

このメシヤ復活の真実は、旧約聖書の聖詩16:10などと一致します。「誠に、あなたは、私のたましいを地獄に捨ておかず、あなたの聖徒メシヤのお身体を朽ち果てさせません」。

さらに、神の意はメシヤの手で栄えるのです。…メシヤは、熱意を持って神の意志を成し遂げ、救いと正義をイスラエルの内外へ確実にもたらすでしょう(イザヤ書42:4)。

新約聖書は、イエスの栄えある復活を私たちに伝えるだけでなく、復活後の(弟子たちを通して行われた)新たな務めの始まりについても述べています。この務めにより、多くの人々が救いを受けたのです。

使徒行伝2:41—「三千人〔の魂〕」が救われ、教会に加えられました。使徒行伝4:4—「御言葉を聞いた人々が大勢信じ、男の数が五千人ほどになった」。

過去20世紀にわたる教会史を通して、何百万人もがイエスを信じ、救いを受けました。イエスは実に、**子孫**を見ることができ、神の意はイエスの手で栄えています。イエスの物語は、勝利を収めた王として第二の到来を果たすまで、完結することはないでしょう。そして、その時「この地は、

海が水で満たされるように、主についての知識で包まれることだろう」(イザヤ書11:9)。まさに、私たちの救いの長は「多くの人々の魂を栄光に導」かれるでしょう(ヘブル人への手紙2:10)。

(14)神はメシヤのいけにえに「満足」されるだけでなく、メシヤを知ることにより、多くの者が罪を赦され、神の御言葉に従う力を授けられる

「神は、メシヤが自らの命を犠牲にするのを見て満足する。『私の正しいしもべを知ることにより、多くの人が罪を赦され、私に従う力を授けられるだろう』。それは、メシヤが彼らの罪を担うためである」(イザヤ書53:11)。

ここで私たちは、使徒ポールによって新約聖書で完全に説明された、すばらしい真実を予知されるのです。イエスを信じ、その犠牲を受け入れることにより、私たちの罪は赦され、神の御言葉に従う力が与えられるのです。この真実は、新約聖書の核たるものです。

「すなわち、神はイエスを信じる者の罪を赦し、神の御言葉に従う力を授けます。…イエスが彼らの罪を償うために、十字架に架けられ、犠牲になったことを受け入れることにより、彼らの罪は赦されるのです」(ロ―マ人への手紙3:22、24)。

「あなたたちは、神の慈悲ゆえに、信仰によって救われたのです」(エペソ人への手紙2:8-9、ロ―マ人への手紙4:5-6、5:15-19、テトス3:5)。

信仰者に授けられた恩恵が**すべて**メシヤのいけにえに基づいているのだということを忘れないよう、「彼らの罪を彼が担う」ということを何度も思い出させられます。こうした言葉は、メシヤと罪人の間で、互いに交換が行われることを示しています。彼らはメシヤに罪を与え、メシヤは彼らに、神の御言葉に従う力を与えるのです。これにより、人々は罪を重ねないようになります。

これはもちろん、新約聖書と一致します。「神は私たちのために、罪を一度も犯したことのないイエスを罪そのものの象徴とし、それにより、イエスの犠牲を通じて、私たちの罪が赦されたのです」(コリント人への第二の手紙5:21)。

(15)メシヤの死に関する異様なありさまが記されている

「彼が…犯罪者たちと共に数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、罪人たちのために贖罪をする」(イザヤ書53:12)。

詩篇22章に書かれているメシヤの着物の取り扱われ方に似て、ここにも、**詳細**な説明を伴う付随的な出来事を示し、その預言が正真正銘であることを証明している部分があります。この預言のこれらの詳細が完全

に実現した場合、直ちに神からのものだということが証明されます。メシヤ・イエスは、父なる神が計画したことを、すべて受け入れる意志を見せました。そのために、犯罪者として扱われること、すなわち犯罪者の一人として扱われることを自らに許したのです。

イエスご自身がはりつけの寸前に聖書(イザヤ書53:12)を引用なさった時のことを考えるのは、非常に意味あることです。

「『彼は犯罪人たちの中に数えられた』ということが、預言によって必ず実現するのです」(ルカによる福音書22:37)。

従ってこの預言は、イエスが神の意志に従って二人の強盗の間で十字架に架けられた時、驚くべき方法で実現したのです（マタイによる福音書27：38）。

私たちの身代わりとなったメシヤの、本章(イザヤ書53章)に書かれている苦難について色々と述べてきましたが、最後の節でその真実が再び強調されています。「彼は多くの人の罪を負い、罪人たちのために贖罪をする」。

新約聖書に精通している方は、イエスが他の者のために死んだことを述べた多くの聖句を思い出すことでしょう。ここでは、そのうちの二句のみを引用します。

「しかしイエスは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。…イエスも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身を捧げられました」(ヘブル人への手紙9:26、28)。

「イエスも一度、罪のために死なれました。罪のない方が罪人の身代わりとなったのです。それは、…私たちを神のみもとに導くためでした」(ペテロの第一の手紙3:18)。

イザヤ書53章におけるメシヤ預言の驚異、そして新約聖書に記述されるイエス・キリストの贖いの死における成就について、何冊もの本が書かれてきました。本書でお話してきた重要な点に触れ、これらの現象、すなわちここに記す奇跡に注意を再び促せば、多くの方が預言と成就の超自然的な本質を信じ、信仰を深めることと確信しています。、聖書はまるで、神の正式な捺印が成されているかのように、神の霊感を受けたものであることが、預言とその実現によってわかります。従って、イエスが生まれる何世紀も前に書かれたイザヤ書53章の預言に関するすべての詳細が、偶然によって実現する可能性はありません。イエスがどのようにこの預言を実現したかは、4つの福音書に詳しく書かれています。

五. メシヤの役割を記す預言

メシヤ、神に選ばれた方

「キリスト」(ギリシア語の「Christos」)と「メシヤ」(ヘブライ語の「Ha-mashiah」)という言葉はどちらとも、「油を注がれた方〔聖別された方〕」を意味します[28]。「油を注がれた方」は、神に選ばれた方を意味します。アダムとイブの罪が神と人を引き離して以来(ロ―マ人への手紙5:12)、人は、神との間に、救世主、聖職者、王という、3つの役割を果たす仲介者を必要としてきたのです。

(1)罪は不信仰の暗闇に人類を残し、人類は神について知識を持たないようになりました。人類はこのために、神の御言葉、意思、および道についての知識を必要とするようになったのです。まさに、人類は救世主を必要とするのです。

(2)罪は、人類を暗闇に陥れ、神から断ち切り、地獄に向かわせたのです。故に人類は、罪のお赦しを得、神の意志に従った生活を取り戻し、神との交友を回復し、永久に燃えたぎる苦悩の地獄から完全に逃れることを必要とするのです。このために、人類には天与の祭司が必要なのです。

(3)罪は神の言葉に対する不服従です。人類の罪により、人は対立し合うようになったのです。そのため、人は王による統治を必要とします。その王は地上の人ではなく、天の神である必要があります。

旧約聖書の時代には、神に選ばれた預言者、祭司および王を通じ、こうした必要が満たされていました。しかし、いかなる人間も完璧ではないため、失敗を重ねます。そこで神は、完璧な預言者、祭司、救世主そして王を人類に与える計画を、始めから立てておられたのです。そして、神ご自身がメシヤ・イエスとして、これらの役割を果たすために地上に降り立ちました。

旧約聖書の時代に、預言者・祭司・王から成る3階級の公吏は、油を注がれて聖別されることにより聖職に身を捧げたのです。預言者に関して

---

28. 日本語の聖書でヘブライ語の「メシヤ」という言葉が「油をそそがれた」と訳されている例は旧約聖書のレビ記4:3、5、詩篇2:2、ダニエル書9:24、及びサムエル記上2:10を参照してください。この言葉は、レビ記、サムエル記上下、および詩篇にて最も頻繁に使われています。この言葉は、私たちの司祭長イエスの象徴である司祭長(レビ記4:3、5、16、6:22)を表す言葉として使われています。この言葉は、サムエル記上下で18回、詩篇の中でも10回使われていますが、常にイエスを意味しているわけではありません。詩篇2:2、20:6、28:8、84:9、89:51、132:10と17はイエスを示す表現として使われています。詩篇2:2とダニエル書9:25と26はイエス、つまり来るべきメシヤを語るすばらしいものです。

は列王紀上19:16を、祭司に関しては出エジプト記29:21、レビ記8:12を、王に関してはサムエル記上10:1、16:12-13を参照してください。

(1)預言者としてのメシヤ

旧約聖書の預言者たちは神の代理として国家に遣え、神の言葉や意志を人々に伝えました。メシヤが来られた時、完璧かつ完全な神であることが、その人格と言葉によってイスラエルから世界へと示されたのです。イエスが来られた時に、ご自分が神の完璧な預言者であることを証されました。

「いまだかつて神を見た者はいません。しかしもちろん、神の一人息子だけは別です。神の息子は、父なる神といつも一緒ですから、神について私たちに話し、〔神がどのような方かを示して〕くださったのです」(ヨハネによる福音書1:18)。

「私を見た者は、父を見たのです。私が父に在り、父が私に在られることを、あなたは信じないのですか。私があなたたちに言う言葉は、私が自分から話しているのではありません。私の内におられる父が、ご自分のわざをなさっておいでなのです」(ヨハネによる福音書14:9-10)。

来るべきメシヤは、モーセのような預言者であると言われていた

「私は彼らのために、イスラエルの同胞の中からあなた〔モーセ〕のような預言者を立て、その口に私の言葉を授ける。彼は私が命じることを、すべて彼らに告げるであろう。彼が私の名によって私の言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、私はその責任を追及する」(申命記18:18-19)。

モーセは神の従順なしもべでした。来るべき預言者としての役割を果たすため、預言者たちの中から特別に選ばれたのです。メシヤは「モーセのような」預言者だったと言われています。神と向かい合って話すことができたモーセは、イスラエルの**立法者**、**指導者**、**王**、**救い主**、**預言者**(神の代弁者)、そして**仲介者**でもあったのです。イスラエルにモーセのような預言者は二度と誕生しませんでした(申命記34:10-12、民数記12:6-8)。ユダヤ人の歴史を通して、これらすべての役割を一度に果たした者は、彼のみだったのです。

数個のパンと数匹の魚で5,000人に食事を与えるというイエスの奇跡を見た時に「誠に、この方こそ、世に来られるはずの**預言者**だ」(ヨハ

ネによる福音書6:14)と言った人々の言葉は、まさに正しかったのです。「〔世に来られるはずの〕その預言者」は、ヨハネによる福音書1:21にも引用されています。

もちろんモーセも偉大な人物でしたが、イエスはそれにも増して限りなく偉大な方だったのです。モーセが「しもべ」として忠実であったのと同様に、イエスは「〔神の〕息子」として、「ご自分を立てた方〔神〕に対して忠実」(ヘブル人への手紙3:2)な、完璧かつ全知の**預言者**だったのです(ヘブル人への手紙3:5-6)。

ペテロは、シナゴーグ(ユダヤ教会)で行った説教を次の言葉でまとめています。「モ―セはこう言いました。『神である主は、あなたたちのために、私のような預言者を、あなたたちの兄弟たちの中から一人、お立てになる。この方があなたたちに語ることは、すべてみな聞きなさい。その預言者に聞き従わない者は皆、民の中から滅ぼされ、絶やされる』」(使徒行伝3:22-23)。

イエスの預言者としての役割に関する記述は、両聖約〔旧約・新約聖書〕に示されています。イザヤ書61:1とルカによる福音書4:18の両節とも同じ内容を反映し、メシヤの預言者としての役割を述べています。

「私の中に神の霊がおられる。主が、数しい人々に福音を伝えるために、私を選ばれたのだから。主が私を遣わされたのは、傷ついた心を癒し、捕われている人に開放を告げ、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にするためである」。

(2)祭司としてのメシヤ

旧約聖書に書かれている神によって選ばれた祭司たちは、神の御前で人々の代理人となり、人々の罪の許しを請うために、いけにえを捧げる役目と、「神について無知な、正しい道から外れている人々」を助けるという義務を持っていました(ヘブル人への手紙5:1-2)。アロン(モーセの兄弟)は、神に選ばれた最初の祭司長でした。こうした祭司たちは、すべて自ら罪人だったため、まず自分の罪のため、次に人々の罪のために、いけにえを捧げることになりました(ヘブル人への手紙5:3、7:27-28、9:7)。祭司たちは人間だったため、任期を果たす前に亡くなることがありました(ヘブル人への手紙7:23)。その上、「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません」(ヘブル人への手紙10:4)と書かれているように、彼らが捧げた動物は、完璧ないけにえである**メシヤ・イエス**の

象徴に過ぎませんでした。こうした動物のいけにえは、何度も捧げられる必要がありました。

しかし、神に遣わされた祭司長である**イエス**は、永遠に生きる完璧な祭司長で、贖罪のための完璧ないけにえでもありました。イエスは人の罪のため、いけにえとして一度だけ、**ご自身**を捧げてくださったのです。

「このような大祭司こそ、私たちが必要としていたお方です。清く、少しの欠点も罪のしみもなく、罪人によって汚されることもないからです。この大祭司のために、天では、名誉ある特別な席が設けられているのです。普通の祭司は、神の前に出る時、まず自分の罪、そして人々の罪を清めるために、毎日、動物の血を捧げる必要がありました。しかしイエスには、その必要がまったくありません。なぜなら、十字架の上で**ご自身**をいけにえとして捧げ、ただその一**度**の行為で、すべてを成し遂げてしまわれたからです。古い司祭制度のもとでは、大祭司といえども、自らを悪から守ることのできない、罪ある弱い人間でした。しかし後に、神は誓いを持って、一**人息子**という完全なお方を、永遠の大祭司に任命されたのです」(ヘブル人への手紙7:26-28、9:11-14、25-26)。

イエスはこのように、十字架の上でただ一度きりの完璧ないけにえを捧げることにより、信仰によって救われる者たちを「完璧にする」のです(ヘブル人への手紙7:23-28、9:25-38、10:10-14)。ヘブル人への手紙のほとんどの部分は、以下の点に費やされています。イエス・キリストが神に選ばれた完璧な**祭司長**であること。イエスはまた、人々の罪を償うための、完璧ないけにえでもありました。イエスが人々のために自らを犠牲にしたことを受け入れ、イエスを救世主として受け入れる人すべてに、イエスは永遠の命を与えます。メシヤは、罪と罪人のためのいけにえとして身体と魂の両方を捧げてくださいました(イザヤ書53:5、10)[29]。

祭司アロンは人々に、罪の償いの必要性と、動物の生き血を捧げることによってのみ罪の赦免を得られるということを、絶え間なく教え続けて

29. らい病は罪のように扱われていたので、メシヤが世界の罪を負った時、ある意味でらい病患者のようなものでした。メシヤは実際に、私たちの代わりに「罪の象徴」とされました(コリント人への第二の手紙5:21)。イザヤ書53:4はこのことを暗示します。日本語新改訳聖書は、「私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと」と書かれています。

メシヤ・イエスは、**私たちの**罪のために、あのような苦難をお受けになったのです。イエスは罪を犯したことがないにもかかわらず、自ら進んで私たちの犯した罪のために身代わりとなって、死刑の苦しみを受けてくださったのです。なんと驚くべき恩恵なのでしょう。神によって聖別された方であるイエスが、神の預言者、祭司、王のみならず、贖罪のいけにえとなるために選ばれ、文字どおり私たちの罪の象徴となられたという結論に、皆が到達すると思います。このような恩恵、このような愛に対し、すべての信仰者は永遠に感謝するでしょう。

きました(ヘブル人への手紙9:22)。しかし、**永遠**の祭司であるメシヤを描くために選ばれた者は、アロンではなく、メルキセデクだったのです(ヘブル人への手紙5-7章、詩篇110:4)。メシヤ・イエスの象徴として、メルキセデクは永遠**不変の**祭司であり続けるのです(ヘブル人への手紙7:3—「〔イエスは〕いつまでも祭司としてとどまっているのです」)。

(3)王としてのメシヤ

「しかし私は、私の王を立てた。私の聖なる山、シオンに」(詩篇2:6)。

人間は一個人であると共に社会の一員でもあり、社会生活を管理する**王**(政権)を必要とします。このため神は、最初は家長・族長、後には「指揮官」(モーセやヨシュア)、その後なお「士師」によって、最終的には民衆の願いを聞き入れて**王**を立て、イスラエルの人々を治められました。神のメシヤは、完璧な**王**、完全たる正義と慈善に満ちて治められる「王の王、主の主」なのです。

「やがて、私がダビデ王の王座に正義の若枝〔メシヤ〕を置く時が来る。彼は知恵と正義をもって治める王となり、地上すべてに正しさが行き渡るようにする。彼の呼び名は『**神は私たちの正義**』である」(エレミア書23:5-6)。

「神の霊は、彼〔メシヤ〕の内にある。…そして、彼は正義によって裁く」(イザヤ書11:2、4、ゼカリヤ書9:9、サムエル記下7:12-17、歴代志上17:11-14)。

神は、預言者・祭司・王としてのメシヤの活動を描くために偉大な三人を選ばれました。預言者モーセ、祭司メルキセデク、ダビデ王の三人です。

ヘブライ語で「メシヤ」を意味する単語(mashiah)は、ダビデ王の生涯を語るサムエル書の中に18回出てきます。サムエルの母ハンナは、神の聖別された王として来るべきメシヤを指すこの言葉を、最初に使う名誉を与えられたのです。

「主は、…ご自分の王に力を授け、メシヤの力を人々に示すのです」(サムエル記上2:10)。

王としてのメシヤの到来は通常、彼の正義によって治められる王国が確立される、第二の到来を意味します(イザヤ書11:1-9、ミカ書4:1-5)。

多くの詩が、メシヤのことを来るべき王として詠っています(詩篇2章、45章、47章、72章)。詩篇2には、シオンの山における王としての戴冠式と、(詩篇2:6)メシヤがすべての国を引き継ぐ様子が記されています(詩

篇2:8)。詩篇45章には、その威厳と美しさ、栄光ある花嫁(イエスの信者たち)について詠われています。詩篇47章では、**神**であるメシヤとこの世の王としての戴冠式が詠われています(詩篇47:2、7)。詩篇72章は、来るべきメシヤの王国と、正義による統治に関する、詩篇の中で最も完璧な描写が見られます。

(1)王子としてのメシヤ(詩篇72:1)
(2)王であるメシヤの完璧な正義(詩篇72:2-4)
(3)王であるメシヤの健全な統治(詩篇72:5-7)
(4)王であるメシヤの万物に対する主権(詩篇72:8-11)
(5)王であるメシヤの聖なる思いやり(詩篇72:12-14)
(6)王であるメシヤの統治がもたらす物質的・霊的繁栄(詩篇72:15-17)
(7)王であるメシヤの統治下における、主なる神への完全な賛美(詩篇72:18-19)[30]

新約聖書は、イエスがメシヤ、すなわち神により選ばれた方だと証す

新約聖書は明らかに、人々に神の御言葉を告げる、神により召された預言者として、イエス・キリストを描いています(ヨハネによる福音書17:8)。また「〔私たちの良心を清めるため〕傷のないご自身を、聖霊によって神に捧げられた」(ヘブル人への手紙9:14)神により聖別された祭司であり、神の来るべき「**王の王、主の主**」(ヨハネの黙示録19:16)であるとも書かれています。

---

30. メシヤは祭司および王として示されています。「王として、また祭司として世を治め〔る〕」。ゼカリヤ6:12-13でのヨシュアへの伝言の中には、人間にはとても達成不可能な内容が含まれているため、確実に将来のメシヤを思い描いていると言えます。以下はゼカリヤ書6:12-13からの引用です。

「天の軍勢の主は、彼にお話しになる。『お前は、やがて来る人を表わす印だ。その人は「枝」と呼ばれ〔る〕』」(ゼカリヤ書6:12)。これは明らかにメシヤを表しています。自然かつ超自然的な成長期を経て(イザヤ書53:2)、「自力で成長〔する〕」(ゼカリヤ書6:12)のです。イエスが今でも行われているように(エペソ人への手紙2:21-22)、「神の神殿を建てる」(ゼカリヤ書6:13)のです。「さらに王の称号〔栄光〕を受ける」(ゼカリヤ書6:13)—「父のみもとから来られた一人息子としての栄光である。この方は恵みと誠に満ちておられ〔る〕」(ヨハネによる福音書1:14)。そして、メルキセデクのような(詩篇110:2、4)、「王として、また祭司として世を治め」(ゼカリヤ書6:13)ます。「二つの務めをみごとに調和させ」、王として平和をもたらし(詩篇72:7、46:9)、祭司として十字架の上で流された血によって平和をもたらされるでしょう(エペソ人への手紙1:7、コロサイ人への手紙1:20)。

エレミヤ書30:21もまた、メシヤに関してこれに似た証言を行う、注目すべき一節です。メシヤは王と祭司になるでしょう。王として人々を支配し、人々のために神に近寄り、神の目の前に現れる(エレミア書30:21)祭司として、完璧な**仲介者**となるでしょう(テモテへの第一の手紙2:5)。

新約聖書では、「ユダ族から出た獅子、ダビデ王の根」(ヨハネの黙示録5:5)(王なるイエス)が「変わることのない祭司の務め」を持っておられるのです(ヘブル人への手紙7:24-28)。

イエスはヘブル人への手紙1:9に、神に選ばれた方として描かれています。「あなたは正義を愛し、悪を憎みます。そのため、あなたの神は、あなたに他の誰よりも多くの**喜び〔聖霊〕を注がれました**」。

ルカによる福音書4：18に関しては、すでにお話しました。ここでイエスは、自分がイザヤの言う「貧しい者に福音を伝えるために選ばれた者」だと語ります（イザヤ書61：1）。

黙示録1:5では、「また、忠実な証人〔預言者〕、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、与えられるように。イエス・キリストは私たちを愛し、その血によって私たちを罪から解き放ち〔祭司〕…」とあり、イエスを預言者、祭司、王として描いています。

ヘブル人への手紙1:1-3においても、イエスは預言者、祭司、王として描かれています。

「神は、…この時代が終わる直前に、一人息子〔預言者〕を通し、私たちに語られました。…また、罪の清めを成し遂げ〔祭司〕、すぐれて高い所にある、神の次の座に〔王として〕着かれました」。

「見よ」神の「若枝」を

他の聖書教育者たちは、メシヤの名前「**若枝**」、および「見よ」という言葉が、神のメシヤを表すために旧約聖書で使われる、4通りの方法に注意を促しています。旧約聖書における「見よ」は、特別な物事に対する注意を促すために使われています。「見よ」と「若枝」は、**イエス・キリスト**についての説明に注意を促す預言として併用されています。私たちは新約聖書において、こうした預言が実現したことを知ることができます。「見よ」と「若枝」が、メシヤを示すために、旧約聖書において4通りの方法で使われている例をここに挙げましょう。

(1)王として

「**見よ**。やがて、私がダビデ王の王座に、正義の**若枝**を置く時が来る。彼は知恵と正義を持って治める王となる」(エレミア書23:5)。

「**見よ**。あなたの王が、あなたの所に来られる」(ゼカリヤ書9:9)。

これは、マタイによる福音書でイエスが王として描かれたことに対応しています。

(2)**主のしもべ**として

「**見よ**。私はひとつの**若枝**を、**私のしもべ**として送る」(ゼカリヤ書3:8)。

これは、マルコによる福音書でイエスが**主のしもべ**として描かれたことに対応しています。

(3)**人の子**として

「万軍の主〔神〕はこう仰せられる。**見よ**。一人の**人**がいる。その名は**若枝**」(ゼカリヤ書6:12)。

これは、ルカによる福音書でイエスが**人間**の理想像として描かれることに対応しています。

(4)**神の息子**として

「**見よ**。あなたたちの**神**を」(イザヤ書40:9)。

「**主**の**若枝**は、その日、麗しく、栄光に輝き〔ます〕」(イザヤ書4:2)。

これは、ヨハネによる福音書でイエスが**神の息子**(そうです、人間の姿をした**神ご自身**なのです)として描かれる場面に対応しています。

ヘブライ語聖書でメシヤを示すために「若枝」が使われているのは、エレミア書23:5-6の意図を反復しているエレミア書33:15を除くと、この４つの場合のみです。すでに述べたとおり、旧約聖書の中には、「見よ」という言葉によってメシヤを紹介し、**メシヤに**特別な注意を促している部分が何箇所もあります[31]。

旧約聖書においてメシヤを指す他の名称

旧約聖書では、メシヤを示す多くの名称が出てきます。ここで、そのいくつかを紹介します。

「主のしもべ」

イザヤ書において、メシヤは頻繁に主のしもべ、あるいは「私のしも

---

31. ゴデー教授は次のように言いました。「ある家族が、その父親の人となりを余すところなく思い出に残すために、ある才能豊かな画家に肖像画を頼んだとします。父親は、陸軍大将、判事、学者、そして父親でもある著名な人物でした。その才能豊かな画家は、父親が持つ4つの役目を表すためには、1枚の肖像画よりも、4枚の肖像画を別々に描くことを好むでしょう。それと同じように、聖霊もまた、4つの福音書の4人の著者たちの心の中に、イエスの4つの表彰を刻み込んだのです。このようにして、神に選ばれた完璧な人間、人のかたちをした神であるイエスの、完璧な肖像が残されたのです」。

イエス・キリストの人生を描く4つの福音書**すべて**が、神の完璧な預言者、完璧な祭司、完璧な王、そして完璧な息子である**メシヤ**としてイエスを表しています。しかし、各福音書はそれぞれ、イエスの異なる役目を強調しています。マタイによる福音書は**王**として、マルコによる福音書は**エホバのしもべ**として、ルカによる福音書は**人の子**として、ヨハネによる福音書は**神の息子**としての役目を強調しています。

べ」と呼ばれます(イザヤ書42:1、52:13)。「主〔エホバ〕のしもべ」としての彼は、正義と真の謙遜の象徴、人類の師および救世主なのです。メシヤは神の望みをすべて満たします。故に、彼は以下のすべてなのです。

第2のアダム—完璧な人間
第2のイスラエル—完璧なしもべ
第2のモーセ—完璧な預言者
第2のダビデ—完璧な王
第2の司祭長—完璧な司祭長

神が人類を創造した目的はすべて、イエスによって、イエスを通じて、完全に成し遂げられました。アダムの創造や、イスラエル、モーセ、アロン、ダビデ王の選択などにおける、神が完全に果たせなかった目的は、イエスにおいて果たされたのです。

「羊飼い」

イザヤは、メシヤを主のしもべとして記し(イザヤ書42:1、52:13)、エゼキエルは、イスラエルの羊飼いとして記しています(エゼキエル34:23、37:24—この節の「ダビデ王」は「ダビデ王の子孫」、つまりイエスを意味しています。また「羊飼い」という言葉もイエスを意味しています)。

父なる神に実に愛されていたイエスは、真の羊飼いだったのです。イエスはまた、神の御言葉、天国への扉でもありました(ヨハネによる福音書の第10章を読んでください。イエスは自らの命を犠牲にし、それによって、イエスを信じ、その犠牲を受け入れる者には、永遠の命を与えることができるのです)。

その他の名称と肩書き

メシヤは「石」または「岩」(イザヤ書8:14)、「礎」(イザヤ書28:16)、「釘」(イザヤ書22:21-25)、「戦の弓」(ゼカリヤ書10:4)、「シロ」(創世記49:10)、「星」(民数記24:17)とも呼ばれています。

旧約聖書に出てくる「イエス」という名

旧約聖書では**イエス**という名は隠されていますが、事実上、創世記からハバクク書までの間に約100回登場します。旧約聖書で「**救い**」という単語を使っている場合、特にヘブライ語で「私の」「あなたの」または「彼の」を伴う場合は、ほんの数例を除いて、マタイによる福音書1:21で使

われている「**イェーシュア**」(ヘブライ語のイエス)と同じ言葉なのです。これは実際に天使がヨセフに言った言葉です。「マリアは男の子を産むでしょう。その子を**イェーシュア**〔**救い**〕と名付けなさい。この方が、ご自分の民をその罪から救ってくださるのです」。

旧約聖書の数節を例として説明します。詩篇9:14には、ダビデ王が「救い出された喜びを語ることができます」と言ったと書かれています。彼が実際に発した言葉は、「**イェーシュア**〔**イエス**〕の喜びを語ることができます」でした。イザヤ書12:2-3には、実にすばらしい発見があります。この節では「**救い**〔**イェーシュア**〕」という単語が3回使われています。これはイエスの存在と救いにまつわる３つの異なる観点を表現しているのです。イエスを「救い」という言葉の体現・象徴として表している、ヘブライ語聖書からの訳を引用します。

「見よ。神は私の**イェーシュア**である〔イエスが人としてこの世に来る前からの、その永遠の存在を指す言葉(ヨハネによる福音書1:1)〕。私は信頼し、恐れることはない。主エホバは私の力、私の歌。彼はまた、私の**イェーシュア**となられた〔イエス、人として現れた神の御言葉(ヨハネによる福音書1:14)〕。従って、あなたたちは喜びながら**イェーシュア**の泉から水を汲む〔救いの水は、イエスの犠牲の結果として流れる(ヨハネによる福音書7:37、39、4:10、14)〕」。

六. 旧約・新約聖書におけるメシヤ(イエス)の神性

メシヤの二重性

メシヤという方を正しく知るには、その二**重性**を理解する必要があります。メシヤはまさに神であると同時に、完璧な人間でもあるのです。より正確に言えば、神人であり、神と人が一体、不可分となった一個人なのです（つまり、イエスは神の霊を体内に宿した人間なのです）。その人間性は、人の子、ダビデ王の子(孫)およびアブラハムの子孫といった名称と肩書きに表されています。その神性は、神の息子、神、主、エホバ、エルおよびエロヒムといった名称と肩書きに表されています。この考察は、メシヤ(イエス)が**人として現れた神**であることを明しているという真理と、その重要性を示すためのものです。

ヘブル人への手紙の第一章で述べられる、イエスの神性

ヘブル人への手紙第一章の最初の6節に、イエスに関する下記の10項目の真実が述べられています。これらには、普通の人間に該当するような内容は全く含まれておらず、イエスが神である事を証明・確証するものと解釈できます。

(1)「預言者たち」は神の霊感を受けていたにしろ、普通の人間に過ぎませんでした。それに対して、イエス(メシヤ)は神の「**息子**」と呼ばれています(ヘブル人への手紙1:1-2)。「神はその昔、預言者たちを通して先祖たちに、…語られましたが、この時代が終わる直前には、一人息子を通して、私たちに語られました」。

(2)イエスは「万物を受け継ぐ者」(ヘブル人への手紙1:2)です。イエスは神の息子であり、それ故に、神の下にあるものはすべて彼のものとなるのです。

(3)世界はイエスによって造られました(ヘブル人への手紙1:2)。これは天地創造以前にイエスが存在したことを証明するだけでなく、彼によって創造が行われたことを表しています(ヨハネによる福音書1:1-3)。「イエスがすべてを創造した。そうでない物はひとつもない」(ヨハネによる福音書1:3)。

(4)太陽の存在が、その光によって認知されるのと同様に、神の**栄光**は、イエスを通じて知ることができるのです。「〔イエスは〕神の**栄光の**輝き」(ヘブル人への手紙1:3)。

(5)刻印が全く同じ印章を再生するように、イエスは、神の息子として神と同等の力を持たれる方だと書かれています。「〔イエスは〕神の本質の完全な現われ」(ヘブル人への手紙1:3)。

(6)メシヤ・イエスは、この莫大な、ほとんど無限の宇宙をひとつに保っておられます。もちろん宇宙自体、イエスつまり全能の神が創造したものです。「その力ある御言葉によって、万物を制御しておられます」(ヘブル人への手紙1:3)。「イエスは、すべての創造者なのです。…万物はイエスによって成り立っているのです」(コロサイ人への手紙1:16-17)。

(7)イエスは、**おひとりで**自らの命を犠牲にし、それによって人類を救済する道を開きました。罪におぼれる人は、たとえ完璧な人であっても、人類(つまり、何十億人もの暗闇に迷う罪人の集り)を解放することができませんでした。罪人に満ちたこの世を償うには、無限の価値を持つい

けにえが必要なのです。「私たちの罪の記録をすべて消し去って清めるために、死んでくださった」(ヘブル人への手紙1:3)。

(8)イエスは今、世界の統率者としての地位を、父なる神と分かち合っておられます。イエスは「すぐれて高い所の、神の次の座に着かれました」(ヘブル人への手紙1:3)。黙示録22:1に「神と小羊の王座」と書かれていることから、イエス(神の小羊)が永遠の王座を神と共有していることは明らかです。

(9)イエスは天使よりはるかに高き方です。「使い〔天使〕に勝る方となられました」(ヘブル人への手紙1:4)。

(10)ここで再び、父なる神とメシヤの親子関係が証明されています。天使さえ、メシヤ・イエスを崇拝するよう命じられているのです(ヘブル人への手紙1:6参照—「神の御使い〔天使たち〕は皆、彼を拝め」)。**神**のみが崇拝されるべき存在だということを思い出してください(マタイによる福音書4:10)。「あなたは、私の息子。…また、私は彼の父であり、彼は私の息子である」(ヘブル人への手紙1:5)。

メシヤを呼ぶには、旧約聖書で神の名(肩書き)を表すために使われた主な３つの言葉と、新約聖書で神を表すために使われた主なふたつの名が使われています。ヘブル人への手紙第一章の残りには、(この章で引用されている旧約聖書の聖句と共に)こうしためざましい事実が記されているのです。

ヘブル人への手紙1:8で、父なる神が、息子なる神(メシヤ)に話しかける時、息子を**神**と呼んでいます。この8節は詩篇45:6からの引用であり、ヘブライ語の神の主要な名称である「**エロヒム**」がメシヤに使われています。「神〔**エロヒム**〕よ。あなたの王座は世々限りなく…」。

ヘブル人への手紙1:10でも、父なる神は、**息子なる神**(メシヤ)に話しておられ、その際メシヤを**主**と呼んでいます。これは詩篇102:25-27からの引用です。これらの節は**エホバ**に関連しています(詩篇102:16、19、21-22参照)。ここで、新約聖書からの一節を引用してみましょう。「主よ、あなたは世の初めに地を造った。天もあなたの手によって造られた。これらは、やがて無に帰す。しかしあなたは、いつまでも変わらない。すべてのものは、古着のようにすり切れる。いつかあなたは、それらを捨て、別の物と取り換える。しかしあなたは決して変わらず、あなたの年齢には終りがない」(ヘブル人への手紙1:10-12)。

これらの節(ヘブル人への手紙1:10-12)を読むにあたり、次のことに注目してください。

(1)父なる神は(ヘブル人への手紙1:8と同様に)まだ息子と話をしています。

(2)父なる神は、息子が全宇宙の創造主であると言います。「天もあなたの手によって造られた」(ヘブル人への手紙1:10)。

(3)父なる神は、息子が**永遠かつ不変であられる方**であると言います。神は、世界がやがて使い古された着物のように古びると言われます。しかし息子(メシヤ)に関しては、「あなたの年齢には終りがない」(ヘブル人への手紙1:12)と言われています。

ヘブル人への手紙の著者は、メシヤに関し、神の啓示を受けたすばらしいコメントをあと二つ残しています。

(1)「神がその使いに、次のような言葉をおかけになったことがあるでしょうか。『私があなたの敵を完全に征服するまで、私の次の位置に留まっていなさい』」(ヘブル人への手紙1:13)。ここでさらに、「神の次の座に着く」という言葉によって、メシヤの高められた地位が示されています。

(2)「私があなたの敵を完全に征服するまで」(ヘブル人への手紙1:13)という言葉により、メシヤのすべてにおける**永久なる勝利**を保証しています。

本章で父なる神は、**メシヤ・イエスの神性**を力説し、15箇所で徹底的に証しておられます。その基本的な真理を拒むなど、愚かという他ありません。「だから『あなたたちは罪が赦されないまま死ぬ』と言ったのです。私が神の息子、メシヤ(救い主)〔主エホバ〕であることを**信じなければ**、罪の呪いの下で死ぬしかないのです」(ヨハネによる福音書8:24)[32]。

メシヤの神性に関する旧約聖書の言葉

旧約聖書の預言を、新約聖書における成就と比べてみると、次の点が見出されます。

(1)エホバはメシヤを「仲間」(同等の者)と呼びます。

「剣よ。目を覚まして私の牧者を攻め、私の仲間を攻めよ。…万軍の主の御告げ」(ゼカリヤ書13:7)。

32. ここでイエスは「**私はある**」というエホバの名を意味する(出エジプト記3:14)言葉を使います。それにより、まさにご自分を旧約聖書の**エホバ**であると言っておられるのです。

イエスは新約聖書において、神と自分が同等であるという意味の発言を行いました。「私と父は同じです」(ヨハネによる福音書10:30)。

聖霊によって霊感を受けたポールは、キリストが「神と同等である」と、ピリピ人への手紙2:5-6で証しています。「神なるイエス・キリストは、自分が**神と同等**だと発言しても、神の掟に反する理由は何もありませんでした」。

(2)イザヤ書9:6では、メシヤの人間性、神性、および王位に関する預言が語られています。

来るべきメシヤにも、神のための名称が与えられています。これは真実を受け入れることを拒否しない限り、否定しようのない事実です。

「一人のみどりご〔メシヤの人間性〕が、私たちのために生まれる。一人の男の子〔三位一体における永遠なる神の息子〕が、私たちに与えられる。その名は…『素晴らしき者、助言者、**全能の神**、**永遠の父**(共に神の名称)』、『平和の君』と呼ばれる」。

ヘブライ語の名前は、その人の特徴を表すものです。すなわち、ある人の名は、その人の人格を表しているのです。従って、メシヤが「**全能の神**」という名で呼ばれるということは、**力ある神である**ということなのです。

(3)メシヤは旧約聖書で神(ヘブル語のエルまたはエロヒム)と呼ばれています。

次の聖書の句は、メシヤが**神**と呼ばれている例です。「ユダの町々に伝えよ。『見よ。あなたたちの神を。見よ。神である**主**は力を持って来られ〔る〕』」(イザヤ書40:9-10)。メシヤが**神**と呼ばれている詩篇45:6(「**神**よ。あなたの王座は世々限りない」)については、既にお話しました。

詩篇47:7-8には、メシヤの第二の到来について書かれています。「誠に**神**は全地の王。…**神**〔エロヒム〕は国々を治めておられる」。メシヤ(イエス)が国々を治めておられることは明らかです(コリント人への第一の手紙15:24-25、ヨハネの黙示録11:15、19:16)。

(4)旧約聖書で、メシヤは主とも呼ばれています。

ゼカリヤ書2:10で、主は「見よ。**私は**来て、**あなたのただ中に住む**」と仰せになります。「誠に、いと高き方である**主**は、…全地の大いなる王」(詩篇47:2)なのです(これは、メシヤの第二の到来についての預言的な聖詩だとわかります)。

エレミヤ書23:5-6において、メシヤは「**主は私たちの正義**」と呼ばれています。

詩篇102:16に、「**主**は…その栄光のうちに現れ〔る〕」と書かれています。ザカリヤ書14:9では、「**主**は地のすべての王となられる」とあります。そして、ここにおける王は**人の姿をした主**なのです。それを証明するため、同じ章の3節と4節で「主が出て来られる。…その日、主の足は、…エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ」と書かれています。ザカリヤ書12:10は、明らかにメシヤが十字架にかけられた時の状態を指して、「彼らは、**自分たちが突き刺した**者、私を仰ぎ見」とも述べています。

イザヤ書40:3に記された、一点の曇りもない明らかな預言において、メシヤは主と神の両名称で呼ばれています。「荒野に呼ばわる者の声がする。『**主**の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ』」。

この聖句は新約聖書において、イエスとその先駆者である洗礼者ヨハネの預言成就を、マタイが語る時に引用されています(マタイによる福音書3:1-3)。

ゼパニア書3:14-15とイザヤ書12:6の両節では、エホバご自身がイスラエルにおられる聖なる神であることが知らされています。「王、主は、あなたのただ中におられる」(ゼパニヤ3:14-15)。

万軍の主がメシヤの肩書きであることは、イザヤ書6:1-3、9-10とヨハネによる福音書12:40-41、イザヤ書8:13-14とペテロの第一の手紙2:5-8を照らし合わせると明らかになります。

(5)新約聖書において、イエスはご自身が主であり、過去から未来まで永遠に存在する神、つまり、旧約聖書で「私はある」を意味するヘブライ語の名前で呼ばれた神であると言いました。

主はイザヤ書43:10で、ご自分を指して「イスラエルよ、お前が私の証人、私のしもべだ。私を信じ、**私はある**〔私だけが神である〕ことを知るために選ばれたのだ。私の他に神はいない」と言われています。

従って、新約聖書のヨハネによる福音書4:26、8:24、13:19でキリストが同じ主張をしたことは非常に重要です。「何か起こった時、『**私はある**』ということを、あなたたちが信じるようになるためである」(ヨハネによる福音書13:19)。イエスはしばしば、自身とその行いの特別な点について話す時、「**私は…である**」という表現を使われました。

「**私は**良い牧者で**ある**」(ヨハネによる福音書10:14)。
「**私は**門で**ある**」(ヨハネによる福音書10:9)。
「**私は**、世の光で**ある**」(ヨハネによる福音書8:12)。
「**私は**道で**あり**、真理で**あり**、命なので**ある**」(ヨハネによる福音書14:6)。

(6)ヘブライ語の「Ha-adon」および「Adoni」という神の肩書きは、旧約聖書でのメシヤに与えられています。

「見よ。私は使者を遣わす。彼は私の前に道を整える。あなたたちが尋ね求めている主〔Ha-adon〕が突然、その神殿に来る」(マラキ書3:1)。

主(Ha-adon)の来られる前に道を整えた「使者」とは、洗礼者ヨハネのことであり、彼が道を整えたその主とは、まさにメシヤ、ナザレのイエスだったのです。

「主は、私の主〔Adoni〕に仰せられる。『私があなたの敵を完全に征服するまで、私の次の位置に留まっていなさい』」(詩篇110:1)。ペテロは聖霊降臨の日に、ナザレのイエスがメシヤかつ神であることを証すため、この一節を説教で引用しました(イエスご自身が、パリサイ人にメシヤはダビデ王の子孫のみならず、ダビデ王の主でもあることを証すマタイによる福音書22:41-45と使徒行伝2:34-36を共に参照)。

(7)旧約聖書はまた、世界が創られる前からメシヤが存在したことを教えています。

箴言8:22-31は、メシヤが天地創造以前から存在したことについて語っています。「**神**が創造のみわざを始める前から、私は神と共にいた。永遠の昔から、まだ地球もない大昔から、私はいた」。この言葉は「知恵」についての記述であり、その「知恵」は明らかに永遠のメシヤの象徴です。

そして新約聖書も、永遠の御言葉であるメシヤ・イエスが天地創造以前から存在したことを教えています。「初めに、言葉が**あった**。言葉は…初めに神と共にあった」(ヨハネによる福音書1:1-2)。

(8)旧約聖書は、メシヤを「主の栄光」〔神性を表す言葉〕と呼んでいます。

「こうして**主の栄光**が現れると、すべての者が共にこれを見る」(イザヤ書40:5と、この第5節がメシヤについて述べていることを示す40章3-4節を参照)。

新約聖書は、神が人（メシヤ・イエス）としてこの地に来られたことを語っています。「言葉は人となり、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。**父のみもとから来られた、一人息子としての栄光**である。この方は恵みと誠に満ちておられた」(ヨハネによる福音書1:14)。

新約聖書でも、イエスの神性が教えられている

新約聖書がメシヤ・イエスの神性を徹底的に教えていることは、ヘブル人への手紙第一章に基づいて前述しました。イエスの神性の教えは新約聖書全体に浸透しており、数多くの直接的・間接的表現が見られます。以下は、イエスが神であるという結論を導く間接的表現の例です。

(1)イエスは罪を赦すことができます(マルコによる福音書2:10-12)。

(2)イエスは崇拝される権利があります(マタイによる福音書2:11、8:2、14:33、ヨハネによる福音書1:1-18)。

(3)イエスは超自然的な力を持っています(福音書に記録されている奇跡すべてを、マタイによる福音書9:25、10:1、マルコによる福音書2:10-12、3:5、10-11、ヨハネによる福音書11:41-44などで確認してください)。

(4)イエスは罪なき神に従う人生を送りました(ヘブル人への手紙7:26、ペテロの第一の手紙2:22、ヨハネの第一の手紙3:5、ルカによる福音書18:19—主イエスは、この節で、「神の他に良い者はいない」ゆえに、もしイエスが神であると認めなければ、誰も彼を「良き者」と呼ぶべきでないことを直接教えられています)。

(5)イエスは人類の罪を贖うために死にました。そしてそれは、イエスが,神だということを証明しています。なぜなら、人類を贖うことができるのは神のみだからです(ヘブル人への手紙2:9)。

(6)人間として、イエスの身体は復活しました。これはイエスが神だということを証明しています(ロ—マ人への手紙1:4)。

(7)イエスは神のみが実現可能な多くの約束を行いました(マタイによる福音書11:28-29、28:19-20、ヨハネによる福音書14:2-3)。

(8)人が父なる神を信じるように、イエスを信じるべきである事(ヨハネによる福音書14:1-3)。

(9)イエスは天地の創造者であり、天地をひとつに保っておられる方です(ヨハネによる福音書1:1-3、コロサイ人への手紙1:16-17)。

(10)遍在、全知、全能などの神に該当する特性をイエスはすべて持っておられます(マタイによる福音書28:18、20、ヨハネによる福音書3:13、14:23、16:30)。

イエスが神であることを示す直接的表現の数例

ヨハネによる福音書1:1-3—「言葉は神であった」。

イエスの神性を雄弁に物語る、ルカによる福音書1:68、76に注目してください。ヨハネによる福音書20:28、ロ—マ人への手紙9:5、コリント人への第一の手紙2:8、コロサイ人への手紙1:14、17、テモテへの第一の手紙6:14-16、テトスへの手紙2:13、ヘブル人への手紙第一章も併せて参照してください。

三位一体

メシヤが**神**であると同時に神から遣わされた方であるというのは、三位一体の教えによって解き明かされる謎です。神は、父なる神、息子(メシヤ)、聖霊の三人から成る、ひとつの存在なのです。

「御父が息子を世の救い主として遣わされた」(ヨハネの第一の手紙4:14)。

三位一体に関するいくつかの引用文を挙げます。

(1)創世記1:1の「神」(ヘブライ語のエロヒム)という主語は複数形であり、その後に単数形の動詞「創造した」が続きます。これは、ひとつの神が複数から成立していることを暗示しています。

(2)申命記6:4の「一人」(神)には「ehad」という単語が使われており、これは絶対的単一性ではなく、複合的単一性を表す単語です。この言葉(「ehad」)は創世記2:24でも使われています。アダムとエバ(男とその妻)は一体(「ehad」)となる、すなわち、二人が「一人」となるのです(創世記11:6、士師記20:1)。

(3)旧約聖書には、三位一体に関する多くの直接的な表現があります。例として、イザヤ書42:1、48:11-12、16-17、61:1、63:7-10、ザカリヤ書2:10-11、民数記6:24-27(この24-26節で主という言葉が３つのわずかに異なる使われ方をしている点と、27節では主が単数形で「私の名」という言葉を使われている点に注目してください)、などが挙げられます。

(4)創世記1:26で、神は「**私たち**に似た、**私たち**のかたちに、人を造ろ

う〔「私たち」は神格が一人以上から成立することを示している〕」と仰せになり、多くの聖書の言葉が三位一体の存在を暗示しています。創世記11:7―「**私たちは**下って行き、そこでの彼らの言葉を乱し、互いに言葉が通じないようにしよう」(創世記3:22、イザヤ書6:8)。

(5)三位一体は、新約聖書でもはっきりと教えられています(マタイによる福音書3:16-17、28:19-20、ヨハネによる福音書14:16、コリント人への第二の手紙13:14、エペソ人への手紙4:4-6、ヘブル人への手紙9:14、ヨハネの黙示録1:4-5)。

七. イエスにおいて成就した、旧約聖書の象徴と間接的預言

聖書は、来るべきメシヤについての預言が直接的にはっきりと述べられているのと同様に、**象徴に**よって間接的にも述べられているという点でも独特なものです[33]。

「象徴」は聖書において、ある真理を表すために使われています。人物、場所、物事、行事、一連の出来事など、日常に見られる普通のものを、未来に起こることを預言として表すために神は使われます。聖書で使われている象徴は、神とイエス、サタンおよび反キリスト、信仰者と不信者、神に従うキリスト教徒の生き方と世俗の生き方を表すために使われています。直接的預言だけでなく、メシヤ・イエスに関する間接的預言は聖書全体に見られます。イエスの象徴(間接的預言)は旧約聖書に溢れています。聖書で使われる象徴について、数百ページにわたる本を書くこともできますが、それでも、その広い領域の周辺をなぞるに過ぎないと思います。ここでは紙数に限りがあるので、驚くべき象徴の例をいくつか選んで挙げることにします。

---

33. 聖書は、他とは比べ物にならないほど、すべての点において独自のものです。(1)世界中の書物で唯一、聖書だけに真の預言が書かれています。(2)本章で示されているように、聖書だけが、多くの「象徴」、つまり新約聖書で成就された旧約聖書の間接的な預言を含んでいます。(3)聖書だけが、多くの人々によって証言されている、多くの真の奇跡の記録を書き記しています。(4)世界中の書物で聖書だけが唯一、完璧な神人(メシヤ)について語っています。(5)聖書は、世界中の歴史書の中で唯一、偏見なく登場人物を描き、長所と同様に、短所や失敗もあるがままに表しているのです。(6)あらゆる古代文書の中で、聖書だけが、何年も後に近代科学によって証明された、自然や科学のさまざまな真理について触れています。(7)約40人の著者によって書かれたにもかかわらず、聖書の持つ驚異的な**統一性**は、それが神の霊感によって書かれたことを世に示しています。

旧約聖書における神の息子、イエスのはりつけは、他の何よりも頻繁に、象徴によって表されています。アベルによって神へのいけにえとして殺された動物が祭壇に捧げられた時から、イエスのはりつけの直前（ユダヤの過ぎ越しの祝いで、子羊がいけにえとされた時）まで、神に捧げられた動物のいけにえはすべて、十字架上のイエスの死を象徴しています。過ぎ越しの祝いでは、子羊が殺され、その血は家の玄関の扉の淵にまかれ、人々は焼かれた子羊を食べます（出エジプト記12:1-13参照）[34]。これらはすべて、イエスの十字架のはりつけについて表していたのです。そしてまた、ユダヤ教の司祭が動物のいけにえを祭壇に捧げた(レビ記章1-6)時もまた、十字架のはりつけを象徴していたのです。イエスがはりつけにされたカルヴァリの十字架で、まるでいくつもの光の線が十字架に収束されていくように、多くの間接的預言が実現されるのを目撃するのです。その十字架の光景は、まばゆい栄光を放って燃えたつ焦点ともいえます。旧約聖書を開いてみてください。あらゆる箇所に、**イエスに関する象徴**を見つけることができます。

(イエスに関する間接的預言を特に多く含む)創世記を読むと、神の創造された万物の長としての**アダム**も、新しく創造された万物の長であるイエスの象徴であることがわかります(コリント人への第一の手紙15:45-49)。**ノアの箱舟**は人々を裁きの洪水から救うひとつの手段でした(創世記6-9章)。イエスは救いの箱舟です。信仰によって、イエスの元に来る人はすべて、罪に対する来るべき裁きの洪水から救われます。アブラハムにより神へのいけにえとされることになっていた**イサク**の話(創世記22章)は、父なる神により、イエスがいけにえとされたことを描く特に豊かな象徴です。父親に愛され、兄弟たちに憎まれ拒絶された**ヨセフ**の人生(創世記37章)は、主イエス・キリストと100以上の類似点を持つ驚くべきものです。イエスもまたヨセフのように、父に愛され、同胞（ユダヤ人）によって憎まれ拒絶されたからです。ヨセフは非ユダヤ人のもとへ行き、その地で妻をめとり、その結果、多くの者たちを飢餓から救うことになりました(創世記章39-47)。同様に、イエスも同胞(ユダヤ人)から拒まれ、その福音は非ユダヤ人たちに述べ伝えられることになりました。その

34. 過ぎ越しの祝いの子羊を焼く時、その本体を上から下へと縦方向に、そして右肩から左肩にかけて横方向に、串を突き刺すしきたりになっていました。従って、過ぎ越しの祝いの子羊はすべて、十字架のかたちに突き通されたわけです。同様に、モーセは青銅の蛇(民数記21章)を、普通の竿の上ではなく、2本の木材をあわせて十字架の形にしたもの（これは当時イスラエルの部族の紋章を掲げるために使われていた）の上につけたのです。

結果、数え切れない数の人々が救われ、命のパンを与えられたのです。話の終わりで、ヨセフは兄弟たちに自分の正体を明かし、彼らを飢餓から救う道となります。イエスも同様に、終わり間際のこの最後の日々に、イスラエルへご自分を明かし、彼らの多くを救われることになっています(ゼカリヤ書12:10、ロ―マ人への手紙11:25-26)。

出エジプト記には、**過ぎ越しの祝いの子羊**(前述の出エジプト記12章を参照)の話だけではなく、イエスのすばらしい人生と務めの象徴である、**モーセ**の人生と務めの話があります。モーセは初めは彼の同胞(ユダヤ人)によって拒まれ、エジプトから非ユダヤ人の国へ逃げ、その地で非ユダヤ人の妻をめとります。その後、ヘブライ人を解放するためにエジプトに戻り、民の指導者として受け入れられ、奴隷として束縛されていた彼らを大勝利のもとに解放し、エジプトから連れ出します。このイエスの象徴は非常に壮烈です。イエスも、イスラエルでの第一の到来時に拒まれ、最終的に(ユダヤ人と非ユダヤ人の信仰者たちによる)新しいイスラエルのメシヤ、救い主、指導者として受け入れられることを表わしているからです(使徒行伝7:22-37、特に35節)。

サムエル記上下に書かれている**ダビデ王**の人生も、上の例のようにメシヤ・イエスの人生を表しています。ダビデは少年期に羊飼いをしていました。初めはサウル王に拒まれ、殺されそうになり、後にイスラエル人よって受け入れられ、神に選ばれて王座に着きました。ダビデ王はまさに、第一の到来でご自分の羊のために命を犠牲にした「**善き羊飼い**」であり、第二の到来で**王**として万物を治められるメシヤ・イエスの**象徴**となったのです。

アロンと**メルキセデク**は**司祭長**としてのイエスを表し、**モーセ**と**サムエル**(そして他のすべての預言者たち)は偉大なる預言者としてのイエスの象徴となっています。

民数記21:5-9に、おのれの罪のために神による死の判決で死に直面する人々を救う手段として、**青銅の蛇**をさおにつけて人々の面前に高く掲げらるように、神がモーセに言ったという話があります。その青銅の蛇を見上げれば、誰でも命をとりとめるというのです。このさおの上の青銅の蛇が**十字架の上で行われた贖罪と救いのみわざの象徴**であることは、イエスご自身の言葉で解き明かされました(ヨハネによる福音書3:14-18)。

聖書のヨナには、非ユダヤ人に説教する前にくじらに飲み込まれ、その体内に「三日三晩」閉じ込められ、「死と復活」に似た体験をした預言

者**ヨナ**の話があります。この経験は、死後「三日三晩」地獄におられ、復活によって地獄を出られたイエスの象徴となっています(マタイによる福音書12:40―ここでイエスが自ら、ヨナの体験をご自分の死と復活の象徴とされています)。

「**幕屋**」(エルサレムの神殿が立てられる前、ユダヤ教の神殿として使われた大きなテントとその周辺部。その内部で司祭が聖職の務めを行い、その外部周辺に人々が礼拝のために集まった)。(出エジプト記25-31章、35-40章)は、全象徴の中で最も広範にわたり、意味深いもののひとつです。その司祭、いけにえ等の供え物、家具とその配置のすべてが、**イエス**の、そして、信仰者がイエスを通して神に近づく過程の象徴なのです。

(1)動物のいけにえが捧げられている青銅の祭壇は、血による償いを表わします。

(2)清めの洗盤(幕屋で聖職を行う前に、司祭が手や足を洗うために用意された水槽)は「御言葉による水の洗い」(エペソ人への手紙5:26)による私たちの魂の清めを表します。

(3)毎日供えるパンを置くテーブルは、主の民の食物であり強さでもあるイエスの象徴です。

(4)7本の枝を備えた純金の燭台は、世の光であるイエスの象徴です。

(5)香をたく祭壇は、神の御坐に届く祈りと嘆願を象徴します(ヨハネの黙示録8:3)。

(6)最も聖なる所に置かれている(7で説明されている)木箱の上部である神の恵みの場は、神の赦しを受け神の御前に寄る唯一の道であるイエスを象徴します(ルカによる福音書18:13―「神よ。こんな罪人の私を憐れんでください」という収税人の祈りは、「神よ、恵みの座で私にお会いになってください」と言い換えることができます)。

(7)最も聖なる所に置かれている、神の法が納められた木箱は、私たちの代表であり、神と私たちの間の仲裁人であるイエスを象徴しています。その木箱は純金で覆われていました(出エジプト記25:10-11)。これは、イエスの人間性(木材)と神性(純金)を表しています。その木箱の中には、「マナ〔ヘブライ人が砂漠をさまよっていた時、神によって与えられた天のパン〕の入った金の壺、〔奇跡的に〕芽を出したアロンの杖、神の法が記された二つの石板」(ヘブル人への手紙9:4)の三つが納められていました。これらは、命のパンとして天国から降りてこられたメシヤ、そのメシヤの復活、そして神

の法を完璧に守り通したメシヤを表しています。イエスのみが、心においても、神の法を完全に守るのです。これはまた、イエス・キリストへの信仰によって救われた人々の象徴でもあります。もし私たちが神の子であるなら、次の3つが私たちの内に存在しているはずです。

(A)命のパン(イエス・キリスト)。イエスは「神の御言葉」(ヨハネの黙示録19:13)と呼ばれています。

(B)私たちは、迫害を通じて信仰を試されるのです。その火がどんなに凄まじくなろうとも、神の御言葉を撤回することなく信じ続け、その試練に耐えることにより、火によって純化される純金のように清くなれるのです。

(C)アロンの杖は、根もない枯木の枝であったにもかかわらず、開花し実を結びました。これは、イエスが私たちの内に住まれてみわざを行っておられれば、私たちは神の戒律を守ることができることを表しているのです。イエスは復活です。命であるイエスは永遠に生きるので、イエスが私たちの中に住まわれれば、私たちもまた永遠に生きるのです。私たちは故に、死後、天国で永遠に生き続けるのです。人間である私たちの身体は枯木の枝のようなものです。しかし、命の君であり「私はある」であり、最初であり最後、初めであり終わりである命のパン、つまりイエスの恩恵により、私たちは永久に、不死の魂として天国に住み続けるのです(ヨハネによる福音書6:35、8:58、使徒行伝3:15、ヨハネの黙示録22:13)。

(8)ユダヤ人の中心にあった幕屋は、人々と共に住まわれた、人間化した神であるイエスを表しています(ヨハネによる福音書1:14)。

壁板、そしてそれを支える台座、幕、天幕の覆いなど、幕屋に関連する**あらゆるものが**、そして幕屋で行われるすべての務めが、何らかのかたちで**イエス**を象徴しています。

レビ記23章にある**主の様々な祭**は、イエスによる民へのみわざと行い、およびイエスを通した(特にイスラエルへの)神のご計画の展開を、段階的に美しく象徴しています。

旧約聖書には来るべきメシヤの人と行いについて明確に示す、多くのすばらしい**象徴**が含まれているのです。

旧約聖書におけるメシヤの象徴は、神のメシヤであるイエスをより深く理解するための道を開いてくれます。ヘブル人への手紙は、これら旧約聖書の驚くべき象徴が単なる偶然の結果ではなく、（イエスの到来以前の）人々が、十字架の上での犠牲も含めて、メシヤの人と行いを理解できるよう、神によって考案されたものであることを明らかに述べています(ヘブル人への手紙5-10章)。「モ―セが幕屋を建てようとした時、シナイ山で神から指示を受け、天にある幕屋の型に寸分違わぬものを造るように、警告された」のです(ヘブル人への手紙8:5)。言い換えれば、**神**は「天の事象の」具体例を明かすために、こうした象徴(この章で紹介された特別な人々、幕屋と神への礼拝、およびイスラエルの歴史における出来事)を考案されたのです。

結論

私は本書で、以下の事実を明確に提示したと信じています。

(1)聖書のみに真の預言が記されていること、(2)そしてこれらの預言は、疑いの余地無く、新約聖書の中心人物ナザレのイエスが、旧約聖書で預言されたメシヤであることを**証明している**こと、(3)メシヤ(イエス)が人間化した**神**であること、(4)聖書は神の御言葉であること、(5)聖書の神が唯一の真の神であること、(6)人の永遠の魂の救いは、私たちの罪のために十字架の上で犠牲になった救い主イエスの信仰に全面的にかかっていること。

それ以上に、これらの偉大な事実が真実であるだけでなく、本書で示した証拠により**立証可能である**ことが明らかになったため、私たちは救いのためにイエスを信じるだけでなく、すべてがその権力に従い、イエスのために生きるべきなのです。聖書は、私たちの永遠の運命はイエスの信仰にかかっていると言っており、(「**神の息子**を信じる人は永遠の命を得るが、神の息子を〔信じ〕、従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる」〔ヨハネによる福音書3:36〕)、この真実を広めることが私たちにとって最大の願望となるはずです。「この**御名**〔イエス〕の他には、世界中でどのような**名**も、人間を救う名として与えられていないからです」(使徒行伝4:12)。

「これらについて特に書いたのは、イエスが神の息子メシヤであることをあなたたちが信じるため、そして、信じることによって命〔永遠の命〕を得るためです」(ヨハネによる福音書20:31)。

永遠の命を得たいと願うなら、次のとおり祈ってください。

主なる神よ、罪人である私をお赦しください[35]。私はイエス・キリストが神の息子だと信じています[36]。私はイエスが十字架に架けられ、死に、私の罪をすべて赦すためにその尊い血を流したと信じています[37]。神が聖霊の力によってイエスを死から復活させたと、私は信じています[38]。そして今、イエスは神の力として高められた地位に着き、私の罪の告白と、この祈りをお聞きになっていると信じています[39]。私は自分の心の扉を開き、あなたを私の心に招き入れます、主なるイエス様[40]、あなたがカルバリーの十字架のもとで私のために流した尊い血で、私の罪をすべて洗い流してください[41]。主なるイエス様、あなたは私を退けません。あなたは私の罪を赦し、私の魂を救ってくださいます。私にはそれがわかっています。なぜならあなたの言葉、聖書がそう語っているからです[42]。あなたの言葉によると、あなたはどんな者も退けません。そのため、私を退けることもありません[43]。ですから、私の祈りがあなたに届いたことを私は理解しています。あなたが私に応えてくださったことを理解しています。そして、自分が救われたことを理解しています[44]。主なるイエス様、私の魂を救ってくださって、ありがとうございます。そして私はあなたの命に従い、もう罪を犯さないことによって、感謝の念を表します[45]。

こうして救われたあなたは、天の父の名において、また神の息子であるイエスの名において、さらに聖霊の名において、完全に水に身を浸し、洗礼を受けなければなりません。命を得るために、神の命令のすべてに従ってください。

アラモ牧師の文献と「メシヤ」の書は、ほとんどの言語で入手可能です。

私たちのウェブサイトwww.alamoministries.comを訪ね、教会についての説明を十分に読み、教会の音楽をお聞き下さい。

購入する余裕のない方のため、聖書を無料で提供しています。アラモ牧師の他の文献についてもお問い合わせください。アラモ牧師の説教のテープも数多く用意されています。

---

35. 詩篇 51:5、ローマ人への手紙 3:10-12、23 **36.** マタイによる福音書 26:63-64、27:54、ルカによる福音書 1:30-33、ヨハネによる福音書 9:35-37、ローマ人への手紙 1:3-4 **37.** 使徒行伝 4:12、20:28、ローマ人への手紙 3:25、ヨハネの第一の手紙 1:7、ヨハネの黙示録 5:9 **38.** 詩篇 16:9-10、マタイによる福音書 28:5-7、マルコによる福音書 16:9、ヨハネによる福音書 2:19、21、10:17-18、11:25、使徒行伝 2:24、3:15、ローマ人への手紙 8:11、コリント人への第一の手紙 15:3-7 **39.** ルカによる福音書 22:69、使徒行伝 2:25-36、ヘブル人への手紙 10:12-13 **40.** ローマ人への手紙 8:11、コリント人への第一の手紙 3:16、ヨハネの黙示録 3:20 **41.** エペソ人への手紙 2:13-22、ヘブル人への手紙 9:22、13:12、20-21、ヨハネの第一の手紙 1:7、ヨハネの黙示録 1:5、7:14 **42.** マタイによる福音書 26:28、使徒行伝 2:21、4:12、エペソ人への手紙 1:7、コロサイ人への手紙 1:14 **43.** マタイによる福音書21:22、ヨハネによる福音書 6:35、37-40、ローマ人への手紙 10:13、ヤコブの手紙 4:2-3 **44.** ヘブル人への手紙11:6 **45.** ヨハネによる福音書 5:14、8:11、ローマ人への手紙 6:4、コリント人への第一の手紙 15:10、ヨハネの黙示録 7:14、22:14

Tony Alamo, World Pastor
Tony Alamo Christian Ministries Worldwide
P.O. Box 6467
Texarkana, Texas 75505
USA

24時間の祈りとインフォメーション・ライン
(479) 782-7370
FAX: (479) 782-7406
ウェブサイト: www.alamoministries.com

アラモ・キリスト教会は、心から主に仕えたいと希望する方を歓迎し、住居をはじめ、生活に必要なものを提供しています。

礼拝は日曜を除く毎晩、午後8時から（日曜は午後3時、午後8時から）、以下の場所で行われます。

ロサンゼルス地域
13136 Sierra Hwy., Canyon Country, California 91390

アーカンソー州
4401 Windsor Dr., Fort Smith, Arkansas 72904

礼拝はニュージャージー州エリザベス、
アーカンソー州テキサカーナから南15分の場所でも行われています。
詳しい場所は、お電話でお問い合わせください。

礼拝後は食事が提供されます。以下の場所から、教会までの無料送迎をいたします。

Hollywood Blvd.とHighland Ave. (カリフォルニア州ハリウッド)の角から、日曜を除く毎日午後6時30分発、日曜午後1時30分及び午後6時30分発。

本書には、真の救済の計画が示されています(使徒4:12)。ぜひ周囲の方にもお渡しください。

他国の方々も、この文献を母国語に翻訳されるよう奨励します。印刷する場合は、以下の著作権と登録内容を必ず含めてください。

© Copyright 1980, 1990, 2000, 2003, January 2005 All rights reserved
World Pastor Tony Alamo ® Registered 1980, 1990, 2000, 2003, January 2005
(The Tony Alamo Christian Ministries is a division of Music Square Church, Inc.)